
FIRE EMBLEM
紋章の謎・上
篠崎砂美
Sami Shinosaki
【ファイアーエムブレム・紋章の謎】
SPECIAL STORY
ファミ通文庫

ファイアーエムブレム

紋章の謎　紋章の謎・上

篠崎砂美

FB
Famitsu Bunko
ファミ通文庫

篠崎砂美

Sami Shinosaki

1960年7月22日生まれ。埼玉県出身。ファンタジーから近未来アクションまで幅広く手がける。裏設定満載の緻密な作風が好評。著書に『ファイアーエムブレムトラキア776』(全3巻、エンターブレイン)、『ブレイク―エイジ　戦士たちの夏』(アスペクト)など多数。『マッチメーカ1』というパソコン用ロボットバトルシミュレーターのデザイナーでもある。
http://hp.vector.co.jp/authors/VA000787/

日野慎之助

Shinnosuke Hino

1973年11月26日生まれ。滋賀県出身。メーカーでコンシューマーゲームのキャラクターデザイナーとして活躍後、イラストレーターとして独立。『ファイアーエムブレムトラキア776』全3巻のイラストとオリジナルコミック(いずれもエンターブレイン刊)を担当。ほかに、『トリスメギトス　光の神遺物』、『狂骨歌　神咒鏖殺行　巻之壱』(いずれも角川書店)などのイラストがある。

カバーイラスト／日野慎之助



紋章の謎・上

ファイアーエムブレム　紋章の謎

マルス

英雄アンリの末裔で、アリティア王国の王子。暗黒戦争では全ての元凶であるメディウスを倒し、戦争を集結させた。戦後は、壊滅状態の祖国復興に全力を注ぐ。

シーダ

暗黒戦争時、マルスが匿われていたタリス王国の王女。今はマルスと正式に婚約し、結婚式を待つばかりなのだが……!?





オグマ

元奴隷剣士の凄腕傭兵。奴隷剣士時代にシーダ王女に命を助けられ、それが縁でタリス王国傭兵隊隊長となり、暗黒戦争でも大活躍する。

シリウス

不気味な仮面で素顔を隠す謎の騎士。偶然、オグマの危機を助け、マルス軍と行動を共にする。

ナバール

"紅の剣士"と呼ばれる傭兵。味方につけると心強い仲間だが、彼を束縛できる者はこの世に存在しない。孤高の戦士。

ゴードン
アリティア騎士団員として暗黒戦争に参戦。戦後、アカネイアのジョルジュに弟子入りし腕を磨いた。

ジョルジュ
アカネイア王国随一、というか大陸全体でも1、2を争う弓の使い手。祖国への忠誠心も強い美丈夫。

ミシェイル
マケドニア王国国王。暗黒戦争では野望のため父王を殺害しドルーア帝国と手を組む。妹であるミネルバとの戦いの後に行方不明となるが……!?



ファイアーエムブレム

紋章の謎〜紋章の謎・上〜

篠崎砂美

ファミ通文庫

イラスト　日野慎之助

目次

History

アカネイア暦五九七年、メディウスが復活。ドルーア帝国を再興する。
五九八年、マケドニア王国とグルニア王国、ドルーア帝国と同盟を結ぶ。
六〇〇年、ドルーア帝国がアカネイア王国に侵攻を開始。暗黒戦争始まる。
六〇二年、グラ王国、ドルーア帝国と内通。
同年、アリティア王国滅亡。マルス王子は、タリス王国に逃れる。
同年、アカネイア王国滅亡。ニーナ王女幽閉される。
六〇四年、ニーナ王女、オレルアン王国へ脱出。
同年、ニーナ王女の檄文(げきぶん)に呼応して、タリス王国でマルス王子決起。
同年、オレルアン王国解放。マルス王子、ファイアーエムブレムを授かる。
同年、オレルアン・アリティア連合軍、アカネイアにむけて進軍開始。
同年、アカネイア王国解放。
同年、グラ王国、滅亡、アリティア王国領に。カダイン解放。アリティア王国解放。
同年、アカネイア・オレルアン・アリティア連合軍、ドルーア帝国にむけて進軍開始。
同年、グルニア王国占領。アカネイア王国領に。
六〇五年、マケドニア王国解放。

同年、ガーネフ死亡。メディウス死亡。ドルーア帝国滅亡。暗黒戦争終結。
同年、ハーディン、ニーナ王女と結婚。アカネイア王国第二四代国王に。
六〇七年、アカネイア神聖帝国建国。
同年、グラ王国、アリティア王国から独立。
同年、グルニアで反乱が起きる。英雄戦争の始まり。

世に暗黒戦争と呼ばれる大戦は、地竜メディウスの死によって幕を閉じた。
もっとも、それが死と呼べるものであるのならばだが。
マルスの光剣ファルシオンの一撃を受けて絶命したメディウスの身体は、巨大な岩塊に変化して大地の中に沈んでいったのである。ファルシオンはメディウスの生命力を放出させて、地竜を封印したのだった。神竜とならぶ竜族最強の存在であり、暗黒竜と称されるメディウスは、本質的に不滅なのだ。それこそが、勇者アンリによって倒されたはずのメディウスが、一〇〇年の時を経て復活した理由なのであろう。
そして時は流れ、平和の陰で闇は再び胎動を始めたのである。

六〇九年、アカネイア連合王国記録室資料より


アカネイア大陸
オルレアン
カダイン
タリス
アリティア
グラ
アカネイア
ドルーア
グルニア
マケドニア

プロローグ　王国

大陸を支配していた古代竜族は、種としての存亡の危機を迎えていた。次々と理性を失い、野獣と化していったのだ。

彼らの持つ強大な魔力に身体や脳が耐えきれずに精神的な崩壊を起こしたと言う者や、進化の頂点を過ぎて退化の時代に入ったと言う者や、竜特有の新種の病気によるものではないかと言う者がいたが、原因は定かではなかった。

結果として竜族は竜としての力を捨て、当時の獣たちの中でもっとも知性の高い人間の姿となることにした。だが、すべての竜族がそうしたわけではなく、最終的には種族を二分する戦いとなり、竜族の文明は終焉を迎えた。

時代は人間のものとなったのである。

最初に生まれた国は、アカネイア聖王国であった。大陸南東の温暖な半島部に生まれた国である。

昔、豪族が戦いに明け暮れるアカネイア地方に忽然と現われた無頼の男が、類い稀な財力をもって強大な傭兵部隊を作り上げた。アドラと名乗るその男は、強大な軍事力で瞬く間にアカネイア地方を

統一してアカネイア聖王国を起こしたのである。

王都パレス周辺の穀倉地帯に支えられて国は栄え、やがてレフカンディ・メニディ・ディール・アドリア・サムスーフ・アリティア地方などに多くの移民を送り出して大国へと発展していった。

その後アカネイア聖王国は五〇〇年近く続くことになるのだが、竜族（マムクート）の起こしたドルーア帝国によって滅ぼされる。

後にドルーア帝国が滅ぼされた後、アカネイア聖王家の血を引くアルテミス王女と聖騎士カルタスによってアカネイア王国として再興される。その後は、ドルーア帝国との戦いに功績のあった者たちに大陸の各地を領土と認めて国を起こさせるとともに、未開地を開（かい）墾（こん）させ、それら各国の上に君臨する盟主国として以前にまして繁栄した。だが、その実体は一元支配的な性格が大きく、各国に不満をいだかせる結果となっていった。

そして、再び蘇ったドルーア帝国が、アカネイア王国に不満をいだくグルニア王国・マケドニア王国と同盟する。その同盟軍によって、アカネイア王国は滅ぼされるのである。

この暗黒戦争時、アカネイア王国はオレルアン王国・アリティア

王国と同盟軍を結成し、最終的にドルーア帝国を打ち破って再度王国を立て直す。

復興したアカネイア王国は、ニーナ王女と彼の夫となったオレルアンのハーディン侯が治め、後にアカネイア神聖帝国として周辺諸国を属国化した大国となっていくのである。

ドルーア帝国は、メディウスが起こした国だ。大陸の南に位置する最大の島の北部に生まれた国である。

住民のほとんどはマムクートであり、メディウスが大陸の各地から集めた者であった。その他に、多くの人間を奴隷として使役していた。

アカネイア聖王国を滅ぼして大陸に覇を唱えるが、後に人類の連合軍に滅ぼされている。

その後、復活したメディウスによって一時再興され、マケドニア王国・グルニア王国とともに再度アカネイア王国を滅ぼして大陸の支配国となるが、アリティア王国を中心とする解放軍にまたしても敗れ去っている。

オレルアン王国は、大陸東部の広大な草原地帯に生まれた国である。

第一次ドルーア戦争の後に、アカネイア王国のカルタス王は北に位置するオレルアン平原の平定に乗り出した。増加する人口のため、新たな領土が必要になったのである。

遊牧民が暮らすオレルアン平原は、まとまった一つの軍隊を持たなかったため、強大なアカネイア軍によって瞬く間に平定されてしまう。平定後カルタス王は、オレルアン王国を弟のマーロン伯に起こさせた。名目的にはアカネイア王国の兄弟国であるが、実質はアカネイア領である。

だが、定住地を持たないオレルアンの遊牧民を支配するのは困難であった。特に、先住民に隷属化を強いたために反発が大きかったのである。

王家にしても、当初は血のつながりが大きかったものの、国として独立しているとは言い切れぬ状態に不満は山積していた。それを打破したのが、後にアカネイア王となるハーディンであった。オレ

ルアンの民を味方につけた彼は、国内のアカネイア勢力を一掃し、真にオレルアン王国の独立と統一を成し遂げたのである。

けれども、それによってオレルアン王国とアカネイア王国の関係が悪化したというわけではなかった。というよりは、その前に暗黒戦争が始まってしまったのである。そのため、オレルアン王国は、対等の立場でアカネイア王国との絆を深める結果となった。

アリティア王国は、勇者アンリが起こした国だ。大陸中央部の内海に位置する島国である。

メディウスを倒したアンリが、その功によって生まれ故郷のアリティア地方を領地として貰い、独立した国としたものである。その陰には、アルテミス王妃の力が大きく関わったと噂される。

湿地帯の多い島国であったアリティアは、各島へ橋を架けて交通の便をよくし、勇者アンリ麾下（きか）の勇猛な騎士団を擁して小国ながらも独立をゆるぎないものとしていった。立場的には、軍事同盟としてのアカネイアの要（かなめ）と言える存在であった。

ただし、アリティアも波風一つ立たなかったわけではない。アン

リが生涯妻を持たなかったために後継者争いが起こり、アンリの弟のマルセレス王のアリティア王国と、彼と対立した一派が起こしたグラ王国とに分裂する。

後に和解して同盟を結ぶ両国であるが、グラ王国がドルーア帝国に内通したためアリティア王国は滅亡する。だが、難を逃れたマルス王子によって、グラ王国は滅ぼされる。

マルスによってアリティアも復興し、王位継承者のいなかったグラ王国はアリティア領とされた。

その後、ハーディン皇帝からグラ王家の王女が見つかったとの知らせがあり、グラは再び独立国家となる。だが、その実体は、傀儡(かいらい)の指導者を戴くアカネイア神聖帝国の属国であった。

タリス王国は、モスティンが起こした国だ。大陸の東の海洋に浮かぶ島国を領土とする小国である。

アカネイア七王国の中では一番新しく、そして、小さな国である。

豪族同士の戦いに明け暮れていたタリスで、モスティンは島の統一に乗り出した。その中には、後にモスティンの妻となる放浪の天

馬騎士の姿もあった。
勢力的に劣るモスティンが最終的にタリスの統一を成し遂げたのには、アリティア王国の援助が大きい。モスティンの妻がかつてアリティア王国に身をよせていたことがあり、彼女の要請に当時のアリティア王マリウスは密かにロレンスを始めとする傭兵たちを送り出したのである。この絆は、後に暗黒戦争時にマルス王子がタリス王国へ亡命するきっかけとなっている。

マケドニア王国は、アイオテが起こした国だ。大陸の南に位置する最大の島の南部地方に生まれた国である。
ドルーア帝国時代に、奴隷とされた人々が反乱を起こして逃げ込んだのが島の南部の密林である。アイオテは人々を導いて激しく戦い抜き、第一次ドルーア戦争の大きな力となった。
戦後、アイオテは開墾に注力し、アカネイア王国も積極的にこれを支援した。それによって、マケドニアは独立した国家となれたのである。だが、これには、旧ドルーア帝国領土跡にできたグルニア王国を牽制させる意味が秘められていた。

このように、一見アカネイア王国とマケドニア王国との関係は良好のように感じられたが、実際は違っていた。アカネイア王国は、奴隷の身分であったアイオテを王としたマケドニア王国を、自国よりも低い存在としてみていたのである。事実、国土の大半が密林であるマケドニア王国は、初期にはアカネイア王国の援助がなければ食糧すらことかく状態であった。そのため、援助とともに多くのアカネイア王国の役人がマケドニア王国にやってきていたのである。彼らによる内政干渉は、マケドニア王国が完全に自立できた後も慣習として根強く残り、不満の種となっていた。

そのため、暗黒戦争時にはミシェイル王子がドルーア帝国と結び、アカネイア王国を滅ぼそうと画策するに至ったのである。だが、結局彼の野望も潰え、現在はミネルバ王女によって暫定的な統治が行なわれている。

グルニア王国は、オードウィンが起こした国だ。建国時は、大陸の南に位置する最大の島の北部地方にあった国である。

ドルーア帝国の滅亡後、その跡地に建国されたのがグルニア王国

であった。初代国王の座には、アカネイア王カルタスの右腕であったオードウィン将軍が推挙されて就いた。再びマムクートが集結することがなきようにと、優秀な人材を送り込み、素早い対応ができる独立国家の体制が整えられたのである。

だが、それは思わぬ状況に発展した。

人望厚きオードウィンが、予想以上にグルニア王国を発展させ始めたのである。また、彼がマムクートに対しても懐柔策をとったために、まったく敵対勢力がなかったということが富国政策を可能にしていた。

アカネイア王国としては、同等かそれ以上の国力を持つ国家が登場することは容認できなかった。ただでさえオレルアン王国の反抗分子に手を焼いていた時期である。流刑地であるペラティ島に族長クラスを人質として送っても、オレルアン王国の反体制勢力を押さえられないでいたのだ。もし、彼らが国力をつけたグルニア王国と手を結べば、アカネイア王国にとって最大の脅威となるだろう。

そのため、アカネイア王国はマケドニア王国を使って牽制しようとしたのだが思ったような効果は得られず、ついに強行手段に出た

のだった。
島内をマケドニアに統一するという名目で、オードウィンを西の未開拓の島へ追いやったのである。南北と東をマケドニア王国・アリティア王国・アカネイア王国に囲まれたグルニア王国では、戦争になった場合、現在の軍事力での勝ち目は薄かった。また、戦争による民の被害も考えて、オードウィンは移住を決意した。彼を慕った民の多くは同行し、新天地にグルニア王国が再建されたのである。
だが、未開の島に一から国を作ることは言葉で言い表わせるほど簡単ではなかった。いつしか、グルニア王国の国民にアカネイア王国に対する怒りが根づいていったのも不思議ではないだろう。
その結果、グルニア王国はドルーア帝国と手を組んで一時アカネイア王国を滅ぼすことになるのである。
だが、反撃されたグルニア王国はあっけなく占領され、アカネイア王国の支配下におかれたのだった。
病死した国王ルイにはユミナとユベロという双子の子供がいた。グルニア王国の国民の希望とは裏腹に、彼らの王位継承は認められず、グルニア王国はアカネイア神聖帝国時代となっても占領支配が

続いたままであった。
そして、不満の火種は爆発したのである……。

第1章　遠征

1

「グルニアを滅ぼす」
ハーディンが、容赦なく言った。
王座に座ってアカネイア騎士団の代表たちを見下ろす彼には、「草原の狼」と呼ばれていたかつての自由奔放な若者の面影はなかった。険しい瞳は眼光鋭く、虚飾(きょしょく)を帯びた服装は威圧的であった。
しばらく前からは、いつも彼の傍(かたわ)らにあったニーナ王妃の姿も見えなくなっている。彼の不興を買って軟禁されているのだった。
そのため、ハーディンを諌(いさ)める者はおらず、アカネイアの国政はすべて彼の独断で行なわれるようになっていた。
ハーディンは変わった。
近衛隊長としてハーディンのそばに控えていたミディアは、顔を曇らせた。短く斬り揃えられた髪の下で、青い瞳が微かに細められる。女性の騎士としてはアカネイア最高位として普段から凛々(りり)しくある彼女も、まがまがしい威厳を備えたハーディンのそばではどこか居心地が悪いようである。

「恐れながら申し上げます。グルニアで起こったのはたかが反乱でございます。首謀者を捕らえれば、それですむことかと存じ上げます」
勇気を持って、ミディアが進言した。
「なにぃ」
ぎろりと、ハーディンが頭(こうべ)を巡らせて彼女を睨んだ。
「はっ。勅命承りました！」
室内に響き渡る声で、アストリアが言った。ハーディンが何か言おうとするのを、絶妙のタイミングで邪魔をする。
「直ちに我が傭兵部隊を出発させたいと思うのですが、よろしいでありましょうか、皇帝陛下」
金髪碧眼の傭兵隊長が続けた。
「むろんだ。ジョルジュの自由騎士団も同行せよ。そなたたちで事足りるとは思うが、別途アリティア軍もさしむけるつもりだ。それと、もしもに備えて私もアカネイア騎士団の全軍を出撃できるようにしておく」
ハーディンがうなずいた。話を出兵そのものに戻す。
「では、すぐに兵たちの許に参りたく思いますので、私はこれで。ミディア殿には、傭兵部隊への装備支給の相談がありますので御同行願いたい」

アストリアはそう言うと、強引にミディアを連れ出してその場を退出した。
「では、私も準備にとりかかります」
ハーディンに一礼すると、ジョルジュも彼らの後を追っていった。上手に、ハーディンが二人を呼び止めるタイミングを逸らす。
足早に通廊を抜けると、来賓用の小部屋の一つに入る二人の姿を見つけてジョルジュもそれに倣った。
「どういうつもりだ。お前もレフカンディ侯のように投獄されたいのか」
部屋にはいると、語気荒くアストリアがミディアに詰めよった。
「だからといって、こんなことを見過ごしていられると言うの」
負けじとミディアが言い返す。
「やめないか二人とも」
やんわりとジョルジュが二人の間に割って入った。後ろに束ねた金髪が、勢いで左右にゆれる。美丈夫でならした最高の射手も、恋人たちの言い争いの前では、どうにも手の出しようがないようだ。
「たとえ不満があろうとも、陛下の命令は絶対だ。それに、ロレンスが反乱を起こしたのは事実だ」
やや落ち着きを取り戻しながら、アストリアが言った。

「でも、ロレンス将軍は、かつてドルーア帝国に対して一緒に戦った仲間じゃないの。そんな将軍をあなたは討てると言うの」

「なら、なぜ反乱など起こす」

強い語調でアストリアがミディアに反問した。

「では、なぜ将軍は突然グルニアの司令官から外されてしまったのよ」

ミディアが問い返した。

先の大戦終了後、グルニアはアカネイアの占領下となっていた。王家と騎士団が壊滅したとはいえ、民の不満を押さえる目的で占領軍が配され、司令官としてロレンス将軍が任に就いていたのだ。

これは、マルス王子とシーダ王女の強い推薦もあっての人事であった。決定を下したのはニーナ王妃である。ハーディンも、それを快く認めたかのように見えた。

期待通りにロレンスはよくグルニアを治め、戦争で疲弊（ひへい）したグルニアの復興に努めた。グルニアこそ第二の故郷と公言してはばからない放浪の将軍に、国民も信頼をよせていったのである。

すべてが順調にいくと思われた矢先、突然ロレンスは罷免（ひめん）された。理由は、彼がグルニア王家の遺児である双子の、ユベロ王子とユミナ王女を密かに見つけだしてグルニア王家復興を目論（もくろ）んでいるというものであった。

実際、ロレンスはカダインにかくまわれていた双子を帰国させていた。それは、先頃のグラの独立によるところのものが大きい。グラ王家の血を引くシーマ姫をパレスで発見したハーディンは、アリティア領となっていたグラを独立させ、彼女を王位に就けたのである。

それを知ったグルニアの国民たちに、自分たちもという気運が高まっても不思議ではなかった。

だが、ハーディンはこれを、ロレンスが傀儡の王を立てて、そのまま自分が後見人としてグルニアを牛耳るための謀略だと決めつけた。明らかな、アカネイアに対する翻意であると。

身の危険を感じたロレンスは、側近たちと双子をかくまってグルニアに潜伏したのである。

すぐに派遣された新司令官ラング将軍は、かつてアドリア侯だった男である。先の大戦で、ドルーア帝国に懐柔された彼は、サムスーフ侯ベントとともに戦争に参加しなかった。レフカンディ侯カルタスが、ガーネフの謀略によって内紛で出兵できなかったため、アカネイア王国はミディアの父であるディール侯シャロンとジョルジュの父であるメニディ侯ノアの兵力だけという本来の半分の戦力で戦うしかなく、あえなく帝国軍に破れたのである。それゆえ、なぜハーディンがラングのような男を重用したのかミデ

ィアたちには理解できなかった。

当然のようにラングが善政を敷くはずもなく、グルニアはアカネイアの役人の搾取の対象と成り下がってしまった。

やがて、国民の不満が爆発し、見るに見かねたロレンスが反乱の狼煙（のろし）を上げたというわけなのであった。

「正しい沙汰を下すのならば、ロレンス将軍は反乱の咎（とが）を負うとしても、ラングの不正も処罰し、グルニアはグラのように独立させるべきだわ」

「正しい裁きが下されるならばな。だが、陛下の下した命令はグルニアの殲滅（せんめつ）だ。臣下としては、それに従うしかあるまい。もともとグルニアは敵国であったのだ、完全にアカネイアに併合されたとしてもおかしい話ではない」

アストリアが、ミディアに言った。

「二人とも、いつからそんなに腑抜けになってしまったのかしら」

柳眉（りゅうび）を逆立てて、ミディアがアストリアとジョルジュを睨（にら）んだ。

「ミディア、くれぐれも早まってはいけないよ。君たちは、まだ祝言（しゅうげん）もあげていないじゃないか」

さりげなく、ジョルジュがミディアに忠告した。他の家臣のように、ハーディンの不興を買って牢に入れられることを恐れたのだ。そうなってしまってからでは、ジョルジ

身を買って牢に入れられることを恐れたのだ。そうなってしまってからでは、ジョルジュでもかばいきれる自信はなかった。
「それとこれとは、話が別だわ」
いいかげん気分を害したのか、ミディアは部屋を出ていこうとした。扉を開けたところで、彼女が振り返る。
「それから……、助けてくれてありがとう」
そう言って、ミディアは扉を閉めた。

2

「全員騎乗！」
額に深い皺を刻んだ白髪の老将軍の口から、若者に負けない声が響く。ジェイガンの声に、アリティア騎士団の精鋭たちが一斉に馬に乗った。
先頭をいくのは、新たに騎士団長となったアランの率いる騎馬隊である。少しきつい顔立ちのアランは病気で一時期騎士団を離れていたが、復帰後にジェイガンによって団長に抜擢されたのであった。
騎馬隊の後にはゴードンの率いる弓兵隊が続く。アカネイアのジョルジュに師事して弓の腕を磨き、今ではアリティア一の弓の使い手として、帰国後に弓兵隊を任されてい

る。
その後にマルスの旗本隊が続き、殿（しんがり）はドーガの重装騎士団が務めた。無骨な鎧に似合わぬ優しい顔立ちの青年は、歩兵たちを束ねる将軍としてアリティア騎士団になくてはならない存在に成長していた。
今回の出兵には、アリティア騎士団のほぼ全軍が参加している。
「お淋しいですか、シーダ様」
ゆっくりと遠ざかっていく隊列を城の窓から見下ろしているシーダに、カインが言葉をかけた。その隣では、マルスの姉のエリスが同じように外を見ている。
今回のカインは、居残り組である。本人は貧乏くじだとしきりに抗議したが、騎士団が留守の間のアリティアを守るという重責は、彼以外には頼めないと言うマルスの言葉に、しぶしぶ承知したのだった。暗黒戦争では親友のアベルとともに戦場を駆けめぐった赤毛の青年も、今では将軍の一人としてアリティアの重鎮（じゅうちん）となっていたのだ。
アベルがいればとカインは悔やんだが、退役して武器屋を営むようになった親友を再び引っ張り出すわけにもいかなかった。マケドニアからアベルを慕って押しかけてきているエストとの幸せを壊す気にはなれなかったのである。
けれども、同様にタリスからマルスを慕ってやってきたシーダは、今回の出兵でいとも簡単に甘い日々を壊されてしまった。

大戦後にマルスとシーダは正式に婚約を交わしていた。
戦後のアリティア国内の復興もめどがついたため、やっと婚姻の日取りも数週間後と決まり、シーダも正式にアリティアへやってきていたのだった。
だが、ハーディンの命令書はマルスたちの都合をまったく無視していた。
もちろん、異議を申し立てるという選択肢もあったのだろうが、マルスはそうはしなかった。
もともと、アカネイアとアリティアの関係は、上下関係で成り立っていたのである。
アルテミス王女が、アンリへの褒賞としてアリティア王国を造らせたのだ。
そのため、アカネイアから見ればアリティアは自国の一地方という見方が根強く残っていた。また、アンリが無償の忠誠を生涯アルテミスに捧げたため、アリティアは常にアカネイアの盾となって戦えという国是が残されていたのである。
それゆえ、アカネイアからの要請や命令を、アリティアが断ることなどは考えられないことであったのだ。
「淋しくないと言ったら嘘になるでしょう。本当は、私もマルス様の隣に立って一緒にいきたいのですけれども……」
シーダが、ぽつりと本音を漏らした。
二年前にマルスとともに戦場を駆けめぐった少女も、今はすっかり大人びた娘に成長

していた。王族の風格が自然と身につき、より女性らしくなったシルエットが彼女を一段と魅力的に見せている。
「それでは、マルスが戦えないですものね。あの子は、心配性ですから」
「いえ、優しすぎるのですわ、お義姉（ねえ）様。私だって、役に立ちますのに」
エリスの言葉に、シーダが束の間お転婆な少女の顔に戻って答えた。見つめるエリスの顔が、マルスに見えてくる。姉弟であるから当然であるが、シーダと二人だけの時の優しいマルスは、しとやかで静かなエリスとそっくりであった。
「ロレンス将軍と戦わなくてはならないのですから、あなたは連れていきたくなかったのでしょう」
マルスの心中を察して、エリスが言った。
「それこそ、私が将軍を説得もできたでしょうに」
大軍を動かしながら、自分だけ除け者にされた悔しさを込めてシーダが言った。
ロレンスがグルニアで反乱を起こしたという知らせは、マルスたちにとって衝撃的であった。彼を信頼していたからこそ、マルスとシーダはグルニア占領軍の司令官に推したのだ。彼なら、民のことを考えてくれると信じてのことである。
それゆえに、ハーディンの命令に納得できないながらも、マルスは大軍を指揮してグルニアへとむかったのであった。それは、大軍でロレンスを一気に倒そうということで

はない。圧倒的な戦力差を見れば、ロレンスほどの男なら投降するだろうということを期待してのことである。また、もしアカネイア軍がロレンスたちを殲滅しようとしても、アリティア軍がアカネイア軍の歯止めになるだろうという考えからである。

マルスにとって、何よりも知りたかったのはロレンスの、そして、ハーディンの真意であった。そのためには、何としてもロレンスと話がしたかったのだ。

「何があったのかはまだ分からない。だが、あのロレンス将軍が私利私欲のためにグルニアを我が物にしようとしているなどとは考えられないんだ」

マルスは、軍師としてつきそっているジェイガンに言った。初陣を飾ってからすでに三年が経っている。かつて少年であった王子は、一国の指導者として、立派で精悍な青年に成長していた。

彼の周りも、また変化している。モロドフは高齢のために軍を退き、同じく高齢で前線を退いたジェイガンがその替わりを務めている。アリティア騎士団長にはアランが就任し、カインやドーガは将軍として、ゴードンも部隊長として若きアリティア軍を支える重鎮となっていた。アリティア騎士団も、マルスと同様に若い世代が立派に成長し、次の世代を導いている。

「私もそう思います。ここは何としてもグルニアへ急ぎ、反乱軍とアカネイア軍の全面対決だけは避けなければなりません」

老いてなお矍鑠（かくしゃく）とした態度で、ジェイガンが答えた。
「正面から戦うことだけが、騎士団の使い方ではないということだな。戦わずして戦いを収められれば、それにこしたことはない」
先の大戦だけで、大規模な戦争は充分だとマルスは言いたかった。
ここでグルニアがアカネイアに戦いを挑んでも、戦力差は明らかである。それは、アカネイア軍によるグルニアの民の虐殺という結果を招きかねなかった。最初から戦いにならないはずなのだ。
「こんな思いで、再びこの道を進軍するとは思わなかったな。皆は、どう思っているのだろう」
同行する兵士たちの感情を思って、マルスはつぶやいた。
彼の危惧とは裏腹に、グルニアへと至るこの道を初めて辿る新兵たちも少なくはなかった。彼らの思惑は、また古参の兵士たちとは別のものであった。
「いよいよ初陣だな、腕がなるぜ」
馬の上で武者震いしながらルークが言った。かつてのカインを思わせる、短く髪を切りそろえた血気盛んな若者だ。戦後にアリティア騎士団が再編成される時に志願した成り立ての騎士である。
「今からあまり張り切りすぎると、本番で疲れて何もできなくなるぞ」

すぐ後ろを歩いていたロディが、彼のそばに馬をよせて言った。かつてのアベルを思わせる、栗色の長い髪をした物静かな若者である。親友であるルークとは好対照であると言えた。
そして、もう一人、彼らのそばに馬をよせてくる者がいた。
「そうそう。ロディの言う通りよ、ルークったら」
セシルが、赤毛をかき上げながらロディの言葉に賛同する。二人とは幼馴染みの彼女は、女の子らしい外見とは裏腹に、男勝りの女丈夫であった。いつも元気いっぱいで、ドレスよりも乗馬の方が好きといった具合である。
「セシルまで、そりゃあないだろう。初陣になるのは確かなんだからさあ」
ロディよりもセシルに言われたことを気にして、ルークは馬をならべて仲良く自分の横を走る二人に言い返した。
「そこ、隊列を乱すな」
話し込む三人に、アランが注意した。慌てて、ロディとセシルが元の位置に戻る。
困ったものだという顔をすると、アランは大きく咳き込んだ。しばらく小康状態を保っていたのだが、ここにきてまた持病が悪化しだしていたのだ。今回の遠征では、それをマルスたちに隠して参加している。
アランやジェイガンのような年長者がいるにしろ、アリティア軍の主体はまだ若年の

若者たちである。だが、それゆえに、彼らは活力に満ち、恐れを知らなかった。総数でアカネイアやオレルアンに劣るとはいえ、その勇猛さでは決してひけをとってはいなかったのである。そして、何よりも、指導者であるマルスに似て純真であった。そのことが、後に彼らを大きな戦いの渦に巻き込んでいくのである。

「グルニアに到着しているアカネイア軍には、兄さんのお師匠様もいらっしゃるのでしょうか」

ライアンが、兄のゴードンに訊ねた。尊敬する兄の後を追って、弓兵になったばかりの若者だ。兄はずいぶんと少年らしさが消えて大人っぽくはなったが、もともと童顔であるため年よりもいくぶん幼く見える。まして、同じような顔立ちのライアンは、本当に少年であった。

「たぶん、すでに到着していらっしゃるだろう」

ゴードンが、ジョルジュのことを思って言った。

アカネイア随一の弓の腕を持つジョルジュに惚れ込んだゴードンは、暗黒戦争の後しばらく彼に師事していたのだ。そのおかげで、弓の腕前は素晴らしく上達させることができた。やがて帰国してアリティア騎士団に戻ったゴードンは、弓兵隊を率いる隊長として、後進にジョルジュから教わった技術や精神を教えているのである。

「パルティアというのは、さぞかし凄い弓なのでしょうね」

噂に聞くアカネイアの至宝の弓に思いを馳せながら、ライアンが言った。

「ああ、確かに凄い。だけど、結局は弓は引く者の心を反映するんだ。邪心ある者の矢はまっすぐに飛びはしない。それを忘れちゃだめだぞ」

「はい」

素直に答える弟の言葉を聞いて、自分の言葉が師匠の受け売りだと分かっているゴードンは心の中で苦笑いした。

大陸本土に渡ったアリティア軍は、海岸沿いに西進し、カシミア大橋に達した。かつてグルニアの黒騎士団と激闘を繰り広げた場所だ。その大橋を、アリティア軍は整然と進軍していった。

すでにアカネイア軍が通過した後だとはいえ、抵抗一つなく、真新しい戦闘の痕跡すら見あたらない。

それが、今のグルニアの状況を物語っていた。反乱軍には、はなから一国の軍隊を相手にするだけの力はないのだ。

グルニア国内に入ったアリティア軍は、グルニア城を目指して南下していった。

マルスたちを恐れるように道中の町や村は堅く門扉（もんぴ）を閉ざし、さながら無人のようであった。

「戦争中だからといって、せっかく助けにきてやったのに愛想がないことだな」
あからさまに歓迎されていない雰囲気に、ルークが愚痴をこぼした。
道々状況を把握するために民家などに立ちよっても、最初は恐れて何も話してはくれないのだ。やがて重い口が開かれると、そこからはアカネイア軍の傍若無人さ、とりわけて司令官であるラングの非道さしか出てこなかった。
そのまま戦いも起きず、やがてマルスたちは無事にアカネイア軍と合流することができた。
「ずいぶんと遅かったではないか。すでに、反乱軍のほとんどは我が軍が処刑してしまったぞ」
グルニアを占領するアカネイア軍の司令官であるラングが、開口一番マルスに言い放った。禿頭の、いかにも狡猾と言った雰囲気の初老の男である。人をねめつけるようなその瞳は、信用のできない光に満ちていた。
「処刑？　ラング将軍、それはどういう意味ですか」
穏やかではないと、マルスは聞き返した。
「言葉通りの意味だが、何か意見でもあるのか。もとより、反乱分子はその一族もろとも処刑と相場は決まっておる。わしは、その常識に従ったまでよ」
平然とラングは答えた。

「馬鹿な、家族に何の罪があると言うのです。そのような暴挙は許されぬことです」

思わずマルスは叫んだ。本人だけでなく、家族の者にまで手を出すというのは、かつてのドルーア帝国にも等しいやり方だ。

「何を甘いことを。反乱者は、根絶せねばならんのだ。そのような甘さが、グルニアの遺児を生きながらえさせ、今日の戦いを招いたのではないのか。素直に先の大戦で処刑していれば、今日新たな血は流れなかったはずではないか。やれやれ、青二才には、手間をかけて教えてやらねば分からぬと見えるな」

厳しい表情になるマルスを見下しながら、ラングが顎髭を指先でなでつけた。いかにも、何かを企んでいるといった様子だ。

「一国の指導者に対して、その物言いは失礼であろう」

たまらず、ジェイガンが口を挟んだ。

仇を見るような目つきで、ラングがジェイガンをねめつける。

マルスは、無言でジェイガンを後ろに下がらせた。

それを見て、ラングも視線をマルスに戻した。

「全軍の指揮権はわしにある。わしの言葉は、ハーディン皇帝陛下のお言葉と考えられよ。同盟国といえど、しょせんはかつてアカネイアの一地方であった小国。命令には従ってもらえましょうな」

その言葉に、マルスはうなずくしかなかった。
認めたくはなくとも、ラングが全権を担った指揮官であるというのは事実だ。アリティア軍は、それに協力しにきたに過ぎない。ここで逆らえば、アカネイアとの国際問題になる。
それは、マルスの望むところではなかった。
「せっかく遠征してきたのだから、貴公らにもちゃんと獲物は残してある。反乱軍の首謀者は、西の砦に立てこもっている。これを殲滅してもらいたい。だが、そこにいるであろう双子は、生かしたまま捕虜にするように。皇帝陛下が直々に沙汰(さた)を下す」
そう言うと、ラングはマルスに反論を許さなかった。
マルスとしても、とりあえず双子の命が保証されるならと承諾した。
もとより、ロレンスをも殺すつもりはない。マルスとしては、ハーディンが出てくるのならば、直接交渉すれば分かってくれると信じていたからである。
先の大戦では、ハーディンは常にマルスと肩をならべて戦った同盟軍の重鎮の一人である。マルスは、彼を信頼しきっていた。
「では、わしはグルニア城にいるゆえ、後ほどみえられよ」
そう言い残して、ラングが部隊を率いて去っていった。
ロレンスが立てこもる砦の包囲は、一部を除いてアカネイア軍からアリティア軍に引

き継がれたのである。だが、ぎくしゃくした両軍の引き継ぎは、順調に行なわれたとは
言い難かった。

3

「敵軍に動きがあるな。包囲網が崩れたようだ」
部下からの報告を聞いて、ロレンスが言った。隻眼（せきがん）の老将軍の濃い白髯に被われた顔は、苦渋に満ちていた。
「ユミナ殿下、ユベロ殿下、今のうちにオグマとともにお逃げください。マケドニアには、あなた方をガーネフの手から守ってくださったウェンデル司祭がおられます。司祭ならば、再びお二方をお守りくださるでしょう」
ロレンスは、椅子に座って食事をとっていた双子に告げた。
「何を言い出すの、ロレンス。私は逃げません」
姉であるユミナが、はっきりとした言葉で言った。年の頃はまだ十かそこらだが、しっかりとした態度からも、負けん気の強い性格が見てとれる。
「僕も、ロレンスのそばを離れるのは嫌だ」
弟のユベロが、少し巻き舌の口調で姉に続いた。双子だというのに、その性格は正反

対だ。見るからにおとなしく、少しおどおどとした雰囲気の少年である。

「よろしいのか」

双子の護衛として常にそばについていたオグマが、二人に確認を求めた。左頬に大きな刀傷のある、高名な傭兵だ。

彼の言葉に対して、双子がうなずく。

オグマは、ロレンスからの援助の要請を受けて、タリス王が密かに遣わしたのであった。国として表立って手をさしのべるわけにはいかないため、タリス傭兵部隊の籍を離れての独断ということになっている。

「しかし、我らにはもう勝ち目はありません」

ロレンスは、再度ユミナに言った。

「覚悟なら、最初からすでにできていました。国民の悲惨な姿を見て、私たちは立ち上がったのでしょう。志を同じくしてくれた人々の多くが、この戦いで命を落としました。その犠牲を無駄にして、我々が逃げ出してどうするのです。それに、怪我を負ったあなたをおいていけません」

ユミナが、ロレンスの傷を気遣いながら言った。

少ない手勢での無理な戦いの中で、ロレンスは深い傷を負っていたのである。だが、彼はその痛みをおくびにも出さずに指揮をとり続けていた。

それを知るからこそ、双子たちも自分たちだけが逃げるということを認められなかったのである。

「そうですか。幸いにして、敵軍にはアリティア軍が合流したようです。あの中にはマルス王子がおられるはず。彼ならば、我々の心を分かってくれましょう」

ロレンスは、諦めたようであった。最初から、この反乱がうまくいくとは思ってはいなかったのである。

それでも、アカネイアに虐げられているグルニアの民を見て、彼は黙っていることができなかった。ユミナたちも、ずっと同じ思いであったのだ。

彼らとしては、反乱を起こすことによってグルニアの現状を世界に知らしめることが目的であった。

彼らだけの力で、グルニアの独立を勝ち取れるとは最初から考えてはいなかった。すくなくとも、グラの独立をあっさりと認めたマルスならば、グルニアの味方になってくれると考えたのである。

だが、情報封鎖によって、ロレンスたちは孤立してしまった。

事前にタリスと連絡を取れたことの方が奇跡で、アリティアやマケドニアやカダインへは反乱の詳細は伝わらなかったのであった。

「では、オグマ殿だけでも、今のうちに脱出されよ。できれば、マルス殿に会ってもら

えれば道が開けるかもしれない」
「いや、それは無理だろう。将軍、それはあなたも分かっているはずだ」
ロレンスの言葉に、オグマがきっぱりと答えた。
「アリティアとアカネイアの関係を考えれば、表だってアリティアが反旗を翻すことはできない。ラングは小狡い悪党だ。そのくらいのことはあくどく利用するだろう。だから、俺は、自分のやりたいことをやるつもりだ」
「何を考えているのだ」
瞳に怒りの炎を宿した傭兵を見て、ロレンスは訊ねた。
「ラングの首を取る。俺一人でも、いや一人だからこそ、それが可能だろう。奴には罪を償わせねばならないし、奴以外のどんな人間が後釜にやってきたとしても、今よりはましになるに違いない」
きっぱりとオグマが言った。その決意は、ゆるぎないもののようであった。
「そうか。では、そなたの好きなようにしてくれ。だが、決して無理はされるなよ。そなたを死なせたとあれば、モスティン殿に申し訳が立たんからな」
オグマの決意の固さを見て、ロレンスはもう引き留めはしなかった。彼ならば、本当にやってのけるかもしれないと思う。どのみち、ロレンスには、自分ではもうそうすることはできないと分かっていた。ならば、オグマに託したいという思いも微かにあった

のである。

「死ぬつもりはないさ。もし首尾よくいけば、アカネイア軍は混乱に陥るだろう。マルス殿がいれば、すぐに収められてしまうとは思うが、そのわずかの隙に可能ならば逃げのびてくれ」

そう言い残すと、オグマは砦を離れていった。

4

「砦の包囲が完了いたしました」

ドーガが、マルスの許に報告に現われた。

「少し手間取ったようだな」

「はっ。未だに敵がロレンス将軍だというのが信じられず、古参の兵たちの動きが鈍くなっております」

ジェイガンの問いに、ドーガがおずおずと答えた。彼自身、そのうちの一人なのであろう。

「それを確かめるためにも、敵を投降させるんだ。私たちがロレンス将軍と戦って喜ぶのはラングだけだ。決して、こちらから攻撃を仕掛けてはならない。兵たちにもそれを

徹底させてくれ」
「はい。アラン殿にそう伝えます」
マルスの命令を受けて、ドーガは下がっていった。
「とりあえず、近くの町の宿屋を接収しました。そこを拠点として、今後の対策を練りましょう」
ジェイガンが、マルスを促した。すぐに攻め込まないと決めてある以上、じっくりと腰を据える手はずを整えたのだった。
「そうだな。急ぐことはない。砦を包囲した以上、中のロレンスたちを外に出さないと同時に、ラングたちを砦に近づけないようにもできたはずだ。何とか、ロレンス将軍と会談の場を作り、平和裏に事を収めよう」
マルスはジェイガンにうなずくと、その宿屋へとむかった。
突然アリティア軍にやってこられた件(くだん)の宿屋の主人は、これ以上ないほどに混乱しながら、すべてを差し出してもてなすので命ばかりは助けてくれと懇願する有様であった。
「私たちは野盗ではありません。ちゃんと宿代はお支払いしますし、物や人を傷つけたりもしませんよ」
にっこりと微笑みながら、マルスは言った。その言葉に、主人は驚きながらもどこかまだ不安げであった。

「私たちは、ラングとは違います」

マルスは、きっぱりと言った。

どうやら、ラングは軍のための物資を、町々から強制的に奪っていたらしい。主人の話によれば、逆らう者は容赦なくその場で斬り殺されたという。

「酷い話だ。なぜハーディンは、あのような男をロレンス将軍の替わりに司令官などにしたのだろう」

案内された部屋にむかいながら、マルスは隣を歩くジェイガンに言った。

その時、途中の部屋の扉が閉まる微かな物音がした。

「誰か泊まり客がいるのか」

ジェイガンが訊ねる。事前に聞いた時には、誰もいないはずであった。当然のように、主人が首を横に振る。すぐにマルスとジェイガンが目を交わし合った。刺客でも潜んでいては困る。

二人は剣を抜き、怯(おび)える店主を無視して件の部屋の扉をジェイガンが勢いよく開けた。

だが、中には誰もいなかった。

念のためにと、マルスがクローゼットの扉を開けた。

「お願い、連れていかないで。助けて」

中で膝をかかえていた少女に叫ばれて、マルスは目を丸くした。青みがかった銀髪を

紐で縛ったあどけない顔立ちの少女が、小さくなって怯えている。
「大丈夫。僕たちは何もしないよ。君は誰なんだい。なぜこんなところに隠れていたんだ」
緊張を解くと、マルスは剣をしまって手をさしのべた。
「あたしは、マリーシア」
恐る恐る少女は名乗った。
彼女の話を聞いて、マルスは再び怒りをあらわにした。
ラングは、反乱の起きる前に、隠れたユミナたちを見つけるために容赦なく町々を荒らしたのだ。
そのついでと称して、金品を略奪し、自分の好事(こうず)を満たすために年頃の娘までも集めていたのだった。
連れ去られた娘たちは、その後で奴隷商人に売られていったらしい。そのため、町の人々は娘たちを必死になって隠しているというのだ。
マリーシアはその幼い顔立ちから難を逃れていたのだが、娘たちの数が減るに従って彼女さえも安全ではなくなり、アカネイア兵の目を逃れるために町を逃げ出してきたのだと言う。運悪く反乱軍とアカネイア軍の戦いに巻き込まれ、ここの主人にかくまってもらっていたらしい。

「もう、グルニアのどこにも安全な場所なんてないんです。全部ラングの思いのまま。お願いです、あたしもマルス様の軍に入れてください。これでも、短い間でしたが旅のシスターに弟子入りしていました。傷の手当てぐらいならできます。もう、私にはグルニアから逃げ出すしか方法がないんです」
懇願されて、マルスはマリーシアを保護することを約束した。ここで見捨てるわけにもいかなかったのだ。
「ありがとうございます」
言うなり、感極まったマリーシアがマルスにだきついた。無下（むげ）に払いのけるわけにもいかず、マルスは困惑した。あらためて、シーダを連れてこなくてよかったなどと心の中で思う。
コホンと一つ咳払いしたジェイガンが、マルスを救ってくれた。引き離したマリーシアとともに、三人で宿の部屋に収まった。
マルスがセシルを呼んでマリーシアを預けようと思った時、ロディが伝令として彼の許にやってきた。ロレンス将軍から投降の申し出があったというのだ。
「反乱に荷担した兵士、およびユミナ王女、ユベロ王子の身の保証が条件だということです」
明快に、ロディがロレンスの言葉だけを伝えた。

「分かった。条件を呑むと伝えてくれ」
マルスが決定すると、ロディは一礼して部隊に戻っていった。
ロレンスの指示で、砦から次々に兵士たちが投降してきた。兵士といっても、市民からの義勇兵がほとんどだ。無血で彼らを武装解除していくアリティア軍に対し、ラング直属の部下であるアカネイア軍は明らかに不満そうであった。今までの戦いでさんざん敵の血を流してきたのに、ここにきての拍子抜けの結末が気に入らないようである。
「後は、ロレンス将軍と王子王女だけなのだな。よし、私がいこう。ドーガとジェイガンは一緒にきてくれ」
マルスに言われて、ドーガが近衛の兵士たちを連れて二人に従った。
ロレンスたちは、閑散とした砦の最上階にいた。
「お久しぶりでございます。マルス様」
ロレンスは剣を床においてひざまずくと、マルスに対して深々と頭を下げた。その姿に、彼の後ろに立っていたユミナたちが驚く。
「ロレンス、なぜそんなことをするのよ」
ユミナが、怒ったようにロレンスの背中を叩いて言った。
「お静かに、このお方こそはスター・ロード・マルス様なのです。ファイアーエムブレムを持つことを許された勇者なのですぞ」

振り返ってユミナをたしなめると、ロレンスは再び頭を垂れた。
「将軍、もう頭を上げてくれ。私はあなたを害しにやってきたのではない。真実を明らかにしたいだけなのだ。ハーディンも、真実を知れば一方的にあなたを責めることはしないだろう」
ロレンスに歩みよると、マルスは彼に手を貸して立ち上がらせた。瞬間顔を歪めたロレンスが、少しよろめきながらも立ち上がる。
「マルス様は、御存じないのです。ハーディンは、変わりました」
ロレンスの言葉に、マルスはどういう意味かと問い返した。
そもそもは、ガーネフによって人質として連れ去られていた双子が、カダインで見つかったことから始まっていた。
餓死寸前の状態で幽閉されていた二人は、ウェンデル司祭によって他の子供たちとともに手厚く保護された。
戦後、シーダによって二人の素性が明らかになると、アカネイア騎士団のトムス将軍がカダインに赴いて彼らを保護している。彼の他には、アカネイア騎士団のミシェランとバーツも同行していた。
だが、保護と言えば聞こえはいいが、それは実質二人をカダインという都市に軟禁することが目的であったのだ。

やがて、ロレンスの要請を受けたウェンデル司祭が、双子を連れ出してグルニアにむかった。そこで二人をロレンス将軍に預けると、ウェンデル司祭はマケドニアへとむかっていった。

当時は、シーマ王女の登場によるグラ王国の独立が国民の話題となっていた。それを知って、ロレンスも二人を帰国させたのである。

当然、ユベロを王位に就けてグルニアも独立をとの気運が高まった。だが、これを知ったハーディンは激怒し、ロレンスは解任されて双子の捕縛命令が出されたのだった。

「思えば、ハーディンは、すべてを計算の上だったのかもしれません。ユミナ様とユベロ様を軟禁して不満をあおり、その一方ではグラを独立させて希望を持たせる。ラングの数々の悪行も、我々の怒りの火をかき立てる油であったのでしょう。我々は、彼の謀略にまんまとはまり、グルニア討伐(とうばつ)の口実を与えてしまいました」

悔しげにロレンスが言った。その程度の策略に乗ってしまったことを、心底恥じているようであった。

「そんな、ハーディンはそんな男ではないはずだ」

信じられないと、マルスは言い返した。彼としては、ロレンスと同じように、ハーディンもまた盟友としてともに戦った仲間である。

「マルス様、ハーディンは、もうかつてのハーディンではありません。権力の座が彼を

狂わせてしまったのでしょう。彼は、アカネイア神聖帝国を作して、この大陸すべてを己が手中に収めようとしているのです。グルニアはその手始めにされたに過ぎません。もし、ユベロ様とユミナ様のお命が失われれば、グルニア王国はこの世から消え去り、アカネイアの完全な領土となるでしょう」

ロレンスが、マルスに語った。それは、この反乱を通して、ロレンスが導き出した答えであった。

「ハーディンが、そんな野望をいだくなんて信じられない。私は、将軍がグルニアを己が物とする野望に取り憑かれたと聞かされても信じなかった。同様に、ハーディンに直接会って確かめるまでは、その話は信じるわけにはいかない。だいたい、ニーナ様がついていて、そんなことをさせはしないだろう」

マルスは、熱く自分の思いを語った。

「あいかわらず、マルス様はお優しい」

ロレンスは、そうとだけ答えた。

マルスは変わってはいないと、ロレンスは心の中でつぶやいた。ハーディンの変貌にくらべれば、マルスは純真なままだ。彼に会うだけで、心が和んだ。それは、マルスの最大の魅力である。だが、優しさだけで、変わってしまったハーディンに対抗できるかは疑問だとロレンスは心の片隅で思った。けれども、人を信じなくなったハーディンに

対抗できるのは、人を信じるマルスの心であることは事実のように思えた。

「どのみち、今の私たちはマルス様にすがるしかありません。どうか、お二人をお守りください」

ロレンスが、マルスに頭を下げて頼んだ。

「当然だ。将軍ともども、ラングの手から守ってみせる」

きっぱりとマルスは答えた。そして、老将軍の頭を上げさせる。

「それを聞いて安心いたしました。では、私は荷物をとって参りますので、少しお待ちください」

満足そうに微笑むと、ロレンスが部屋を出ていこうとする。

「ロレンス……」

なぜか、急に不安にかられてユベロがロレンスにしがみついた。

「大丈夫。私はいつまでも、お二人のそばにいてお守りいたします。ジェイガン殿、私はお二人のそばを片時も離れなかったのです。それを忘れずにいてください」

謎めいた言葉を残して、ロレンスが部屋を出ていった。

砦の物見櫓（やぐら）が爆発を起こしたのは、そのすぐ後のことであった。

爆発音に驚いたマルスたちが外へ飛び出すと、点々と血の跡が物見櫓の方へと続いていた。



「ロレンス将軍……」

マルスは、途中から跡形もなく吹き飛んだ物見櫓を見上げて絶句した。投石機（ストーンヘッジ）用の炸薬弾（エレファント）の火薬を集めておいたのだろう。遺体さえも残ってはいなかった。

「ロレンス、死んじゃったの？」

ユベロが、マルスの服の端をつかんで訊ねた。

「嘘つき。ロレンスのことも守ってくれると約束したじゃない！」

両目に涙を滲ませながら、ユミナが叫ぶ。何と答えていいか分からずに、マルスは立ちすくんだ。

「覚悟の上の自決であったのでしょう。申し訳ありません、殿下。ロレンス殿の真意に気づかなかった私の失態です」

ジェイガンが、マルスとユミナたちに詫びた。ロレンスの言葉の意味を見抜けなかったことを恥じたのだ。

反乱の責任を一身に背負って自決するにしても、あえて爆死を選んだのは死体を確認させないために違いなかった。双子ともども爆死したと見せかけるためである。おそらくは、この戦いで負った傷が、武人としてのロレンスに死を覚悟させるほどに深いものであったのだろう。

「いや、私の責任でもある。とにかく、二人を安全な場所に隠そう。そうでなければ、

ロレンスの行為が無駄になる」

マルスはそう言うと、嫌がる二人を何とか説得して砦の外へとむかった。だが、事態はロレンスやマルスの考えるようには進まなかったのである。

「ほう、これはお見事。ちゃんと、双子を捕まえたようですな」

砦の外でマルスたちを迎えたのは、誰あろうラングその人であった。マルスたちは慌てて双子たちを隠そうとしたが遅かった。おそらくは、彼の部下たちが砦の投降の知らせを逸早く伝えたのであろう。マルスたちは、ラングに先手を打たれてしまったのである。

「さあ、二人をこちらに引き渡してもらおう」

勝ち誇ってラングが言った。

「いや、彼らは我が軍で保護する。直接ハーディン殿に面会してその処遇を相談したい」

双子たちを後ろにかばいながら、マルスはラングに告げた。

「それは異なことを。彼らが反乱を起こしたのは我らアカネイア神聖帝国に対してであって、アリティア王国に対してではないのですぞ。判断は皇帝陛下が、ひいてはその名代であるこのわしが行なう。よけいな干渉は無用。さあ、さっさと引き渡されよ」

ラングが、強い態度に出た。命令された兵士たちが、マルスたちに近づいてくる。

思わずマルスが腰の剣に手をのばすのを見て、ジェイガンが慌ててマルスを押しとど

めた。

「抵抗するつもりか。そんなことをすれば、アリティアもアカネイアに反乱を企てたと見なすぞ」

周囲のアリティア兵たちを見回して、ラングが叫んだ。周りではドーガたちが、いつでもマルスの号令一下で戦えるように身構えている。だが、マルスの眼前でジェイガンが静かに首を振った。今ここで戦って双子たちを守ることができても、それはアカネイアとアリティアの戦争に発展しかねない。ラングという小悪党一人のために戦争を引き起こすことなど愚かしいことだ。

マルスは、ラングの部下たちが双子を連れていくのを黙って見ているしかなかった。憔悴しきったように歩いていくユベロの姿と、敵意を剥き出しにしてこちらを睨みつけるユミナの瞳を、マルスはしばらく忘れることができなかった。

「ラング殿、反乱はこれで終結しました。後の処理はアカネイア軍に任せ、アリティア軍は帰国の途につきたいと思います。ただし、私は今回の報告のために、王子王女たちと一緒にパレスに赴(おもむ)きたいと思うが、よろしいですね」

ラングに対して、マルスははっきりと言った。こうなってしまっては、ハーディンに直談判(じかだんぱん)するしかない。帰国してしまえば、ラングなど一介の将軍だ。自分とハーディンの仲にくらべれば、その存在など無視できるほどだとマルスは考えていた。

「いや、それはできない相談だ」
だが、ラングはマルスの予想しなかった言葉を吐いた。
「何だと。いいかげんに……」
語気を荒立てかけるマルスに、ラングは一通の命令書を渡した。そこには、マケドニアで起こった反乱の詳細が記されてあり、アリティア軍に対して引き続き反乱鎮圧の遠征を命じるものであった。
「信じられない、マケドニアでも反乱だと……」
急転する状況にマルスは絶句した。
「マルス殿は、マケドニアのミネルバ王女とは懇意であったはず。マケドニアでは、反乱軍が国を牛耳り、幽閉されたとされるミネルバ王女の行方も不明のまま。王女の身を心配するならば、急がれた方がよろしいですぞ。我がアカネイア軍は、先にマルス殿の言われた通り、グルニアの後始末に今しばらく時間がかかるゆえ、出発が少し遅れるがよろしいかな」
ラングの言葉に、マルスは拳を握り締めた。先の大戦で、ミネルバ王女の白騎士団はアリティアに亡命し、マルスとともに戦っている。ハーディンとともに、マルスがもっとも信頼している人物の一人であった。そのミネルバが反乱によって窮地にあるのであれば、何をおいても駆けつけたかった。だが、今やロレンスの忘れ形見となった双子を

見捨てるわけにもいかない。

傾かない天秤を心に据えて、マルスは苦しんだ。

「王子……」

ジェイガンがマルスを促した。指導者たる者、決断を下さなければならない時があると老将軍は目で語っていた。

「マケドニアへむかう。全軍、進軍の準備をせよ！」

ラングに背をむけると、マルスは臣下たちにむかって命令した。

このままパレスにむかっても、それはハーディンの要請を無視したことになり、彼も快くは思わないであろう。その場合、マルスの言葉を聞いてくれるかどうかは微妙になる。ミネルバを見捨てても、ユミナたちを助けられる保証はないのだ。逆に、ミネルバを救うことができれば、ユミナたちの件にもマケドニアの協力を得ることができる。

問題は、時間であった。

ユミナたちがパレスで裁かれる前にマケドニアを解放しなければならない。マルスはグルニアの状況を逐一報告するための密偵を多数残すと、急ぎマケドニアへとむかった。

「殿下、よくぞ我慢なされました。心中お察しいたします」

ジェイガンが、マルスに告げた。

もしあの場で戦闘にでもなっていたら、自軍に倍するアカネイア軍を相手に、無意味

な消耗戦は避けられなかったであろう。[illegible]倍もの戦力を有しているのである。

「別に我慢したわけではない。このままラングの非道を許しておくつもりはない。だが、今はマケドニアだ。ジェイガン、進軍を急がせてくれ」

マルスは、断腸の思いで、全軍に新たな命令を下した。

5

「アリティア軍がきてくれたというの」

偵察から帰ってきた天馬騎士の話を聞いて、カチュアが聞き返した。ミネルバ直属のペガサス三姉妹と呼ばれる天馬騎士の、真ん中の娘である。ボーイッシュな出で立ちをしているが、女性らしい物腰は、いかにもマケドニアの天馬騎士らしい。

「ルーメイ将軍の部隊を破り、マケドニア城に迫っているのか。じきにここを通るだろうな。どうするんだ、カチュア」

そばで話を聞いていたウォレンが、カチュアに訊ねた。逞しい身体つきの森の猟師である。独り暮らしであるのをいいことに、城から逃げてきたカチュアたちをかくまっていたのである。

「もちろん、マルス様にお会いするに決まっているじゃない。ミネルバ様をお救いするには、それが一番の方法だもの。マリア様を捜しにいっているパオラ姉様にも早くこのことを知らせないと」

カチュアは、さっそく身支度を始めながら答えた。それに合わせて、彼女と一緒にウォレンの小屋に身をよせていた白騎士団の娘たちも鎧を身につけ始める。

「マリア様か。無事だといいが……」

慌てて部屋の扉を閉め、娘たちの着替えから目を逸らしてウォレンが言った。

ウォレンは、マリアとは以前に、ロレンスという男とともに出会っている。

その時彼女たちが連れていたのは紛れもなく瀕死のミシェイル王であった。

不眠不休のマリアの看病で一命をとりとめたミシェイルであったが、動けるようになったとたんにどこかへ姿を消してしまっていた。

そのことはマリアに堅く口止めされ、ウォレンはその約束を頑なに守り続けていた。

当初、反乱の首謀者はミシェイルではないかと疑ったウォレンであったが、ミシェイルであるならば堂々と名乗りを上げるはずであった。それに、策士であったミシェイルが画策したにしては、この反乱はあまりにも力押しに頼りすぎている。アリティア軍やアカネイア軍が鎮圧にやってくることを見越した戦力配置をしていないのがいい証拠だ。ミシェイルならば、城か国境に全軍を集中配置して少ない戦力を最大限に活用するだろ

う。奇襲部隊以外の戦力を割いて軍を分割配置するなどは並の戦略家の発想かもしれん、軍人でないウォレンが、それを正確に理解していたわけではない。だが、短い間とはいえ、身近で見たミシェイルの剛胆で繊細な性格からすれば、この戦い方はずさんだと言えた。

反乱軍に追われた幼馴染みのカチュアたちを、ウォレンが森の中の自分の小屋にかくまってから三日の時が経っていた。これ以上時間が経てば、重傷を負って囚われているというミネルバの身が危険であった。

「無事に決まってるわ。ミネルバ様だって……、きっと私たちが助けてみせる。さあ、いきましょう」

扉を跳ね飛ばさん勢いで開けたカチュアが言った。

「そうだな」

弓を肩にかけると、ウォレンが答えた。

マケドニア南部の国境地帯で反乱軍のルーメイ将軍を破ったアリティア軍は、密林の中を北上していた。竜騎士団と戦ったことのあるアリティア騎士団は、ゴードンの指揮する弓兵部隊が見事な活躍をして敵を打ち破ったのであった。

進みにくい地形に難儀しながら斥候として先頭を進んでいたセシルたちは、森の中で突然天馬騎士の一団に出会った。

純白の天馬の手綱を引いた若い娘たちが、待ち構えていたかのようにセシルたちを出迎える。瞬間、敵かと身構えたセシルたちであったが、武器を持たずにたたずむカチュアたちを見て、すぐに警戒をといた。天馬騎士のほとんどは白騎士団に属しており、ミネルバの味方だと聞かされていたからだ。
「私はミネルバ様直属の天馬騎士カチュア。アリティア騎士団の方とお見受けします。マルス王子殿下に謁見願いたい」
先頭に立ったカチュアが、堂々とした態度でセシルに言った。同じ女性騎士として、セシルがカチュアの態度に感服する。
「分かりました。御同行ください」
セシルは、カチュアとウォレンたちを連れて急ぎ本隊へと戻った。
「マルス様。お久しぶりでございます」
たとえようのない感慨を込めて、カチュアがマルスの前にひざまずいて礼を捧げた。ウォレンや、他の天馬騎士たちもそれに倣う。
「無事でよかった。ミネルバ殿たちも無事なのか」
カチュアを立ち上がらせながらマルスは訊ねた。
「ミネルバ様は、刺客に襲われて傷を負い、反乱者に囚われております。姉は私とともにミネルバ様を救出しようとしましたが果たせず、今は行方がしれないマリア様を捜し

ております。私は、ミネルバ様救出の機会を[illegible]
馬騎士たちとともに潜んでおりました」
　カチュアが、現在の状況を説明する。
「そうか。急いでミネルバ殿を助けなければ。しかし、なぜ反乱なんかが起きたんだ」
　最大の疑問を、マルスは口にした。
「御存じのように、マケドニアは、ミネルバ様が統治するという約束の下、他国の占領下におかれることはまぬがれました。それをいいことに、かつてのミシェイル派とでも呼ぶべき家臣たちは、ミネルバ様の御命令を無視して身勝手な振る舞いに興じたのです。当然、ミネルバ様はそのような者たちを放逐いたしました。ですが、反乱の首謀者であるリュッケ将軍は密かに追放された者たちを集めて反乱の機会を狙っていたのです」
「そうか……。だが、なぜこの時期なのだろうか……」
　カチュアの説明を聞いたマルスは、ふと考え込んだ。反乱が起こったことは仕方ないとしても、なぜグルニアの反乱と時期が同じになったのであろうか。
「はっ？」
　瞬間意味の分からなかったカチュアが、怪訝そうに聞き返す。
「いや、何でもない。とにかく、私たちがきたからにはもう大丈夫だ。一刻も早くミネルバ殿を助け出そう」

「はい」
マルスの言葉に、カチュアは嬉しそうに答えた。その直後に、少し小さな声でマルスだけに聞こえるように訊ねる。
「あの……、マルス様。シーダ様は御一緒ではないのですか？」
「シーダはアリティアに残してきている。もうじき結婚する予定だったので、さすがに戦いに連れてきたくはなかったんだ。それよりも、カチュアたち白騎士団の活躍には、今度も期待しているよ」
マルスは、すらすらとその問いに答えた。それを聞いたカチュアは、嬉しいような悲しいような、複雑な表情を浮かべて下がっていった。

6

「アリティア軍だと。話が違うではないか。アカネイアはマケドニアの内政には不干渉のはずではなかったのか」
ルーメイ将軍が敗れ、アリティア軍が明日にもマケドニア城に到達すると聞かされた反乱軍首謀者のリュッケ将軍は、報告にきた騎士に我を忘れて怒鳴り散らした。一国の反乱を企てた男としては、風采も上がらずいかにも不似合いである。

あいかわらず[illegible]な、リュッケ。ハーディン[illegible]

　別の騎士に案内されてその場に現われた男が、哀れむようにリュッケに言った。その男の顔を見て、リュッケが驚愕の表情を浮かべる。

「なぜ、あなたがここに……」

　リュッケの前には、先の大戦で死んだはずのマケドニア国王ミシェイルの姿があった。鮮やかな赤毛を靡かせ、勇者然とした大胆な歩き方でつかつかとリュッケの方に歩みよってくる。

　幽霊が現われたのかと、思わずリュッケが数歩後退った。

「そんなことはどうでもいい。どのみち、俺はお前たちにとって死んだも同然の存在だ。俺も、お前たちのやることには興味がない。マケドニアに対する未練などすでに持たない無頼の身だ。だが、ミネルバに対しては違う。俺のけじめとして、奴に止めを刺すのは俺でなければならぬのだ」

　ミシェイルは、威圧的な態度でリュッケに言った。元は一国の王と一介の将軍である。一瞬にして力関係は明らかであった。

「しかし、ミネルバ王女は瀕死の重傷。放っておいても助かりませんが」

　媚びるようにリュッケが答える。

「私の言葉が聞こえなかったのか。ミネルバだけは、俺の手で殺すと言ったのだ。城で

戦って死んだなどという名誉はミネルバには与えん。奴は、何処とも知れずに野垂れ死ぬのが似合いだ。さあ、早くミネルバを渡せ。それとも、俺の剣で貴様に言い聞かせなければならんのか」
ミシェイルに恫喝(どうかつ)されて、リュッケは慌てて地下牢に彼を案内した。
ミネルバは、深紅の鎧を身につけたまま石造りの地下牢の床にぐったりと倒れていた。外傷はないようであるが、赤毛は乱れて頬に貼りつき、真っ青な顔色はすでに死人のようであった。普段の凛々しい姫将軍の姿はそこにはなかった。おそらくは、暗黒魔法ドゥラームによって生命力を損なわれ、瀕死のまま放置されていたのであろう。
ミシェイルはミネルバを毛布にくるんで連れ出すと、自分の飛竜の鞍の前においてだきかかえた。
何日かぶりに動かされて、ミネルバはわずかに意識を取り戻した。
「馬鹿な、兄上が見える。黄泉(よみ)から私を迎えにきたのか……」
わずかに残った気力と威厳を保ちながら、ミネルバがささやいた。
「そうだ。お前を迎えにきた。お前のすべては俺の手の中にある。今は静かに眠っていろ」
つぶやくミネルバの顔に毛布の端をかけ直すと、ミシェイルは空へと舞い上がった。

その翌日、マルスたちはマケドニア城のある島の対岸に陣を敷いた。

マケドニア城は、天然の堀のように広がる環状湖の中心にある島の南東にあった。背後に山を控え、完全な天然の要塞となっている。空を舞う竜騎士にとってはそのような地形は何でもないが、騎兵中心のアリティア軍にとっては攻めるのにやっかいであった。

「ジュリアン、マリア様はまだ見つからないの。アリティア軍が到着して、じきにここも戦場になるわ。早く見つけださないと」

状況報告のために町の広場に集まったジュリアンとマチスにむかって、パオラは苛立ちを隠せずに言った。ペガサス三姉妹の中でも一番大人びた顔がしかめられる。普段はおっとりとした細面の顔も、柳眉（りゅうび）の端を上げて厳しい表情となっている。

「そんなこと言ったって、マリア様どころか、昨日からレナさんまでいなくなっちまったんだ」

半分泣きそうな声でジュリアンが言った。人懐っこい瞳が、赤い前髪を長く伸ばした下から助けを求めるようにパオラの顔をのぞき込むが、この状況下では場違いなことであった。

パオラの頼みを受けて、マケドニアに住んでいたレナとジュリアンとマチスが、反乱の起きた日から行方知れずになっているマケドニア第二王女のマリアを捜していたのだが、その過程でジュリアンの恋人のレナまでも行方が分からなくなってしまったのだ。

「きっと、マリア様を連れ去った一味が、レナまでさらっていったに違いない。貴様がついていながら、この役立たずめが」

レナの兄であるマチスが情けない奴だとばかりにジュリアンを睨みつけた。そんな彼も、妹を見つけられない苛立ちを隠しきれず、短く刈り揃えた髪の毛を掻きむしっている。

「おいらだって、怪しい魔道士風の男たちとか仮面を被った騎士だとかが町をうろついているからと、レナさんに注意するように言おうとした矢先だったんだ。確かに、ずっと俺がそばにいれば、こんなことには……」

悔やんでも悔やみきれないという表情で、ジュリアンが拳を握り締めた。

「もめている場合じゃないわよ。もしかしたら、レナはマリア様の行方の手がかりをつかんで、敵に捕まったのかもしれない。だとすれば、城でミネルバ様と一緒に牢に入れられている可能性が高いわ。ここは、マルス王子と連携して、城に突入して助け出しましょう」

パオラたちが相談して間もなく、アリティア軍と反乱軍との戦闘が開始された。制空権を確保するために、カチュア率いる白騎士団が湖上の竜騎士団に攻撃を仕掛けたのである。

パオラはそれに呼応して、自分に従っていた白騎士団の天馬騎士たちを率いて加勢に

むかった。

挟撃された竜騎士団は、態勢を立て直すために戦場を離脱しようとする。パオラたちは、それをアリティア軍のいる岸の方に追い立てた。待ってましたとばかりに、ゴードンたちの弓兵隊が集中攻撃を浴びせかける。正確な狙いの矢が、次々に竜騎士たちを撃ち落としていく。

「今だ。全軍、進軍開始せよ」

マルスは叫んだ。待機していたアリティア軍が、橋を渡ってマケドニア城へ進軍を開始する。

もっとも不利な橋の上を一気に渡りきると、マルスたちはマケドニア城を包囲した。城の北側からも、マチスの率いる少数の騎馬隊がそれに加わる。

マルスの懸念は、ミネルバを人質として使われることであった。

幸いなことに、敵にその気配はない。

だが、時間が経てば状況がどう変化するかは分からない。それに、マルスには最初から時間がなかった。速攻で城を落として、一刻も早くグルニアに戻らなければならない。

マケドニア城に関しては、先の大戦で一度攻め落としているという経験もあり、カチュアから最近の補修工事の実体も知らされているという強みもある。マルスは総攻撃によってマケドニア城の守りの薄い地点を全力でついた。

反乱軍の少ない戦力で城全部を守ろうと兵を分散していたリュッケは、あっけなく城門を突破された。

「馬鹿な、アリティア軍がもうここまでやってきたというのか！」

一番安全だと信じていた城の最深部にいたリュッケは、あっと言う間に近づいてくる戦いの音に、顔面を蒼白にして叫んだ。

城内の戦いはまさに決戦、一番最後になるであろうと考えていたのが裏目に出たのだ。

「反乱軍の首謀者はお前か」

先陣を切ってきたルークが、リュッケにむかって言った。

「何をしている、奴らを殺せ」

リュッケが命じた時は、すでにアリティアの騎士たちが怒濤のようになだれ込んできた後であった。

大勢が決したことも気づかず、無駄な戦いを挑んだリュッケは、ロディたちと一緒に突入してきたパオラの剣によって命を落とした。

その後は、反乱軍は各個撃破されるか逃亡するしかなかった。マケドニアの反乱は、ここに終結したのである。

記録的な早さで反乱を鎮圧したマルスであったが、城の中にはミネルバの姿も、マリアやレナも発見することはできなかった。

投降した兵士を問いつめると、ミネルバは昨夜密かに城外へ連れ出されたという。

マルスはすぐに捜索隊を組織してマケドニア中を探させたが、結局、ミネルバはもちろん、マリアとレナの行方も杳としてしれなかった。

進展のないまま、二日が過ぎた。その間に分かったことは、反乱があまりにも無計画に行なわれたということだ。リュッケの考えは、ミネルバさえ排してしまえば国民も他国の指導者も自分を王と認めてくれるだろうという安直なものであったのだ。ただ、その程度の男がよく武器などを調達できたものだという疑問が残る。

そんな中、ラング率いるアカネイア軍が遅れ馳せにやってきた。だが、その様子が少しおかしい。

「さすがはマルス王子、見事な手際ですな。見事ついでに次の命令をお伝えする」

ラングの言葉に、さすがにアリティア軍の騎士たちが怒りをあらわにした。パオラたちも、この男は何者なのかと不快な顔をする。だが、マルスは、かろうじて皆を抑えた。

「先日、わしのところから例の双子が逃亡したのだ。逃げた先は、なぜかこのマケドニアらしい。じきに、マケドニアへはアカネイア神聖帝国騎士団が治安維持のために派遣されてくる。それまでにアリティア軍は、即刻二人を見つけて処刑せよとの皇帝陛下の御命令だ。処刑後はすぐ帰国して、マケドニアとグルニアは帝国に明け渡すのだぞ」

「何だと、それは本当にハーディンの命令なんだろうな」

マルスは、ラングの言葉に噛みついた。
それは、アカネイアがグルニアとマケドニアを自国の一部にするという意味に他ならない。ハーディンがそんな命令を下すとは、マルスにはとても信じられなかった。
「もちろんだ。わしの言葉はハーディン皇帝陛下の言葉だと言ってあったはずだが」
臆面もなく、ラングは答えた。だが、その言葉では、この命令が本当にハーディンの発したものか、ラングの独断によるものかは分からない。いや、むしろ後者である可能性が高いとマルスは考えた。先の大戦でアカネイア王家に召し上げられてしまったアドリア領の替わりに、新たに支配したグルニアとマケドニアを領地にして私腹を肥やそうとでもいうのであろう。
「貴様の悪辣さはよく分かった。そんな命令はとても聞けない。王子たちは我がアリティア軍が保護する。その後で、私はハーディンに直接会うつもりだ。そこで、貴様の非道の行ないをすべてハーディンに伝えて、正義の裁きを受けさせてやる」
マルスは、きっぱりと拒絶した。この上は、一国の指導者としてハーディンと話し合うまでだ。
「何を言うか。わしに逆らうということはアカネイア神聖帝国に逆らうことだぞ。やはり、貴様たちは我らが帝国に弓引く時をうかがっておったのだな。双子を連れ出したのが、貴様のかつての部下であったオグマだというのが動かぬ証拠だ。いいか、このこと

はすべて皇帝陛下にお伝えするぞ」

言うなり、ラングは一目散にその場を去っていった。マルスの怒りを恐れて逃げ出したというのが正確なところであろう。自軍の騎士たちの中に戻りついてほっとしたかのようなラングに、部下が近よって何ごとか耳打ちした。

「そうか。とりあえず、人質としてオルベルン城へ連れていけ」

そう命じると、ラングはアカネイア軍を率いてグルニアへと引き返していった。

「追って、奴を捕らえますか」

アランが、いつでも飛び出せるように騎馬の一隊を従えながらマルスに聞いた。

「いや、今奴を捕らえようとすれば、アカネイア騎士団と戦わなければならないだろう。それはまずい。悪いのはラングであり、騎士団ではないのだからな。それこそ、アカネイアとの全面戦争になってしまうだろう。それよりも、早くオグマたちを保護するのだ。ラングも捜索隊は出しているだろう。奴にユミナ王女とユベロ王子を殺させてはならない」

「分かりました。ミネルバ王女とともに、彼らも全軍に捜させます」

マルスの言葉に、アランはあらためて全軍に命令を伝えていった。

マケドニアの反乱の後始末は、牢に囚われていたり身を隠していたミネルバ派の大臣たちに任され、パオラがその選定に奔走した。

その間にマルスやカチュアたちはミネルバやオグマたちを必死に捜した。だが、その捜索網に最初に引っかかったのは、思いもかけない人物だったのである。

「お久しぶりでございます、マルス様」

ゴードンにつきそわれた旅姿の少年が、マルスに挨拶した。大きなつつみを背負い、いかにも旅商人の下男という出で立ちだ。

「リンダじゃないか。また何で昔みたいな変装をしているんだい」

一目でその少年の正体を見抜くと、マルスは不思議そうに訊ねた。

大戦の後、リンダはニーナ王妃づきの侍女として、パレス王宮に詰めていたはずだ。それが、昔ガーネフから逃れるためにとった変装と同じ姿で自分を訪ねてくるなど、何かよくない知らせではないかとマルスは顔を曇らせた。それに、彼女の荷物が妙に気になる。

「実は、ニーナ様からの密命を帯びてマルス様を捜しておりました。グルニアに辿り着いた時にはマケドニアへ出発された後でしたので、急いで後を追ってきたのです」

帽子の中に隠していた髪を解いて女の姿に戻ると、リンダが厳しい面もちでマルスに答えた。二年前とくらべると、格段に女らしくなっている。

「ニーナ様の……。ニーナ様は何と言っておられたのだ」

マルスは、ハーディンのことをニーナに訊ねたい思いでいっぱいであった。彼女の言

「これをマルス様にお渡しするようにと」

そう言って、リンダが背負っていた荷物をマルスに渡した。両手でかかえるほどの大きさの薄い板のような物だ。厚い布で厳重につつまれており、そこそこの重さがあった。マルスは、つつみを解いた。中から出てきたものを見て、彼は思わず声をあげて驚いてしまった。

「これは、紋章の盾（ファイアーエムブレム）じゃないか。なぜニーナ様が再びこれを私に……」

ファイアーエムブレムは、アカネイア王国の秘宝であり、それを持つ者はアカネイア王国の代表であり世界を救う勇者と認められた印であった。それは正義の証であり、その言葉は時の王であっても無視することはできない。だが、それゆえに、ファイアーエムブレムは非常時以外はパレス王宮の宝物庫に厳重に保管されているはずであった。

「ニーナ様は、もしハーディン様が世界を闇に誘（いざな）おうとしているのであれば、マルス様がそれを諫（いさ）めてほしいと言っておられました。マルス様、ハーディン様はもう昔のハーディン様ではありません。猜疑心に取り憑かれて、咎のない人々を次々に投獄しています。ニーナ様でさえ、自室に軟禁されています。マルス様、どうかニーナ様をお救いください」

リンダが、ニーナの苦しい心の内を代弁した。

「ニーナ様が……。分かった。きっとハーディンの真意をただし、ニーナ様をお救いしよう」

そう答えると、マルスは両手の中のファイアーエムブレムを見つめた。

グルニアの反乱、マケドニアの反乱、ハーディンの変貌……。今、世界で何かが起こっている。

ハーディンが、世界制覇の野望に取り憑かれたとするのは簡単であった。事実は、それを裏づけているようにも見える。

だが、マルスはまだハーディンを信じていた。草原で初めて見た彼は、まさに風であった。ニーナと結婚したのも純粋に彼女を愛していたからであり、決してアカネイアの王になりたかったわけではない。そんな彼が、今さら他国をこんな手の込んだ方法で侵略するとは思えなかった。

おそらくは、ラングのような者たちがハーディンの意志を曲げて横暴を行なっているのであろう。マルスは、そう信じたかった。

願わくば、ファイアーエムブレムを掲げることにならなければよいと、マルスは心の中で祈った。

伝承1　王女と勇者

アカネイア聖王国がドルーア帝国に滅ぼされた時、王家の人間は女子供に至るまでがことごとく殺された。

それは、まるでメディウスがアカネイア王家に個人的な恨みを持っているかのようであったという。

だが、王家の中でただ一人、まだ少女であったアルテミス王女だけが難を逃れることができたのであった。時のアカネイア王が、万一のことを考えてパレスに出入りしている商人に彼女を預けたのだ。

その商人は大恩あるアカネイア王の頼みを命がけで守り、何とかアルテミス王女をパレスから脱出させることに成功した。だが、アカネイア聖王国はドルーア兵に蹂躙（じゅうりん）され、発見されるのは時間の問題であった。

一計を案じた商人はノルダで奴隷商人を始めた。

あたかも古くからそこで人身売買を営んでいるように見せかけ、ドルーア本国へ奴隷を輸送する許可を占領軍の将軍から取りつけたのである。もちろん、その奴隷というのはアルテミス王女を始めとする若者たちのことであった。

無事故郷であるアリティア地方に辿り着いた商人は、そこで偽装

であるが。

を解いて姿をくらました。といっても、元の商人の姿に戻っただけ

連れていた少年少女たちはアリティアの修道院にかくまわれ、アルテミス王女はその商人の娘として育てられることになった。

この時、商人の家に奉公人として出入りしていた少年の中に、アンリがいたのだ。

後に大陸の運命を左右することになる王女と勇者は、この時はまだ、ただの少女と少年として出逢ったのであった。

商人の家はアリティア地方では屈指の貿易商であったが、大戦の影響もあってアカネイア聖王国滅亡後は取り立てて名前が知れ渡ることもなく、ドルーア帝国に目をつけられることもなかった。

当時のアリティア地方は、まだ開拓が始まったばかりの土地であり、住民たちもほとんどいなかったのである。

搾取する特産もなく、ドルーア帝国はアリティア地方を無視していた。それどころか、その存在さえ知らなかったのではないかと考えられている。まだ各島々を結ぶ橋もなく、点在する島に開拓民がいるとは考えなかったのであろう。

件の商人は、砂漠の民が各地の遺跡から盗掘してきた装飾品などを買い取り、アカネイア王に転売して懇意となったのである。決して、アカネイアの地で豪華な店を構えていたわけではない。

アカネイア聖王家というお得意を失ってからは、商人は開拓民たちの物流を仕切って生計を立てた。完全自給自足の島の中で、生活用品などの分配を仕切って島民の生活基盤を確立したのである。

そんな商人の家に、開拓民たちは子供を奉公に出したがった。とはいえ、実際に奉公できたのは、賢く品格のある子供たちだけであったが。そして、アンリもその一人だったのである。

素朴で明るい少年であったアンリは、ときおり暗い表情を浮かべる美しい少女を、ごく自然に励ますようになっていった。他の少年少女たちは商人の娘ということでアルテミスに媚びを売ろうとするところが多かったのに対して、アンリは純粋に彼女の友達になろうとした。そして、それは家族をすべて失った哀しみに沈んでいたアルテミスの心をゆっくりと溶かしていったのである。

二人の心が近づいていくのに、時間はかからなかった。

その間にも、アリティア地方にはドルーア帝国に追われた騎士な

どが集まり始め、いつしか反ドルーアの拠点となっていった。当然、それは帝国に察知されることとなる。

だが、その頃には、ドルーア帝国に対する抵抗も、各地で起こるようになっていた。

ドルーア帝国南部ではアイオテの率いる人々が帝国に反旗を翻し、北の草原ではアカネイア騎士団の生き残りを率いたオードウィン将軍が抵抗を続けていた。

アリティア地方でも、聖騎士カルタスを始めとする多くの騎士たちが決起を準備していた。やがてドルーア帝国は、アルテミスの存在に気づいたのであった。

当然、帝国はアルテミスの引き渡しをアリティアに対して要求した。

ここに至って、アルテミス王女は自らの身分を明かしたのである。アリティアの民と騎士たちは、その事実に驚きつつも、彼女を守って戦うことを決意した。

苦労をいとわず何もない土地を開拓してきたアリティアの民の中には、何者にも屈しない熱い血が流れていたのである。

彼女の前には、パレスから持ち出したアカネイア王家の秘宝の数数があった。そのうちの一つ、ファイアーエムブレムをカルタスに与えると、アルテミスは自ら反ドルーアの象徴として立ったのである。

アルテミスの素性を知ったアンリは当初愕然とした。今まで仲のよかった少女が、いきなりもっとも遠い身分の人となってしまったのである。そして、何よりも今までそれを知らないでいた自分自身をアンリは責めた。アルテミスの真の悲しみと苦しみを、本当に理解していなかったことが悲しかったのだ。

庶民のアンリとしては、戦いに赴くアルテミスと話す機会はないように思えた。

だが、いよいよ出陣するという日、アルテミスは密かにアンリを呼んだのであった。

交わされた言葉は少なかったが、その一つ一つにどれほどの思いが込められていたことであろうか。

その場で、アンリはあらためて臣下の礼をアルテミスに対してとった。それが必要だと思ったからだ。だが、その時、アルテミスは

アンリと出逢ってからもっとも悲しい目をした。
それを見てアンリは言った、あなたをもう悲しませたくないと。
自分は一兵士として、アルテミスのために戦うとアンリは誓った。命を懸けて守ると。
アルテミスは、アンリを自分だけのナイトとすると言い、メリクルソードを彼に渡した。
その後の二人の物語は、歴史となって人々の間に語られていくことになる。悲しき物語、アルテミスの運命(さだめ)として……。

第2章　星のかけら

1

「これは……、一足遅かったのか」
オグマは、めちゃくちゃに荒らされた小屋の中を見て拳を震わせた。
やっとの思いで辿り着いたウェンデル司祭の家は、アカネイア軍によって酷く荒らされた後であったのだ。もちろん、ウェンデルの姿はどこにもない。
「こんな物が……」
床に落ちていた一枚の紙を拾い上げて、ユベロがオグマに渡した。
「ふざけやがって、俺はもっと男前だ」
オグマはその紙を一瞥した後、ぐしゃりと握り潰した。それは、急ごしらえの手配書であり、オグマと双子の似顔絵と特徴が書かれていた。本当に慌てて作ったらしく、似顔絵はお世辞にも似ているとは言えない。だが、逃げるオグマたちにとっては、確実に追われているという焦燥感をあおる効果がある。
「すでにウェンデル司祭が連れ去られたとすれば、ここも安全ではなさそうだな。さて、どうする。ミネルバ王女を頼って、船でタリスへ逃げるか……。それとも、旧ドルーアの荒野に隠れるか……」

オグマが思案していると、ユミナが床に散乱した物を物色し始めた。自分用に治癒（ライブ）の杖を見つけだし、弟には火球（ファイアー）の魔道書を手渡した。

「これは何かしら」

ミカンの房のような形をした透明な水晶のかけらを見つけて、ユミナが首をかしげた。かけらの中では、きらきらと星のような金色の結晶が輝きを放っている。

「ここにも同じような物があるな」

別のかけらを見つけて、オグマが言った。同じ形をしているが、中に含まれる結晶の数は微妙に違っている。

部屋の中をくまなく捜して他に同じ物がないことを確認すると、ユミナの見つけた分と合わせてオグマがそれを預かった。

「ねえ、僕はいいよ。これ返す」

ユミナが何のかけらだろうと小首をかしげていると、突然ユベロが魔道書を彼女に突き返した。

「何を言い出すのよ。あなたもそれを持って戦うのよ」

きっと睨みつけながら、ユミナが言った。

「嫌だよ。僕怖いよ」

「そんなこと言ったって、いつ敵がくるか分からないんだから。男だったら戦うのよ」

今にも泣き出しそうな弟に、ユーナが風呂敷を押しつけ

「その方がいい。自分の身は、自分で守るんだ。これから少し忙しくなりそうだからな」

ふいにオグマが厳しい顔で言った。そのまま、扉の横にいって剣を構える。双子に、緊張が走った。

扉が開く。オグマが剣を振り下ろしかけた。

「ちょっと待ったぁ！」

中に入ってきた男が、悲鳴をあげた。オグマの剣は男の顔面の直前で止まっている。もっとも、素早いオグマの剣は、男が叫ぶ前にぴたりと止まっていたのだが。

「カシム、何でお前がここにいる」

ゆっくりと剣を引きながら、オグマが訊ねた。

そこに立っていたのは、タリスの猟師であるカシムであった。気の弱そうな顔を引きつらせながら、愛想笑いを浮かべてオグマの方を見ている。

「それは御挨拶ですね。僕は、シーダ様の結婚式に出ようとアリティアにやってきて、そのままグルニア遠征に巻き込まれて、出稼ぎで軍に加わって、それで、あなたたちを捜すように命令されて、オルベルン城から必死に追いかけてきて……」

カシムが、べらべらと聞かれもしないことまでしゃべり始めた。アリティアで遊びすぎて、タリスに帰る路銀ほしさに傭兵の仕事を引き受けたのである。そのまま、グルニ

アを発つマルスに命令されて、双子の様子を見守っていたのだった。
「マルス様には、もう伝令を出しました。じきにここへやってくるはずです。それまで、この村にゆっくりと腰を落ち着けて……」
なおもしゃべるカシムを、オグマがふいに黙らせた。
「ゆっくりしている暇はないな。お前は、やっかいな客につけられていたようだ」
オグマは、外の様子をうかがいながら言った。小屋を取り巻くように、数人の人影がかいま見える。おそらくは、手配書を見た賞金稼ぎか傭兵だろう。
「嫌だ、本当に私たちを殺しにきたんだ」
ユベロの背中にしがみついたユミナが、泣きながら言った。なんだかんだ強気なことを言っても、やはり女の子だ。ずっと強がっていたのだろう。
だが、それも限界らしかった。
「大丈夫。ユミナは僕が守るから」
健気（けなげ）にも、ユベロがユミナを元気づけた。いざとなれば、やはり男の子だ。
「カシム、二人を頼んだぞ」
そう言うと、オグマは外に飛び出した。逃げるつもりかと、敵がその姿を現わした。
その正体は、マケドニアの海岸を根城にしている海賊たちだ。
「死にたくなければ、武器を捨てて逃げるんだな。俺は、敵に容赦はしないぞ」



オグマは、海賊たちを威圧した。その凄まじい殺気に、思わず海賊たちが後退(あとずさ)る。
「敵は一人なんだ。やっちまえ」
首領のガイルが、部下たちをけしかけた。その言葉に、海賊たちが小屋の入り口を守るオグマにむかって突進していった。
むろん、その後には、悲鳴と血飛沫(ちしぶき)をあげて海賊たちが倒れることになる。オグマの剣は、ますます力強さと鋭さを増していった。歴戦の勇士だけが持つ剣技の冴えだ。海賊程度の我流ではまったく相手にならない。
だが、彼らもそれほど馬鹿ではなかった。いくらオグマが強くとも、たった一人ですべての敵を一瞬のうちに倒すことはできないと分かっていたのである。
海賊たちは三つの集団に分かれると、それぞれが小屋の中に入ろうとした。そのとたん、窓から矢と火球が飛び出して先頭の海賊を倒した。
一瞬怯んだものの、海賊たちは数を頼りに小屋の中に入り込もうとする。斧で壁が壊され、突入口が数を増す。オグマもたった一人で、そのすべての進入路を防ぐことは不可能であった。
「くそ」
小屋の中にオグマが戻ろうとするが、それよりも早く玄関からカシムたちが逃げ出してきた。期せずして、オグマたちが一カ所に固まる。

その時、戦いの場に飛び込んでくる一騎の騎馬があった。持っている銀の槍の一撃で、海賊たちの包囲の一角を切り崩す。
「てめえ、何者……」
ガイルに最後まで言わせず、その騎士は容赦ない一撃で海賊を倒した。
仮面を被ったその騎士の異様な風貌と、首領を一撃で倒した力量を見て、海賊たちが浮き足立つ。
「いけ」
短くオグマに命令すると、仮面の騎士は海賊たちを蹴散らし始めた。その声に、オグマは聞き覚えがあった。だが、彼が生きているはずはない。
「俺についてこい」
カシムと双子に言うなり、オグマは血路を開いてその場から逃げ出した。追いかけようとする海賊たちの前に、仮面の騎士が立ちはだかる。
しばらく走り続けた森の中でやっとオグマたちが休んでいると、仮面の騎士が彼らを追いかけてきて合流した。
「助かった。礼を言う」
オグマが言った。
「そこにいるのは、グルニアの王子王女か」

それには答えず、仮面の騎士が訊ねた。仮面に隠されて、その表情はうかがい知ることができない。
「貴様も賞金稼ぎの一人か」
オグマが剣を構えた。
「いや。私は旅の騎士で、名を……シリウスと言う」
仮面の騎士は答えた。
「シリウスか。得体の知れない男だ……ということにしておこう」
含みのある二人の会話に、カシムが意味を読みとれずにきょとんとした顔になる。
「どうだ、俺に手を貸さないか。俺は、かつてグルニアの将軍であったロレンス将軍に頼まれて、グルニア王家の遺児を守っている。遠からず、グルニアの民を苦しめたアカネイアのラングに引導を渡すつもりだ。これは、お前にとっても悪い話ではなかろう」
「そうだな。暇つぶしにはいいだろう」
オグマの言葉に、シリウスが同意した。
「じゃ、早くアリティア軍に合流しましょう」
話がまとまったのならば出発しようと、カシムが皆を急かした。
「嫌よ。マルスとかいう奴は、ロレンスや私たちを見捨てたのよ。そんな奴のところになんかいかないわ」

カシムの言葉を、ユミナが頑なに拒否した。

「ユミナ王女、マルス王子は国を治める王族だ。彼の肩には、アリティア王国の住民すべての命がかかっている。あなたを助けるためには、彼はその人々の命を危険にさらしてアカネイアと戦わなくてはならない。それほどの決断をさせるだけのことを、あなたは彼に何かしたのかな。そもそも、あなたたちは、グルニアの人々のことを本当に思って決起したのか。あなたも、国民の命を預かる王族の一人なのですよ」

シリウスが、穏やかな口調ながら、厳しくユミナに説いた。それを聞いて、オグマは微かに満足げな笑みを浮かべた。

「さあ、いこう。もう一度マルス王子に会えば、よく分かるだろう」

オグマはユミナたちを促した。

マケドニア城にマルスたちはいるとシリウスに聞いた一行は、途中でカチュアと出会い、無事にマルスの許へ辿り着くことができた。

「よかった、無事だったんだね」

マルスは、思わず連れてこられた双子を両手でだきしめながら言った。予想もしなかったことに、ユミナとユベロが面食らう。

「あの時はすまなかった。私がふがいなかったばっかりに。だが、もう君たちを危険な目には遭わせないと約束するよ」

耳許で言われて、ユミナは困ったようにオグマの方を振り返った。オグマの目が、それが本当のマルスなのだと無言で語っている。
ユミナは初めて肩の力を抜くと、マルスの腕にその身を預けた。

2

マルスにとって最大の事件は、マケドニアを出発しようとした日に起こった。
結局マリアとレナの行方はまったく分からなかった。ただ一つ分かったのは、彼女たちをさらったのが魔道士らしいということだけだ。
また、ミネルバも、竜騎士によってグルニアの方向に連れ去られたという目撃証言が得られただけであった。
総合すれば、彼女たちはもうマケドニアにはいないとみるのが妥当であった。アリティア軍とマケドニア国民が一丸となっても見つからなかったのだ。そうすると、目撃証言から、グルニアの方向、あるいは、カダインに連れ去られたと見るのが妥当であった。
そのため、マルスはひとまず軍を帰国させる道を選んだのである。いつまでも国を空けたままでは不安だということもあるし、帰国の途中、グルニアとカダインでミネルバたちを捜せるとも考えたのである。

だが、事態は思わぬ方向へと進んだのである。

マケドニアの空に、一騎の天馬騎士が現われ、マルスの許へ降り立った。マケドニアでは珍しくもない風景のように思えたが、問題はその乗り手であった。

「シーダじゃないか、いったいどうしてここへやってきたんだ」

まさに全軍に対して出発の命令を下そうとしていたマルスは、突然現われた婚約者の姿を見て驚いた。

「マルス様！」

天馬を飛び降りたシーダが、マルスの胸に泣きながら飛び込んでくる。

「どうしたんだ。何かアリティアによくないことでも起こったと言うのか」

その取り乱した様子に、マルスは言いようのない不安にかられた。

「アリティアが……、帝国の奇襲を受けて……」

シーダの言葉に、その場に居合わせた騎士たちが大きくざわめいた。

「慌てないで、ちゃんと話してごらん。いったい何が起きたんだい」

マルスは努めて平静を装うと、シーダに訊ねた。

彼女の語るところによれば、突然ハーディン率いるアカネイア・グラ・オレルアンの連合軍が、アリティアに進攻してきたというのだ。グルニアへの援軍だと信じ込んでいたカインたちアリティア騎士団の残留部隊は、完全に不意をつかれてしまった。

アカネイア城を落としたハーディンはエリスを捕らえると、国民を人質にとってアリティア騎士団を追いつめた。戦うことのできなくなったカインたちは、敗走しながらかろうじて部隊を維持させているという。

「私は、一刻も早くマルス様にこのことを知らせるようにとエリス様に命じられて、それで、それで……」

「もういいよ。すべて分かった」

マルスは、そう言ってシーダをだきしめた。

「ごめんなさい。私だけ……」

「君が無事でよかった。姉上もきっと大丈夫だ。それに、謝るのは僕の方だ。君たちをこんな辛い目に遭わせてしまって……。大丈夫、きっと大丈夫だから。――ジェイガン！」

泣きじゃくるシーダをなぐさめた後、マルスは恋人から王の顔となって軍師であるジェイガンの方を振りむいた。

「はっ。これでアカネイアが大陸すべてを我が物にしようとしているのは明白。ましてや、だまし討ちにも等しい奇襲など、王や騎士としての精神に恥ずべき行ない。許すことはできませぬ。もはや、事はアカネイア大陸全体の問題であります。殿下、御決断を」

ジェイガンが、皆の心を代弁して言った。

「また、ハーディンが自ら他国を侵略しようとしたのかは分からない。だが、アカネイアが我がアリティアを侵略したのは事実だ。この上は、グルニアに戻って、ラングを捕らえる。そして、真実を白日(はくじつ)の下(もと)にさらすのだ。その上で、アカネイアが闇の野望に染まったというのであれば、ハーディンと戦ってでも祖国を取り戻す。正義の意思は、我らとともにあり！」

マルスは、高々とファイアーエンブレムを掲げた。アリティア軍の全員が、おうと応える。

「騎乗！」

アランが、先頭に立つべき騎兵たちに命じた。ルークたちが、一斉に馬にまたがる。一糸乱れぬその動きは、ザッという音一つで全員が馬上の人となった。それは、アリティア軍全体が一人の巨人の騎士であるかのように思わせる。

「進軍せよ」

マルスは命じた。

アリティア軍が進軍を開始する。その中には、ミネルバを捜すために同行を申し出た、パオラとカチュアたち天馬騎士の娘たちの姿もあった。

怒りに燃えて怒濤の進軍をするアリティア軍の情報は、マケドニアにいたアカネイア

の密偵によって逸早(いちはや)くラングにもたらされていた。

「馬鹿な、もうアリティア軍が動いただと。アリティアからの伝令は、すべて始末したはずではなかったのか」

「それが、シーダ王女自らが、天馬を使ってマルス王子の許に辿り着いたようです」

興奮して玉座から立ち上がるラングの前で、報告にきた兵士が答えた。

「それは予想のうちであったはずだ。そのために、パルティアを持ったジョルジュを国境の森に潜ませておいたのではなかったのか。これでは、皇帝陛下がグルニアにおいでになる前に敵がやってきてしまうではないか」

怒りと怯えを隠しきれずに、ラングが叫んだ。

戦いで消耗したアリティア軍をマケドニアに閉じこめて孤立させ、そこを帝国の大部隊で殲滅(せんめつ)する予定が狂ってしまっていた。

「何をそんなに怯えている。我々には、重要な人質がいるのだ。心配するには及ばぬ」

黒髪の長髪の傭兵が、ラングに言った。

「おお、そうだな。ウェンデルがこちらの手にあれば、マルスも迂闊には手を出すまい。それに、紅の傭兵ナバールがいるとなれば、傭兵オグマも敵ではないな。そうだな」

自らに言い聞かせるかのようにラングが言った。傭兵は、苦笑しながらそれにうなずいた。

「それにしても、ジョルジュとアストリアの部隊は何をしているのだ」
苛つきながら、ラングが部下に訊ねた。
「傭兵部隊は、カシミア大橋の守備について本隊を待っております。弓兵隊は国境にとどまったままです」
部下が報告した。反乱鎮圧に出かけたジョルジュの部隊と本隊の進路を確保しているアストリアの部隊は、アリティア軍がやってくるのとは反対の方角にいるのだ。
「すぐに両方とも呼び戻せ」
ラングが叫んだ。このままでは、マケドニア軍の援助を受けたアリティア軍とは互角の戦力となってしまう。あくまでも、アストリアとジョルジュの部隊を加えて、初めてアリティア軍に倍する戦力となるのであった。まして、祖国奪回に燃えるアリティア軍との士気の差は歴然である。
だが、結局戦闘が始まるまでにジョルジュたちは戻らず、ラングは怒濤のように押しよせるアリティア騎士団によってなす術（すべ）もなく追いつめられていった。
アカネイア軍は拠点としていたオルベルン城に立てこもり、橋を落として籠城（ろうじょう）の構えを見せた。
だが、事前にオグマから情報を得ていたマルスは、それを予測して騎士団を城の背部へと迂回させていた。落とされた橋の対岸でパオラたちが空から攻撃を仕掛けると見せ

かけて敵の気を引きながら、一気に背後を突いたのである。
「よし、敵を対岸にとめおくのだ。小舟などで渡ってこようとする者は、確実に投石機で粉砕せよ」
城の警備を任されていたトーラス将軍が、部下たちを鼓舞した。攻撃を集中するために、投石機のすべてはマルスたちの本隊にむけられている。
「将軍、背後から敵です！」
「馬鹿な。アリティア軍は、対岸にいるはずではないか……」
部下の報告に、トーラスが絶句する。
大地を轟かせながら突撃してきたアラン率いる騎馬隊が、白兵戦の準備も整わない守備隊に怒濤のごとく突っ込んできた。
「迎え撃て。敵にむかって石を放……」
命令を下しかけたトーラスが、先陣を切ってきたアランの槍に貫かれて絶命する。
むきの合わぬ投石機は最初から役に立たず、恐慌をきたして逃げ惑うアカネイア兵たちは、あっという間に制圧されていった。
投石機で対岸のマルスたちを消耗させようと目論(もくろ)んでいたトーラス将軍の守備隊は、瞬く間に全滅させられ、マルスたちの脅威は完全に取り除かれた。
合図とともに、マルスの本隊が今や丸裸となったオルベルン城にむけて進軍を再開す

る。

「何とふがいない奴らだ。こうなれば、皇帝陛下が到着するまで籠城するしかない」
守備隊が全滅したとの報に、ラングが頭をかかえながら言った。
守りを固めてしまえば、オルベルン城は一日や二日で落ちるような城ではない。長引かせれば、それだけアカネイア軍にとっては有利であった。それゆえ、敵を城に近づけさせないための守備隊であったはずなのに、マルスはそれをいとも簡単に排除してしまったのである。こうなっては、堅固な城壁を頼りに、敵の城攻めをはねのけて時間を稼ぐしか方法はなかった。
「マルス王子は先の大戦の英雄。パレスやマケドニア城、そして、この国のグルニア城まで短期間で落とした天才だ。本気でかかってくれれば、この城とてあっという間に落とされてしまうだろう」
ナバールがラングに言った。たちまち、ラングが不安にかられる。
「なら、どうにかしろ。そのために、お前には大枚を払っているのだからな」
ラングが、ナバールを怒鳴りつけた。
「承知している。先日言った方法を試そう。ウェンデル司祭を連れてきてくれ。表門を開けて俺が交渉する。最低でも、一日は敵は様子を見るだろう。その間にハーディンの

部隊はここに到着するはずだ」
「そ、そうだな」
表門を開けることに少し疑問を感じながらも、ラングはナバールの言葉を承認した。
本来ならば、ハーディンの本隊がとっくに到着していていいはずである。何かの理由で遅れているにしても、そう何日も遅れるはずはないとラングは考えていた。そのため、ここで一日の時間が稼げるのであれば、ラングは何でもするつもりであったのだ。
その頃、マルスの率いる歩兵部隊は、パオラたちの助けを借りたり、すでに落とした敵の砦から小舟を調達するなどして、湖を渡ってアランたちの部隊と合流を果たしていた。
ラングだけは俺の手で始末をつけると意気込むオグマを先頭に、マルスは総攻撃を開始しようとしていた。だが、その時、突然城の表門が開いたのである。
「マルス王子、それから傭兵オグマはいるか!」
両手を後ろに縛られたウェンデルを連れて、ナバールが表門に現われた。
「ナバールだと。人質を取るなど、紅の傭兵も地に落ちたものだな。ちょうどいい、いつかは勝負をつけなければならないと思っていたところだ」
それを見たオグマが、前に進み出た。
「久しぶりだな、ナバール。ノルダ以来だな」

オグマが、アカネイアのパレス近くにある町の名をあげて言った。かつて、彼はそこで剣闘士として奴隷商人に使われていたのだ。

「そうか、ノルダ以来か」

ナバールはニヤリと笑った。

「だが、動くなよ。動けばこの司祭の命はない」

近づいてくるオグマにむかって、ナバールはウェンデルに剣を突きつけながら言った。

「いいか、俺が縄を切ったら走るんだ。いいな」

ウェンデルの耳許に口をよせると、ナバールが彼にだけ聞こえるようにささやいた。微かにウェンデルがうなずく。

その間にも、オグマはゆっくりと二人に近づいていった。門番が、いいかげん危険を感じて門を閉めようとする。

「止まれ。止まらないと言うなら、こうだ！」

叫ぶなり、ナバールがウェンデルを切った。黙ってなりゆきを見守っていたマルスたちがあっと叫ぶ。だが、ウェンデルは平然とその場から走って逃げ出した。

どういうことだとアカネイア兵たちが唖然とする間に、ナバールの剣が翻って門番を斬り倒した。

「貴様、裏切ったな！」

　我に返ったアカネイア兵がナバールにむかってこようとするのを、駆けつけたオグマが一刀の下に斬り飛ばす。

「さすがはオグマさんだ」

「ああ、貴様も腕は鈍っちゃいないようだな、サムトー。他人の振りをするなら、もっとましな奴の振りをしろ」

　打って変わって砕けた口調になった傭兵を、オグマが本当の名で呼んだ。

「本物は、先日ラーマン神殿の方にいったと知ってるんで、なりすましたんですよ。何せ、有名な奴ほど賃金がいいもんでね。だけど、ラングのような奴に雇われるのは、金輪際ごめんでさあ。ノルダの奴隷商人の次に嫌いな奴ですよ」

　答えつつ、サムトーはオグマと背中合わせに立って敵兵と切り結ぶ。しゃべりながらでも、二人とも並の兵士たちにはまったくひけをとらなかった。

　その間に、二人が確保した表大門にむかってマルスたちが突入してきた。

「奴なら、本物のナバールが切った」

「それは嬉しい知らせです」

　あっさりと言うオグマに、サムトーが素直に喜んだ。

　もともとオグマとサムトーは、ノルダの闘技場で戦う剣闘士として、奴隷商人が奴隷の少年の中から選び出した者たちであった。

その過酷な日々に耐えかねた彼らは、ある日脱走を企てた。
だが、それはあっけなく発覚し、彼らはそのまま脱走を強行したのだ。とても逃げ切れないところを、オグマ一人が盾となってサムトーたちを逃がしたのである。
激怒した奴隷商人はオグマをノルダの道ばたに縛りつけ、毎日鞭を打った。さすがのオグマも死の直前までいった時、シーダが彼の目の前に現われたのである。
オグマの身体にしがみついて、自らの身体で彼を助けようとするシーダに、オグマは逃げるように叫んだ。だが、シーダは逃げなかった。
幸いにしてロレンスとタリス王がそばにいたからよかったものの、そうでなければシーダも奴隷商人に捕まってどこかへ売り飛ばされていたかもしれない。
できたばかりの国とはいえ、一国の王が揉め事を起こすわけにもいかず、タリス王は金を渡してオグマを買い取った。そして、そのまま彼に自由を与えたのである。だが、恩義を感じたオグマは、その場でタリス王家に剣を捧げたのだった。
「では、今度はラングとかいう小悪党を斬りにいきませんか」
「そのつもりだ」
サムトーに言われて、オグマはマルスたちとともに城の奥へと走っていった。
立ちはだかる敵兵たちをなぎ倒し、奥にいるラング目指してマルスたちは突き進んでいった。怒りを込めた彼らの剣の前に敵はおらず、城内は次々に制圧されていった。

「ラング、おとなしく観念しろ！」
玉座がある広間に辿り着いたマルスは、ラングにむかって叫んだ。
たちまち、警護兵たちがむかってくる。
「ここは任せろ」
素早く飛び出したオグマが、サムトーとともに道を切り開く。マルスたちは一気にラングの許に迫った。
「もう、逃げ道はないぞ」
護衛の兵たちを倒したマルスは、ラングにむかって言った。
オグマやドーガたちに周りを囲まれて、一人残ったラングに逃げ場はなかった。
「助けてくれ。わしは、皇帝陛下の命令に従っただけなんだ……」
情けなくもラングが命乞いする。
「それは本当なのだろうな」
「はい。もちろん……」
ゆっくりと近づいてくるマルスに、ラングが間合いを計って飛びかかった。マルスを人質にとって、何とかこの場から逃げ出そうとしたのだ。
だが、その瞬間に、彼を取り囲んでいたすべての者が動いた。
「もちろん、何なのだ」

厳しい表情でマルスが言った。前に突き出された彼の剣は、ラングの喉笛を捕らえている。浅く傷つけられた喉から、一筋血が流れる。同様に、オグマを始めとする者たちの何本もの剣がラングの身体に当てられていた。そのどれか一本でも力を入れれば、簡単にラングの命は消えるだろう。ラングごときの動きよりも、マルスたち歴戦の強者たちの方が数段速かったのだ。

「本当に、皇帝陛下の御命令なんです。わしは、それに忠実に従っただけです」

ラングの手から、懐剣が音を立てて床に落ちた。

「マルス王子、このような奴生かしておいても得ではない。このまま殺してしまおうではないか」

ラングの首筋に剣を当てたオグマが言った。そのまま首を切り落としたくてうずうずしているようである。

「わ、わしを殺せば、帝国は、ふ、復讐するぞ」

「面白い。それが本当か試してみよう」

この期に及んで大国の威を借りようとするラングに対して、オグマが剣を引いて止めを刺そうとした。

「待て、事前に言っておいたように、この男は捕虜にする。この男の言う通りかどうか、ハーディンの前にこの男を突き出して問いただすんだ」

マルスは、慌ててオグマを止めた。
「そのようなこと、無駄だと思いますが」
そう言うなり、オグマは剣の平でラングの後頭部を殴って昏倒させた。
すぐにドーガたちがラングを縛り上げて連れていく。
「あの男をどうするおつもりなのですか」
ジェイガンが、あらためてマルスに訊ねた。
「言っただろう。ハーディンの前に突き出して、彼の真意を訊ねる。彼に対する反応で、ハーディンが何を考えているのかはっきりするだろう」
マルスは、そう告げた。
「そうであればよろしいのですが。殿下は、ハーディンを信じすぎてはいますまいか」
ジェイガンが、懸念をあらわにした。
人を信じ、そして、それによって人もマルスを信じるようになるというのは、マルス王子の最大の美徳である。
だが、すべてがそれですむというわけではない。世の中には、ガーネフやメディウスのような者たちもいるのだ。そうでなくても、かつてのカミュのように、立場上どうしても敵対せざるを得ない者もいる。もしも彼がミシェイルの企てに耳を貸さなければ、あの戦いで一緒に剣を振るっていたかもしれないのだ。もしそうなっていたら、歴史は

らつぶやいた。

「王子と王女は、これからどうなされるのか」

シリウスに訊ねられて、双子は顔を見合わせた。

「分からないよ。僕たちには、国を治めるなんて無理だもの」

「何を言うのよ、ユベロったら」

気弱とも思えるユベロの発言に、ユミナが嚙みついた。

「だって、マルス王子があんなに優しい人だってことすら見抜けなかったじゃないか。それに、僕たちがグルニアに戻ってきたから、アカネイアはグルニアに攻め込んできたんでしょ。僕たちは、グルニアの民のことなんかちっとも考えてなかった。ただ、国に帰れるって喜んでたんだ。グルニアは、もっとちゃんと人々のことを思ってくれる人、たとえばマルス様のような人に治めてもらった方がいいような気がするんだ」

「なんてこと言うの、あなたは。弱虫」

ユミナが、ユベロを責めた。

「何でだよ」

さすがに、ユベロが怒って言い返す。
「だって、国を放り出して他人に任せるなんて、弱虫じゃない」
負けずに、ユミナも言い返す。
「でも、今さら、グルニア王家を元通りにしたって、元に戻るだけじゃないか」
「何言ってるのか分からないわ」
黙って聞いていたシリウスは、そっと二人の頭に手をやって喧嘩を止めた。
「時代は変わっていくもの。欲望によって奪い奪われする時代もあれば、信頼によって託し託される時代もある。グルニアの第二次建国時代も、アカネイアの理不尽な追放を甘んじて受けたオードウィン王が身を引いた場所に、多くの民が王を信頼してついていったことから国が生まれたのです。国とは、土地や家系や信仰が作るものではない。人と人とが作るものなのです。私は、長い旅の間にそれを見てきました。お二人も、自分が信じる道を探せばよいと思いますよ」
シリウスは、そう双子に語って聞かせた。
グルニアにいるアカネイア軍の中枢を壊滅させたアリティア軍は、残党による争乱を防ぐためにアラン率いる部隊を残すと、アリティア目指して北上した。持病が悪化したアランは、これ以上の行軍が難しかったのである。サムトーやウォレン、マリーシア、マチス、カシムたちがアランを助けるべくグルニアに残った。替わりに、グルニアの養

勇兵の一部がアリティア軍との同行を希望した。

ユミナとユベロは、グルニアに残りアランとともに国内を安定させることにした。二人の心はまだゆれ動いていたが、今は祖国を思って一所懸命働くことを望んだのだ。

「それでは、ウェンデル司祭は、ガトー様の密命を受けて星のオーブのかけらを探しておられたと言われるのですか」

救出したウェンデルの話を聞いたマルスが興味深そうに聞き返した。

「そうじゃ。カダインは、マリクやエルレーンのような若い者たちに任せてあるからの。安心してオーブを探す旅に出たのじゃが……」

そう言って、カダインの最高司祭であった老人の顔が曇った。

星のオーブのかけらとは、文字通り星のオーブが砕け散った破片である。

先の大戦で、ガーネフの持つ暗黒魔法マフーに対抗するため、大賢者ガトーは光のオーブと星のオーブから、スターライト・エクスプロージョンという神聖魔法を作り出した。星々の爆発による力で、闇に染まった者の内部から外にむかって聖なる光を放つ魔法である。

だが、その性格ゆえか、魔法を生成した直後に星のオーブが砕け散ってしまったのだ。光のオーブの力を星のオーブに注ぎ込み、星々の力でつつんだ後に魔道書の魔文字に転

写していたわけであるが、一三度目に星のオーブが耐えきれなくなったのだった。制御を失った力によって星のオーブのかけらは、大陸中に飛び散ってしまったのである。

　これは、ガトーも予期せぬことであった。暗黒戦争の最中はガーネフを倒すことを優先したため騒がなかったが、実際にはそれによって重大な危機が発生してしまったのである。

　ガトーの言うことには、この世界を安定させるために五つのオーブが存在するという。光のオーブ、闇のオーブ、星のオーブ、大地のオーブ、命のオーブである。そのうちの一つでも欠ければ、厄災がこの世に復活するというのだ。

　そのため、ガトーはウェンデルに命じて、密かに星のオーブを集めさせていたのである。公にしなかったのは、人々に要らぬ不安を与えないためと、邪（よこしま）な人間がその価値を知ってオーブのかけらを隠してしまうことを恐れたからである。

　ウェンデルにははっきりとは言わなかったが、ガトーは何かの存在を心配しているようであった。

「それがハーディン殿のことなのかどうかはまだ分かりません。しかし、早急（さっきゅう）に星のオーブを再生しないと大変なことになってしまいます。そのためにかけらが最も多く落ちたであろうマケドニアに居を構えて探索を続けていたのですが、その大半はラングに奪われてしまいました。しかも、あろうことかラングは宝飾品として、それを部下に与

えたり売ったりしてしまったのです。オグマ殿が見つけてくれた物と城にあった物を合わせてもまだ六つ。後、六つのかけらがどこかにあるはずです」
「分かりました。アリティアを取り戻したら、全軍をあげてお手伝いいたしましょう。けれども、今はまだ先にやることがあります」
ウェンデルの語ることの重大さをおぼろに感じながら、マルスは将来の協力を約束した。
「ええ。分かっております。今はアリティアの一大事、そちらを優先させるのは当然のことです。それに、アカネイアとの戦いの中で見つかる場合もありましょう。ただ、できればラーマン神殿によってみたいのです」
「確かに、あそこならば誰かが奉納している可能性もありますね。どのみち通り道です。近くになったら、護衛の一隊をおつけしましょう」
「ありがとうございます、マルス王子」
ウェンデルが、マルスに礼を言った。
だが、まだ二人は五つのオーブの意味することを正確には知らなかった。

伝承２　黒騎士

男は、浜辺に打ち上げられていた。
船が難破したのか、はたまた海に落ちたのか。どちらにしても、鎧をつけたままの姿でどのようにして海に沈まずにすんだのかは謎であった。
女は、浜辺を歩いていた。
それは日課的な散歩であったが、運命の糸は二人を引き合わせたのである。
それがはたして偶然であったのか、何者かの意図するところのものであったのかは、誰にも分からなかった。
男は瀕死の重傷を負っていたにもかかわらず、女の献身的な看病によって一命をとりとめた。だが、傷は治ったにもかかわらず、男は一切の記憶をなくしていたのだった。
女の名は、ティータという。
そして、男は、自らをジークと名づけた。
ジークが流れ着いたのは、バレンシア大陸というのリゲル王国という場所であった。
やがて二人は愛し合うようになり、過去を捨てて静かな暮らしを

営むようになった。

だが、時は二人をそのままにしておいてはくれなかった。いや、彼を呼びよせた者がついに彼を必要としたということであったのだろうか。

バレンシア大陸に、戦争の嵐が吹き荒れたのである。

太古にミラ神とドーマ神の飽くなき抗争に明け暮れたバレンシア大陸は、二神が互いの領土を決めて不可侵の条約を結ぶということで和解した。その後に誕生したのが、北のリゲル王国と南のソフィア王国である。だが、長い年月を経て、ソフィア王国では自然を司る大地母神ミラへの信仰を失っていった。それによってミラは力を失い、神々の均衡が崩れたのである。欲望を司るドーマ神は、ここぞとばかりにバレンシア大陸すべてを手中に収めようと願った。それによって、ドーマ神を信奉するリゲル王国はソフィア王国に侵攻を始めたのである。

リゲル王国の国民の多くに招集がかけられた。むろん、ジークも例外ではない。

だが、争いを嫌う心優しいティータのために、ジークは戦いを拒

告した。

　けれども、ジークに固執したルドルフ一世の命を受けた部下によって、ティータが拘束されてしまったのだった。反攻に転じたソフィア王国に対して、国民を避難させるという名目であったが、人質であることは明白であった。

　仕方なくリゲル王国軍に参加したジークは、その秘めたる力を遺憾なく発揮し、ゴールドナイトとして一軍を任される存在となったのである。おそらくは彼の過去に由来する才能であったのだろう。

　彼の活躍によってソフィア王国の解放軍は苦しい戦いを強いられた。だが、解放軍の指導者であるアルムがヌイババの館に囚われていたティータを助け出したことから流れは変わった。

　枷(かせ)から解き放たれたジークは、迷うことなくソフィア王国の解放軍に投降し、彼らの力となったのである。

　やがて戦いはソフィア王国の優勢となり、ついにすべての元凶であるドーマ神が倒れる時がやってきた。この時、英雄アルムの剣とともに大いなる力となったのが、聖女セリカの祈りである。時を同じくして別々の地で立ち上がったアルムとセリカは、終焉(しゅうえん)の地で

あるドーマ神殿で出会い、邪神を滅ぼしたのである。後に、二人は結婚し、統一されたバレンシア王国の王と王妃となっている。
この戦いの中、マケドニアの白騎士団にいるペガサス三姉妹がセリカの解放軍に参加していた。アリティアにいたエストがマケドニアに里帰りしようとした時、嵐に巻き込まれてバレンシアへと流されてしまったのである。パオラとカチュアは、それを追って海を渡ってきたのだった。
エストがバレンシア大陸に流されたことは、ジーク同様に、理由の分からぬこと、すなわち偶然と思われた。だが、本当にそうだったのであろうか。バレンシア大陸は、ミラ神とドーマ神という神々が実在した地なのである。
大陸を席巻した戦争も終わり、バレンシア王国の誕生を見届けてペガサス三姉妹はアカネイア大陸へと戻っていった。そして、それを見送ったジークに、一つの変化が現われたのである。ドーマ神が倒れて以来、彼の失われた記憶が少しずつ蘇ってきたのだ。
自分は過去を捨てたものだと考えていたとジークは、賢者リュートに相談する。

過去に決別するも、過去を取り戻すも、そのためには過去と立ちむかわなければならないとリュートは説いた。そして、彼に一つの仮面を手渡した。渦中にあれば、時として人は正しい判断ができない時もある。そのため、全くの第三者として自分自身を見つめろと説いたのである。

ジークは、ティータに別れを告げずに旅立った。それは、きっと再び戻ってくるという証でもあったのだ。だが、戻ってきた時に何と答えるかは、彼にしかわからぬことであった。

そして、彼はアカネイア大陸のマケドニアに辿り着いた。

仮面に自らを隠し、己の真実と祖国の現在、そして愛した人のその後を確かめるために。

第3章　魔道の聖域

1

「大漁だぜ、大漁。さあ、さっさと逃げようよ」
大きな袋を担いだリカードが、すぐそばを足早に歩くナバールに元気よく声をかけた。後ろで束ねた髪の毛をゆらしながら歩くその顔は、いかにもご満悦といった様子だ。
「まったく。よけいなことに俺を巻き込みおって」
憮然とした顔で、ナバールが少年盗賊の後に続く。こちらは、無駄のない動きで、飛び跳ねるように進むリカードの後を遅れずに歩いていた。
「だって、グルニアで久しぶりに会った時、凄く暇そうな顔してたじゃない。だから、ラーマン神殿を荒らしている盗賊団の上前をはねるっていう話を持ちかけたんじゃないか。でも、面白かったなあ、あのダールとかいう盗賊の親分。盗賊の上前をはねるなんてなんて奴らだーって叫んでやんの。上前ははねられる方が馬鹿だっていうのに」
面白そうに含み笑いしながら、リカードが足取りをさらに軽くした。
「まったく。盗賊の大半が旅人を襲いに出払っていたからよかったものの、そうでなければよけいな殺生をしなければならなかったところだ」
リカードがドジを踏んでいらぬ戦いをしてしまったことを思い出して、ナバールは眉

間の鍼を深くした。

本来ならば、用心棒の振りをして盗賊の宝を奪ってさっさと逃げ出す予定だったのである。

「見つかったって、ナバールがちゃっちゃっとやっつけちゃったじゃないか。大丈夫、大丈夫。近くにアリティア騎士団がきているって噂だから、挨拶がてらにかくまってもらって、盗賊たちをまいちゃおうよ」

盗賊たちから仕入れた情報を基に、リカードが逃げ込む先をナバールに告げた。

「分かったから、お前はもうしゃべるな」

いいかげんに我慢の限界に達したのか、ナバールはおしゃべりな盗賊を黙らせた。普段必要以上のことはしゃべらない無口な彼としては、返事を強要されるリカードのしゃべりにつき合うのは苦痛らしい。

「ちぇっ」

大きく舌打ちすると、リカードは森の中を小走りに進んだ。トン、トン、トンと進んだところでいきなり誰かと鉢合わせする。

「きゃあ！」

「わあ！」

同時に悲鳴をあげて、リカードと少女が後ろに飛び退く。そのとたん、下生えに足を

取られた少女が尻餅をついた。

「何なんだよ、君は」

あられもない格好から慌てて膝頭を揃える少女を見て、リカードがちょっと顔を赤らめた。何とも寒そうな、場違いとも言えるような薄着の少女だ。赤毛を黄色いリボンで結び、とても細くて長い手足が印象的だった。

「何者だ」

ナバールは、少女に訊ねた。さすがに相手が女の子なので、剣を突きつけたりはしない。だが、盗賊たちがうようよしているこんな場所で、年頃の娘が一人だけでうろうろしているというのはいかにも怪しかった。女盗賊などであったら、うっかりして寝首でも掻かれてはたまらない。

「あたしは、フィーナ。ワーレンからきた旅一座の踊り子……だったんだけど」

地面に尻餅をついたまま、娘が少し高い声でナバールたちに答えかけた。

「だったんだけど？」

フィーナの言葉を、リカードが繰り返した。言いかけたのならちゃんと最後まで言ってほしい。

「森で野営してたら盗賊たちに襲われて、みんな散り散りに……。ああっ、あんたたち、まさか盗賊の一味じゃないでしょうね」

慌てて立ち上がると、フィーナが叫んだ。素早く衣服の裾を直して、いつでも逃げ出せるように身構える。

「うーん、さっきまではそうだったんだけど……」

ちょっと困ったようにリカードが言う。

「そうなのね。いやあ、殺さないで」

フィーナが胸の前を両手で押さえながら叫んだ。数歩後退(あとずさ)ったところで、背後の木に背中をぶつける。リカードとナバールに取り囲まれるような形になって、フィーナは悲劇のヒロインになりきっていた。

「いや、そんな叫ばれても。おいらたちはさあ……。なあ、ナバール」

助けを求めるように、リカードがナバールの方を振り返る。お宝さえ手に入れてしまえば満足なので、目の前の少女をどうこうしようという気など、少年盗賊の頭の中には毛頭なかった。

「きっと、あんなことやこんなことされてから殺されるんだわ」

フィーナが、妄想を爆発させてまくし立てた。そのおしゃべりの速さは、リカードといい勝負だ。

「何だよう。あんなことやそんなことって」

さすがに、リカードが言い返した。自分たちがそんなふうに見えるというのは、彼と

しては心外であったのだ。

「俺たちはそんなんじゃ……」

「いやー！」

弁明するリカードの言葉をろくすっぽ聞かずにフィーナが叫ぶ。

「いやーじゃないだろ、こいつ」

さすがに怒って、リカードが拳を握り締めた。

「いやー、ぶたないでぇ」

それを見て、すかさずフィーナが頭をかかえて身を守ろうとする。

「誰がぶつって言ったんだよ」

思わず、リカードが一歩前に踏み出した。

「近づかないでぇ！」

その後も、切れ目なくリカードとフィーナがしゃべり続けた。はたから見ていると、まるで大道芸人の掛け合いのようだ。そのそばで、ナバールが怖い顔でじっと我慢しながら立ちつくしていた。

「お前たち、いいかげんにしろ。永遠に口を塞がれたいか」

低い殺気のこもった声で、ナバールは二人を黙らせた。いいかげん、我慢の限界に達したらしい。

　さすがに、ナバールの圧倒的な威圧感を受けて二人が口を噤む。フィーナに至っては、冗談っぽくリカードを怖がっていたのが、さすがに本気で怯えだしてしまった。それを見て、ナバールが心底困ったようにまた顔をしかめた。それを見て、フィーナがまた怯える。まったく悪循環であった。
「お前たちがそんなだから、いらぬ奴らがやってくる」
　ナバールは剣を抜いて二人に言った。
　それを見たフィーナが小さな悲鳴をあげて、リカードにしがみついた。ナバールから放たれる圧倒的な殺気に、思わずそばにいたリカードに助けを求めてしまったのである。
　だが、しがみつかれたリカードも、まじめな顔で周りを見回していた。ナバールが視線を走らせた先を見ると、そこかしこから盗賊たちが現われる。フィーナを追い回していた盗賊たちと、ナバールたちを追っていた盗賊たちが、ここで鉢合わせしたのだ。
「本当の盗賊……」
　怯えたフィーナが、ぎゅっとリカードをだきしめた手に力を込めた。
「責任とって、その娘はお前が守れよ」
　そう言うなり、ナバールは有無をもいわせず盗賊たちに斬りつけた。二刀流が唸りをあげ、盗賊たちが次々に倒れていく。流れるような剣技はまさに華麗、そして、その一振りは確実に相手に死を与えていく。それは、美しくも残酷な死の舞であった。その軌



きに、思わずフィーナが見とれる。
「ナバールがいれば、あんな奴ら屁でもないさ」
リカードが、フィーナを安心させるように言った。
「うん、そうみたい」
フィーナが、少し安心したようにリカードを放した。
「頑張って、格好いい剣士さん」
薄衣をひらひらさせながら、フィーナがナバールに投げキッスを送った。ときおり、彼女の翻す布の端がナバールやリカードの身体に触れる。そのたびに、彼らの動きが目を見張る速さになるのである。
「くそう、生かして帰すな」
盗賊たちの首領が叫ぶ。
だが、それを実行したのは、ナバールの方であった。
けれども、多勢に無勢。フィーナとリカードがナバールの周りで逃げ回っていると、新たな一団がその場にやってきた。
新手かと、ナバールたちが緊張を新たにする。
「リカード、お前、こんなとこで何やってんだ。そっちはナバールか!?」
新たにやってきた集団の中にいたジュリアンが、リカードとナバールの姿を見つけて

叫んだ。
彼と一緒にやってきたルークたちが盗賊たちを蹴散らし始める。
「やっほう。兄貴だ。味方だよ」
リカードが、フィーナに告げた。
あっという間に敵味方の人数が逆転し、盗賊たちは我先にと逃げ出した。
盗賊たちを一掃すると、ナバールとジュリアンたちは互いに情報を交換し合った。
ジュリアンとルークたちは、ウェンデルを伴ってラーマン神殿へとむかう途中であったのだ。
「星のオーブのかけら？　これのことかなあ」
話を聞いたリカードが、背負っていた袋をごそごそとやりながら言った。ほどなくして、中から星のオーブのかけらを二つ取り出す。
「おお、これじゃ。他にはなかったかな」
ウェンデルがそれを受け取って言った。
「まずないと思うよ。ダールの奴は、律儀に宝物庫なんて作って喜ぶような奴だったから。今からラーマン神殿にいっても無駄だよ」
リカードが言った。こういうことに関してはリカードは間違いはないと、ジュリアンが保証する。

それを聞いたウェンデルは無意味な戦闘を避けるために引き返す決断をした。マルスたちの本隊はカシミア大橋に迫っており、手前の砦にいるアストリアたちアカネイア傭兵部隊との戦いは時間の問題だったからである。急いで合流しなければ、グルニアに戻るしかなかったからだ。

リカードとナバールも、マルスたちに合流することにした。

「私も一緒にいく。だって、勇者マルスを私も見てみたいもの」

いき場のないフィーナも、彼らについていくと言って譲らなかった。

「敵にカシミア大橋を封鎖される前に、大陸に渡る」

ウェンデルたちが戻って全軍が揃うと、マルスは決断を下した。

カシミア大橋を封鎖されてしまえば、アリティアに戻る最大のルートを失ってしまうからだ。

グルニアとマケドニアが後ろに控えているために補給面はさほど心配ではないが、異国に封じられたままでは、いつになってもアリティアを取り戻すことはできない相談であった。

それに、ハーディンと交渉するにしてもカシミア大橋を押さえる必要があった。

だが、マルスたちの予想とは違い、砦に詰めているはずのアカネイア傭兵部隊は動か

なかった。

パオラたちが決死の偵察を行なったが、敵の気配はない。アリティア軍が到着するまでに、砦を放棄して撤退したのだろうかとマルスたちは困惑を隠せなかった。

そこへ、大陸側の砦にジョルジュたちアカネイア自由騎士団とともに、カインの率いるアリティア騎士団の生き残りが籠城（ろうじょう）しているという知らせが届いた。

「カインが、ハーディンの部隊をここで押さえていてくれたのではないだろうか。ジョルジュが一緒だということは、アカネイア騎士団の一部が我々に寝返ったということでもあるだろう」

カイン生存の報に、マルスたちアリティア騎士団の面々は士気を高めた。

「カインを孤立させてはおけない。すぐにでも合流しよう」

マルスは、全軍を急かした。

整然と密集隊形をとって、アリティア軍が進軍していく。

パオラたち天馬騎士は先行して北の砦にむかった。アリティア軍の到着を知らせるためである。

無事合流はかなうものと思われた瞬間、無人と思われた砦からアストリア率いるアカネイア傭兵部隊が出撃してきた。

「いかん、橋を渡るのを急がせろ」

マルスが叫んだ。
だが、その言葉が終わらないうちに、ハーディンの率いるアカネイア軍本隊が東から姿を現わした。
アリティア軍を挟撃するつもりなのだ。
それを察知したカインたちアリティア騎士団が、北の砦から撃って出た。
風雲急を告げる。
アリティア軍の先鋒と殿(しんがり)とで同時に戦闘が始まった。
「マルス殿下、御無事でありましたか」
戦いの中をくぐり抜けて、カインがマルスに駆けよってきた。
「カインか。君こそ、よく無事でいてくれた」
心底嬉しそうにマルスは言った。
「いえ。大役を引き受けておきながら、祖国を敵の手に渡すなどお詫びしても許されぬことであります。ですが、ぜひとも敵のことを殿下に伝えねばと、生き恥をさらして参りました」
カインが、馬上で深々と頭を下げた。その鎧は傷だらけで、彼がいかに激戦をくぐり抜けてきたかが一目でうかがえる。
「恥じることはない。そもそもは、グルニアに出兵を決定した私の罪だ」

マルスは、カインを労った。
カインですら防げなかったのであれば、それはやむを得ないことだとするしかない。問題は、個人の力を遙かに超えたところにあるはずだ。
「それよりも、我が国を攻めたのは本当にハーディンなのか」
マルスが知りたいことは一つであった。
「その通りです」
単刀直入にカインが答えた。
それは、マルスがもっとも恐れ、そして、今では半ば予期せざるをえなかった言葉であった。
「しかも、彼はもう昔のハーディンではありません。何かに取り憑かれているのではないのでしょうか。何か怪しい力が彼を守っており、矢も剣も彼を傷つけることができないのです。あの力は、以前私が受けたマフーの感覚に似ています。そのため、彼一人によって我が国の守りはことごとく崩されてしまいました」
ハーディンは、もう昔のハーディンではない。いくどとなくマルスが耳にした言葉が、ここでもまた繰り返された。
「ガーネフが力を貸しているとでも言うのか。だが、奴は死んだはずだ」
カインの言葉に、思わずマルスは叫んだ。

確かにマフーであれば、人々の心の中の恐怖を呼び覚まし、攻撃自体をさせない力がある。だが、騎士であるハーディンは、魔法とは無縁のはずであった。もしも魔法の力であるのならば、近くに魔道士の姿があるか、何かの魔力を秘めた品物をハーディンが所持しているかだ。

「その通りです。だから、その力の源を調べる必要があるでしょう。とにかく、今戦っても我らには勝ち目はありません。ここはどうかお逃げください。西の砦に船を用意させてあります。籠城する振りをして、夜陰に紛れてカダインに逃げましょう。そこで対策を立て直すのです」

カインが、アリティア軍がやってくるのを見越して準備していた計画を、マルスにうち明けた。

「分かった。全軍を砦にむかわせよう。だが、その前に私は直接ハーディンにあって確かめたい」

「無謀です、殿下。奴はためらわずあなたを殺そうとするでしょう」

マルスの言葉を聞いて、カインが真っ青になって叫んだ。

「それを確かめるんだ」

カインの警告を無視すると、マルスは当初の計画通りに、捕虜としたラングを引き連れてアカネイア軍の方にむかった。慌てて、ドーガが近衛騎士たちを連れてマルスの後

を追う。
マルスの行動を見透かしていたかのように、ハーディンは部隊の先頭に立って彼がくるのを待ち構えていた。
「マルス、久しぶりだな」
ハーディンが言った。その声には、友を迎える優しいひびきなど一片のかけらも含まれてはいなかった。
「ハーディン、どうしてアリティアに軍を送った。アリティアだけではない、グルニアもマケドニアも……。あなたはいったい何を考えているのだ。私には、あなたがすべての元凶だとは思えない。思いたくもない。聞いてくれ、ハーディン。不正を働いたラングはこのように捕らえた。もし、あなたのそばにラングのような甘言を弄する悪人がまだいるのならば、すぐにその者を退けてくれ。惑わされてはいけない。あなたならば、それができるはずだ」
マルスは、必死にハーディンに訴えた。
おとなしくそれを聞いていたハーディンであったが、マルスの言葉が一段落すると突然哄笑を響かせた。
「マルスよ、とんだ勘違いをしているようだな。すべてはこの私自身の命令によるものだ。誰が、そこの男のような小物の言葉に躍らされるものか。私はアカネイア神聖帝国

の皇帝、そして、アカネイア大陸すべての支配者であるのだ。それゆえ、すべての国は私にふさわしいものでなければならん。なのに、今の世は間違っているのだ。あるべき姿にないものは破壊する。私に刃向かうものはすべてなくしてしまうのだ。マルス、貴様も結局はその一つだったようだな。反逆者どもを待っているのは、死だけだ。やれ！」

吐き捨てるようにハーディンが言うと、彼の後ろから現われた弓兵が矢を放った。その初弾がマルスの前に引き出されていたラングの胸を貫く。

「そんな、皇帝……わしは……」

ラングが倒れると同時に、多数の矢がマルスに襲いかかった。

「ハーディン、お前は本当にハーディンなのか」

紋章の盾で矢を防ぎながら、マルスは叫んだ。防ぐ手段を持たないラングの遺体に、外れた矢が次々に突き刺さっていく。

「ファイアーエムブレム。なぜ貴様がそれを持っている。そうか、ニーナか。ボアめ、こそこそと動き回りおったな。もう容赦はせぬ。殺してやる。殺してやるぞ」

紋章の盾を見たハーディンが、怒りで顔を朱に染めた。

マルスの耳に聞こえたのは、ハーディンが部下たちにマルスを殺せと命令する声だけであった。

「殿下をお守りしろ！」

ドーガが、重装騎士を連れてマルスの前に壁を作った。大型の盾に次々に矢があたって、間断なく金属の音をたてる。

「マルス殿下、早くお下がりください」

ドーガに促されて、マルスは砦にむかって後退した。カインやロディたちがそれを援護する。

「アリティア軍を援護せよ」

城壁の上にならんだ弓兵から、一斉にアカネイア軍にむかって矢が放たれる。

その中の一本が、炎につつまれながらハーディンの許に飛来した。かつての味方の兵士をここで殺すに忍びないと思ったジョルジュが威嚇として放った矢が、流れ矢として飛んできたものであった。だが、狙いが定まっていなかったせいで、ハーディンに矢がむかっていったのである。最初から狙おうと思っていたら、無理であっただろう。

「ふん」

ハーディンが、飛来する矢にむかって腕を一振りした。見えない壁に弾かれるように、パルティアから放たれた矢が二つに折れて弾かれ、地面の上へと落ちていった。

「ジョルジュめ……」

ハーディンは低く唸ると、いったんその足を止めた。

かなりの被害を出しながらも、アリティア軍は何とか砦に逃げ込むことができた。

アカネイア軍も、崩れた陣形を立て直し、傭兵隊と合流した部隊の再編成をするために、砦を包囲したままいったん攻撃の手を休めている。

「御無事でしたか、マルス王子」

砦に入ったマルスを、ジョルジュが暖かく迎えた。

「ありがとう、ジョルジュ。君たちが砦を開放してくれたおかげで、我が軍は全滅をまぬがれた」

マルスは、ジョルジュに礼を言った。

「いいえ。私はニーナ様に忠誠を誓いましたが、今のハーディンの命令には、とても従う気にはなりません。ラングの時もそうでした。あのときはまだ故国と戦うことにためらいを感じ、ラングの命令を無視して中立を保つだけでしたが、今はもう違います。今のハーディンに従っているのは、傭兵を中心とした騎士とは呼べない者たちばかりです。今のアカネイア騎士団には、騎士としての誇りも何もない。私は、幽閉されたニーナ王妃を助け出し、アカネイアに真の平和を取り戻すまであなたとともに戦うつもりです。できればアストリアも説得したかったのですが……。彼もそのうち分かることでしょう」

少し顔を曇らせながら、ジョルジュが言った。彼としても、祖国であるアカネイアと

戦うのは苦しい選択の末の決断であったのだろう。
「ああ、そう信じたい。とにかく、今はカダインに逃れよう。ハーディンについては、マリクたちの意見も聞きたいところだ」
マルスはそう告げると、脱出の準備を急いだ。
翌朝、本格的な砦攻めを開始した帝国軍が見つけたものは、もぬけの殻となった砦だけであった。
「ジョルジュめ、なぜ裏切った。俺たちは、アカネイアに忠誠を捧げた者なのだぞ……」
城内に突入したアストリアは、困惑しつつも怒りを隠せないでいた。友と信じていただけに、またジョルジュはアカネイアの貴族であり騎士であるがために、祖国への翻意は許し難いものであったのだ。
「敵はカダインに逃げたものと思われます。皇帝陛下から、傭兵部隊に追撃命令が出ました。本隊はいったん帰国し、あらためてグルニア・マケドニア討伐軍を組織するとのことです」
伝令が、ハーディンからの命令をアストリアに伝えた。
「承知」
アストリアは、短く答えただけであった。

2

「様子はどうだ」
カダインのある砂漠に面した小さな港町の一角にある建物を訪れたミシェイルが、中にいた老人に訊ねた。
「もう、起きられるほどには回復したようじゃ」
バヌトゥという名の老人は、薬草を磨り潰しながら答えた。深い皺の刻まれた顔は、むすっとしたままあまり感情を外には表さない。
「そうか」
ミシェイルは、言葉少なに言った。
「会うかな」
バヌトゥの問いに、ミシェイルは無言のまま奥の部屋へとむかっていった。
そこには、ミネルバが寝台（ベッド）の上で上半身を起こしていた。ミシェイルが入ってくるのを見て、素早く毛布を胸元まで引き上げる。
「調子は良さそうだな」
「なぜ私を助けた」

無感動に言うミシェイルを睨みつけながら、ミネルバは訊ねた。はなから、相手の言葉に答えるつもりはない。

「貴様が死ぬとマリアが悲しむ。それだけの理由だ。俺としては、貴様が死のうと生きようと知ったことではない」

寝台脇の小卓に生けられた薔薇の花弁を指先でさすりながらミシェイルが答えた。

「マリアか。マリアは、ガーネフらしき魔道士に連れ去られた。阻止しようとした私はこのざまだ」

毛布の端を握った手に力を込めながら、ミネルバは悔しげに言った。

「ガーネフか。この俺が生きているのだ。奴が生きていたとしても不思議ではないか」

あいかわらずミネルバの方は見ずに、花に視線をさまよわせたままミシェイルが言った。

「兄上は、なぜ助かったのだ。私の槍は、確かにあなたを貫いたはずだ」

ミネルバは、最大の疑問を口にした。

「笑止な。お前の槍ごときでは、俺は死なんよ。俺は、妹に殺されたりはしない。だが、俺を救ってくれたのも、今一人の妹であるのは事実だ」

「マリアが……」

初めて知らされる事実に、ミネルバは少なからず驚いた。マリアは一言もそんなこと

を話してはくれなかったからである。ミシェイルにマケドニア城から連れ出されるまで、ミネルバは彼が死んだものと信じ込んでいた。
「おそらくは、ガーネフがマリアを何処かへ連れ去ったのであろう。俺は奴を捜し出して倒し、マリアを救い出すつもりだ」
わずかに怒りを身体の外に滲ませながら、ミシェイルは言った。
「兄上……。何だか、昔の兄上が戻ってきたようだ」
何とも複雑な表情を浮かべて、ミネルバはつぶやいた。脳裏に、まだ兄妹三人が無邪気に遊び回っていた幼い日々が蘇る。
「少し前までの兄上は、まるでガーネフに操られているようだった。やはり……」
「勘違いするな。俺は、自分の意志ですべてを行なったのだ」
ミシェイルが、素っ気なくミネルバの言葉を否定した。
「父は情けない男だった。一国の王だというのにアカネイアの役人に頭を下げてご機嫌をとる。思い出しても怒りがこみ上げてくる。だから、俺はアカネイアを滅ぼす計画を立てたのだ。ドルーア帝国と一時的に手を組み、アカネイア王国を滅ぼす。その後で、俺はカミュとともにドルーア帝国を倒して大陸の覇者となるつもりだった。だが、父は及び腰だった。それどころか、俺を国から追放しようとしたのだ」
思い出しても悔しさを堪えきれないのか、ミシェイルは花をつつむように添えていた



手に力を込めた。
「だから、父上を手にかけたのですか。愚かしい、それこそがガーネフの望んだことではありませぬか」
「その通りだ。だからこそ、俺は奴を殺す」
眺めていた薔薇の花を握り潰すと、ミシェイルが言い放った。再び開いた手のひらの中から、ばらばらになった花弁がひらひらと不規則に舞いながら床の上へと落ちる。
「アリティア軍がこの町に次々と上陸してきているそうだ。じきにマルスとも会うことができるだろう。お前は、自分の意志で好きにしろ。国に帰るなり、マルスの手伝いをするなり、自由にすればよい。俺は俺で好きにやる」
「兄上」
部屋を出ていくミシェイルを、ミネルバは思わず呼び止めようとした。
「一つだけ言っておくが、本気で殺そうと思っているのならば、手加減はせぬことだ。それが、お前の甘さであり、優しさだ」
そう言い残すと、ミシェイルは後ろ手に部屋の扉を閉めた。
「後のことは頼む」
「承知した」
去っていくミシェイルの言葉に、バヌトゥはそう答えた。

できあがった薬をミネルバの前に届けると、バヌトゥは家を出ていった。
彼がマルスを連れて戻ってくるのは、それから少ししてのことであった。
「まさか、こんなところであなたに出会えるとは思わなかった。チキはどうしているのですか。一緒にいるとばかり思ってましたが」
道すがら、マルスはそうバヌトゥに訊ねた。
「チキは、ガトー様が氷竜神殿に連れ戻された。人跡未踏の秘境にある神殿じゃ。わしにはもう手は出せぬ。それよりも、ずいぶんと難儀しているようじゃが、よければわしの手を貸そうか。王子には恩義があるゆえ、遠慮することはない」
「ありがとうございます。あなたがともに戦ってくれるのならば心強い」
バヌトゥの言葉に、マルスは素直に喜んだ。マムクートであるバヌトゥが力を貸してくれれば、ハーディン以外のアカネイア騎士団とは充分に渡り合える戦力を手に入れたに等しかった。
ほどなくしてバヌトゥが住んでいた家に到着したマルスは、ミネルバとの再会を果たした。寝台の上ではあったが、ミネルバは元気な様子でマルスを迎えた。
ミネルバからミシェイルとガーネフのことを聞いたマルスは、驚きを新たにした。
「ガーネフが生きていると言うのですか」

「確証はありませんが」
ミネルバがマルスに答えた。
「でも、そうだと考えれば、いろいろの陰謀も納得がいきます。だがどうやって奴は助かったのだろう。スターライト・エクスプロージョンによって、間違いなく奴は死んだはずなのに」
マルスは、しばし考え込んだ。
「魔道のことは、我々には理解できぬことですから」
ミネルバが言う。
「そうですね。では、真相を確かめるためにも、私はカダインのマリクに会わなくては。彼ならば、きっと知恵を貸してくれるはずです。ミネルバ殿、あなたも私に力を貸してはいただけませんか。今、アカネイア大陸の各王国は、ハーディンの野望による侵略の危機にさらされています。マケドニアは現在は解放されて信頼のおける者に任せてありますが、このままではまたアカネイアの侵略を受けてしまうでしょう。ハーディンの野望を打ち砕き、彼の目を覚まさせるためにもお力をお貸しください」
マルスは、ミネルバに助力を頼んだ。
「何を今さら。私がマルス殿の頼みを断るはずがないでしょう。マケドニアは、永遠にアリティアの友です」

ミネルバが、マルスの手をとって言った。
「だが、私には一国の王としての器は備わってはいないようだ。だから、私は騎士の一人としてあなたに助力したいと思うが、いかがだろうか」
「何を言われるのですか。ですが、あなたがそうしたいとおっしゃるのであれば、私は何も言いませんが……」
マルスはミネルバの真意がよく分からず、曖昧にそう答えた。
「少し待ってはいただけぬか。今すぐ準備をする」
そう言うと、ミネルバがマルスを部屋から出した。寝台から抜け出すと、何日かぶりに、自分の足でよろけずに立つ。鍛錬のせいで少し筋肉がついているが、美しい年頃の娘の肢体があらわになる。
ミネルバは乱れた髪を直すと、肌着の上に襦袢（じゅばん）を着て、愛用の深紅の鎧を身につけた。娘らしい身体が堅い鎧につつまれ、女丈夫（じょじょうふ）の姫将軍がそこに現われる。赤い竜騎士と呼ばれる、凛々しいミネルバが戻ってきたのだ。
「お待たせした」
つかつかと軍人らしい足取りでマルスの待つ部屋に入ってくると、ミネルバが張りのある声で言った。
「では、いきましょう。カチュアたちもあなたを待っています」

そう言って、マルスはミネルバとバヌトゥを連れてその場所を後にした。

アリティア軍の本隊を訪れたミネルバを、パオラやカチュアたち天馬騎士たちが涙とともに迎えた。ここで会えるとは思ってもいなかったのである。それだけに、彼女たちはうれし涙が止まらないのだった。

「追っ手がこないうちに、我々はカダイン神殿に避難する。そこで態勢を立て直し、祖国奪回への新たな一歩を踏み出すのだ。全軍、出発せよ！」

マルスは、全軍に命じた。

カダイン神殿にむけて、アリティア軍が砂漠の中を行軍していく。だが、彼らが安息の地と思っていたカダインは、すでに変わってしまっていたのである。

カダイン神殿が見える場所まで進んだ時、マルスたちは突然カダインの魔法兵たちから攻撃を受けた。

「馬鹿な。なぜ、カダインの魔法兵たちが私たちを襲うのだ」

ウェンデルが、一番信じられないという顔をする。すぐに魔法兵たちに攻撃をやめるよう説得しようとしたが、彼らはウェンデルの言うことを聞かなかった。彼を偽者と決めつけ、攻撃の手を緩めなかったのである。

「マリスとエルレーンがいながら、なぜこういうことに……」

「それを確かめるには、本人に会うしかないでしょう。神殿に行きましょう」

呆然とするウェンデルに、マルスは言った。

「彼らの魔法は、私が抑えます。なるべくなら、犠牲者は出したくない」

ウェンデルは、秘蔵の沈黙(サイレス)の杖を取り出して言った。大気の振動を制御して、呪文を唱えさせないようにする力を持つ杖だ。

「分かりました。いきましょう」

マルスは精鋭部隊を編成すると、カダイン神殿へとむかった。

「敵がやってくるぞ。近づけるな」

神殿の前を守っていたヨーデルが、ボルガノンの魔道書を取り出して呪文を唱えようとした。

「烈なりし秘めたる炎よ……」

「静寂は、心の静けさ。沈黙の霧よ、言葉をつつめ」

ヨーデルの呪文を遮るようにして、ウェンデルが杖を振り上げた。淡い霧が周囲に立ちこめ、静寂の帳(とばり)を降ろして音を消し去る。

その間に突撃したマルスたちは、魔道士たちの持つ魔道書を剣で切り裂いたり取り上げたりして無力化していった。

「ウェンデル司祭……」

沈黙の杖の効果が消え、やっと声の出るようになったヨーデルが、呆然とした様子で言った。

「すぐに戦いをやめさせるのだ。エルレーンとマリクはどこにおる」

ウェンデルが、ヨーデルに詰めよった。

「中央祭壇の前にいるはずです。しかし、エルレーンが……」

やっとのことで、ヨーデルが答える。

「急ぎましょう、ウェンデル司祭」

横で聞いていたマルスが、ウェンデルを急かした。

3

「エルレーン、いったい君は何をやっているんだ。すぐにヨーデルたちを呼び戻すんだ。マルス王子たちを襲うなんて、間違ってる」

マリクは、広間に作られた最高司祭の椅子に座ったエルレーンにむかって叫んだ。赤い長衣（ローブ）を纏った金髪の青年は、弟弟子のマリクを親の敵（かたき）のような目で睨みつけている。

「お前は、どうやって牢から逃げ出したのだ……。そうか、この学院にも、まだお前に味方する愚か者が残っていたということか」

訊ねたエルレーンが、マリクの後ろに従う数人のマスターを見て納得した。
暗黒戦争後に、マリクはカダインに戻っていた。残っていた修行を終わらせ、ちゃんと魔法学院を卒業するためである。卒業後は、アリティアに戻って、そこに魔法学院を作るつもりであった。だが、修行の終わったマリクを、エルレーンは突然幽閉したのであった。ウェンデルがカダインを離れて、しばらく経ってからのことである。
突然のマリクの幽閉は、カダインの中でも反発を招いた。だが、エルレーンは逆らう者たちを次々と投獄し、独裁的にカダインを牛耳っていったのである。
「愚かなのは君の方だ。せっかくウェンデル様からカダインを任されたというのに、なぜこんなことをするんだ」
「なぜだと。貴様は思い当たらないとでも言うのか。そうだろうな。お前にはわかるまい。最初にウェンデル先生の弟子となった私をさしおいて、エクスカリバーの後継者となったお前にはな。いったい、なぜお前がエクスカリバーを受け継いだのだ。本来なら兄弟子である私が受け継ぐべきはずのものであったのに。実力なら、私の方が遙かに上のはずだ。それとも、貴様がアリティアの貴族で、私がただの平民の出であるからなのか。ウェンデル先生に取り入って、エクスカリバーも何もかも手に入れた貴様に、私の何が分かると言うのか」
エルレーンが、本心を吐露する。

「君がそんなことを思っていたなんて……」
兄弟子の本心を初めて知って、マリクが絶句した。アリティア貴族として何不自由なく暮らしてきたマリクには、食べるものも節約して平民から何とか魔法学院に入学したエルレーンの苦労は、簡単には想像できなかったのだ。そのために、彼も自分と同じだという態度でマリクはエルレーンに接してきていた。それが友情だと思っていたのだが、知らないうちに彼を傷つけていたことを知って、マリクは自責の念にさいなまれた。
「私は、カダインは好きだが、修行が終わればアリティアに戻るつもりだ。祖国には、命をかけて生涯守りたい人がいる。だから、私はカダインの司祭にはならないつもりだ。ウェンデル先生の後を継ぐのは君しかいない。だから、お願いだ、アリティア軍に対する攻撃を中止してくれ。そして、アリティアを取り戻すために力を貸してくれ」
マリクは、何とかエルレーンを説得しようと試みた。
「馬鹿なことを。そうやってウェンデル先生も騙したのか。アリティアはアカネイアに反逆を起こした国なのだぞ。なぜそのような国を助けねばならん。我がカダインはアカネイアのハーディン皇帝に忠誠を誓っているのだ。反逆者は討って当然だ」
「アリティアは反逆など起こしてはいない。おかしくなったのはハーディン皇帝の方だ」
言いがかりだと、マリクは強くエルレーンに反論した。

「言ったな、マリク。やはり、アリティア軍をカダインに攻め込ませたのもお前の手引きだったのだな。私を退けてカダインの最高司祭となる野望ばかりか、カダインをアリティアの物にしようという陰謀を張り巡らせていたのだな」

マリクの言葉に、エルレーンは勝手に疑惑を深めたようであった。

「違う。それは誤解だ」

マリクは叫んだ。

「ならば、エクスカリバーを私によこせ。あれは、私にこそふさわしい魔道書だ」

エルレーンが、マリクの持つ魔道書をさして言った。マリクを慕うシスターたちが、宝物庫から取り戻してくれた物だ。

だが、エクスカリバーやオーラのような最高位魔法は、使う者を限定する。今さらエルレーンがエクスカリバーを使おうと思っても、意味のないことである。だが彼にとっては、マリクからエクスカリバーを奪い取ることこそが重要なのだった。

「それは……」

さすがにマリクが躊躇（ちゅうちょ）する。

エルレーンが、意味を持ってエクスカリバーを使ってくれるのであればマリクは彼の言葉に従ったかもしれない。だが、彼が嫉妬で言っているだけだと分かっているため、マリクはそれに従うことはできなかった。

「やはり、そういうことなのだな。勝負だ、マリク。お前のエクスカリバーが勝つか、私のトロンが勝つか。決着をつけよう」

エルレーンが叫んだ。

エクスカリバーを継承できなかった彼は、雷系の上位魔法であるトロンの使い手として、他の追従を許さぬ者となっていた。

マリクとしても、黙ってやられるわけにはいかない。彼には、エリスを救わねばならないという使命感があった。

本意ではないにしろ、戦わなければならないと決意する。

「雷鳴は、輝く。浄化の閃光は……」

「風は光に輝かん。荒ぶる魂は……」

マリクとエルレーンは魔道書を掲げ、同時に呪文の詠唱を始めようとした。

「静寂は、心の静けさ。沈黙の霧よ、言葉をつつめ」

だが、二人よりも早く、ウェンデルの言葉が広間に響いた。その瞬間、二人の周りに白い霞のようなものが立ちこめる。周囲から音が消え去った。

声が出ないと、二人は叫んだ。その言葉が、霧に吸収されて魔道書まで届かない。これでは、魔法を使うことができなかった。

マルスたちが広間に雪崩れ込んでくる。マリクは、マルスの姿を見て声にならない声

びの声をあげた。

魔法の使えないマリクたちは無力であった。セシルが剣をエルレーンにむけ、トロンの魔道書を取り上げる。同様にして、ウェンデルがマリクからエクスカリバーの魔道書を取り上げた。エルレーンとマリクが同等の存在であることを、さりげなく伝えたかったのである。

「二人とも、控えよ。神殿内で争うとは何たること」

サイレスを解くと、ウェンデルがマリクとエルレーンを叱責した。

「ウェンデル先生。なぜここに……」

「アカネイア軍に捕らえられていたところを、マルス王子に助け出されたのだ。それよりも、エルレーン、なぜ我々を攻撃するのだ」

驚くエルレーンに、ウェンデルが問いただした。マリクが何か言いかけたが、マルスは黙っているようにと目配せした。

「どうして、ウェンデル先生が、アカネイア軍に捕らえられなければならなかったのです。それに、アリティア軍と行動をともにするなどとは……」

「その理由は、お前が一番よく知っているのではないのか。それとも、お前の目は、それも分からぬほどに曇ってしまったのか。よいか、お前は私の一番弟子であり、私の跡を継いで最高司祭となるべき者なのだ。なのに、マリクに対するいわれなき嫉妬で道を

誤ろうとしている。お前のその心の弱さを知ったからこそ、私はマリクにエクスカリバーを受け継がせたのだ。魔法は扱う人間の心によって善きものにも悪しきものにも変わるのだ。それゆえに、私はお前に知ってもらいたかったのだ。魔法に大切なものは、その魔法の持つ力ではなく、魔法を使う者の心だと。だが、お前をそこまで追いつめてしまった私にも責はある。おそらくは、そこのところをガーネフに突かれたのであろう」

ウェンデルはそう語ると、エルレーンにトロンの魔道書を手渡した。

「私の心の弱さ……」

エルレーンが繰り返した。

「そうだ。心の弱き者は魔法に魅入られて身を滅ぼしてしまう。あのガーネフのようにな。ガーネフもまた、我が師であるミロア司祭に対する嫉妬心から暗黒魔法の道へ落ちていったのだ。私は、お前にガーネフのようになってほしくはない。分かるか、エルレーン」

「それでは、ウェンデル先生の後継者を僭称するマリクが、マルス王子を扇動してアカネイアに対してアリティアの反乱を起こさせたとするハーディン皇帝の言葉は偽りだったのですか」

初めて、エルレーンがハーディンに対して疑問をいだいた。自分でも、今までなぜ盲目的にハーディンを信じ込んでいたのか不思議になる。

「エルレーンよ、今こそ偽りに惑わされることなく、その目で真実をしかと見るのだ
お前を信じる者を信じよ」

「分かりました。ウェンデル先生。すぐに戦いをやめさせます」

ウェンデルの言葉に、エルレーンは頭（こうべ）を垂れた。

「エルレーン、私を、信じてくれ」

「ああ。カダインは、アリティアに協力する」

マリクの言葉に、エルレーンはきっぱりと答えた。

ガーネフと違って彼が幸せであったのは、心が迷った時に友がそばにいてくれたことであろう。

「ところで、そのガーネフであるが、あ奴がマケドニアに現われたのではないかという疑惑がある。お前たちは何か知らないか」

ウェンデルが、二人に訊ねた。

「私は何も……」

幽閉されていたマリクが答えた。

「ガーネフかどうかは分かりませんが、ハーディン皇帝の使いと称した魔道士がやってきたことがございます。過去にも何度かカダインを訪れたことのある彼が、マリクは帝国に対して叛意をいだいている、よって拘束せよと命令していったのです。アカネイア

がアリティアへ侵攻する前日のことでございました。彼から私は、エクスカリバーの貴重さと、それを持つ者は選ばれし者だと吹きこまれたのです。彼からは、何か強い力を感じました。思えば、あれがガーネフであったのではないでしょうか」

エルレーンが、ガーネフの復活を証拠づけるような証言をした。

「もしも、本当にガーネフが復活したのであれば、その陰謀を暴かねばならん。そのようなことが分かるのは、ガトー様だけであろう。おりしもここはカダインである。私たちが力を合わせれば、氷竜神殿にいらっしゃるガトー様の心を呼び出して真実を求めることも可能であろう」

ウェンデルが決断した。すべての背後で糸を引いているのがガーネフであるならば、その真意を明らかにしなければ、対策が立てられない。彼が先の大戦でメディウスを利用して世界を我が物にしようとしたのと同様の手口で、今度はハーディンを利用しようとしているのならば、何としてもハーディンの目を覚まさせてガーネフの野望を打ち砕かねばならない。

「やろう、エルレーン。力を貸してくれ」

「ああ、マリク」

ウェンデルの弟子の二人の魔道士は、初めてその手を握り合った。

マルスは、その姿を満足そうに見守っていた。

4

カダインの大聖堂に描かれた魔方陣の四方向に、ウェンデルとマリクとエルレーン、そして先の大戦で亡くなったミロア大司祭の娘であるリンダが立った。

そばで、マルスは固唾（かたず）を呑んで魔法が行使されるのを見つめていた。

やがて、四人の魔道士たちの中央にガトーの姿が現われた。それは、中空にある見えない帳（とばり）に映し出されたように、巨大で半ば透き通ったものであった。魔道士たちの精神集中で像が結ばれていることを証明するかのように、ときどきガトーの姿が水面の影のようにゆらいだ。

「わしを呼ぶのは何者か」

長い白髯（はくぜん）に被われた口許が動き、ガトーの像が声を出した。

「私です、マルスです」

マルスが答える。ウェンデルたちは精神を集中させているため、しゃべることができないのであった。

「マルス王子か。では、ハーディンのことで私を呼び出したのだな」

ガトーが、マルスの姿を認めて言った。瞑想しているような細い目が、少し見開かれ

る。

「御明察でございます、ガトー様」

マルスは、素直に感銘を告げた。

「ハーディンは、闇のオーブに守られておる。今のままでは、そなたたちにハーディンを倒すことはできないであろう」

「闇のオーブとは、何なのですか」

以前、ちらりとウェンデルに聞いたことがあるのを思い出して、マルスが訊ねた。

「この世界には、不思議な力を秘めた五つのオーブが存在するのだ。周囲の者に勇気を与え、大地をゆるがすこともできる大地のオーブ。持つ者に命の輝きを与える命のオーブ。内なる力を解き放つ星のオーブ。邪な力を打ち消す光のオーブ。そして、光のオーブと対をなす物が、心の力を高める闇のオーブなのじゃ。闇のオーブは持つ者に勇気を与え、心の苦しみから解き放ち、望みを実現させようとする力を増幅させる。そして、戦いに際しては、相手の心を操作して、敵対心を奪う力を持っているのだ。だが、闇のオーブはその力があまりにも強大なため、人間の力では制御することができぬ。人間の持つ怒りや嘆き、ねたみや嫉妬などを増幅して、最後にはその人間の心を壊してしまうのだ。闇のオーブに取り込まれた人間は、己の欲望のためにだけ突き動く悪魔と化してしまう。ハーディンが持つ物が闇のオーブであるならば、彼は己の欲望で心を壊してし

まったのだ」

ガトーは、この世の秘宝である五つのオーブについてマルスに語って聞かせた。とりわけ、ハーディンが持つ闇のオーブについては、詳しく説明した。

「そんな……。私の知るハーディンは、そんな弱い男ではありません。まして、妬みや嫉妬などとは無縁の男です。いったい、なぜ彼がそんなことに……。彼はニーナ王妃と幸せに暮らしていたはずです」

ガトーの言葉を聞いても、まだ信じられないとマルスは悩んだ。

「王子よ、人とはそんな簡単なものではないのだ。人の心の中は、そなたのように純粋でいられるものではないのだ。そなたとて、もしシーダが……。いやいや、わしとしたことが、愚かな問いかけであった」

ガトーが、ハーディンと同じ状況に陥ったらどうするかと聞きかけてやめた。それは、人を惑わす愚問だと気がついたからである。

「いずれにしても、ハーディンが闇のオーブを持っている限り、王子たちには勝ち目はあるまい。闇のオーブに対抗できるのは、唯一光のオーブだけだ。光のオーブならば、闇のオーブの持ち主が放つ邪な波動を跳ね返すことができよう」

「では、光のオーブがあれば、ハーディンを救うことができるのでしょうか」

初めての希望の示唆に、マルスは顔を輝かせた。

「それは分からぬ。彼の心が闇に染まりきっておらねば、助かるやもしれぬ。だが、それは彼自身の問題だ。我らができることは、ハーディンを闇のオーブから解き放つために戦うことでしかない。その結果は、王子の問題ではなくハーディンの問題だ。王子よ、わしの所までくるがよい。わしの持っている光のオーブをそなたに託そう」
「本当ですか、ガトー様」
マルスは、ガトーに聞き返した。
「うむ。だが、星のオーブが砕けた今、わしは氷竜神殿を動くことができぬ。光のオーブをそなたに渡す条件は、そなた自身がわしのいるこの氷竜神殿までやってくることじゃ」
「はい。光のオーブを貸していただけるのであれば、どんなことでもいたします」
ガトーの注文に、マルスは胸を張って答えた。光のオーブが絶対に必要な物であるのならば、どんな困難もいとわないつもりであった。
「だが、それは簡単なことではないぞ。人間でこの氷竜神殿まで辿り着くことができた者はアンリただ一人。もしそなたが、真にアンリの心を受け継ぐ者であるならば、ここにやってくることもできよう。どうじゃ、そなたは、勇者アンリの道を辿る勇気があるか」
ガトーが、マルスを射抜くような視線で見つめながら訊ねた。

「はい。きっと辿り着いてみせます。ハーディンを始めとした人々を救うために、光のオーブは必要なのです」
マルスは、きっぱりと言い切った。
「よかろう。では、まずはそこから北へむかい、マーモトードの砂漠を越えてテーベの塔へ迎え。そこに、道案内の者を待たせておこう。その後は、彼に聞くがよい」
道を示すガトーの画像が大きくゆらぎ始める。ウェンデルたちの魔法が限界に近づいているのだ。
「分かりました。御助力、感謝いたします、ガトー様」
マルスが言うと、それに答えようとしたガトーの姿がすうとかき消えた。
「申し訳ありません、マルス様。もうこれが限界です」
肩で大きく息をしながらマリクが言った。
「いいや、充分だとも。初めてこの戦いに希望が見えてきた。私はテーベの塔へいくつもりだ」
「ええ。いきましょう。私もお供いたします、マルス様」
マリクが、マルスの手をとって言った。
アカネイアに占領されたアリティアを目の前にして遥か秘境へと分け入るのは心苦しかったが、マルスの決心は固かった。

アンリの道へ。

選ばれた者たちが、マルスとともにカダインを旅立っていった。

伝承3　魔道士の弟子たち

カダインとは、マーモトード砂漠の南の地に位置するオアシスに建てられた魔法学院を中心とする独立都市である。
もともとはガトーが建てた魔法学院だけがあったのだが、いつしかそこに人が集まり始め、一つの都市国家として機能するようになったものである。
カダインのすべては最高司祭と数人の高司祭による合議制で決められる。そして、彼らこそが、魔道書や杖などを生み出す力を持っている者たちでもある。
通常のファイアーなどの魔道書は、自然に存在する力を魔道書に封じることによって作られる。そのため、ある程度の力を持つ魔道士であれば、魔道書を作ることができた。
だが、オーラやエクスカリバーなどの魔道書は、特殊な宝玉の力を借りなければ作り出すことはできないのである。
また、それらの魔道書は、使う人間を限定した。それを作り出した魔道士か、その者が認めた者にしか使えなかったのである。
魔法学院、いや、魔法そのものは、大賢者ガトーによって人間にもたらされたものなのだが、多くの人々はそのことを知らなかった。

ガトーは、マムクートによって虐げられてきた人間が、より豊かに暮らせるようにと、自らの知る魔法の知識を分け与えたのである。それこそが、カダイン魔法学院の設立の理由であった。

その目論見通り、人々は大いなる知識と魔法の技によって自らの暮らしをよくしていった。気高い精神を持った賢者のみが、効果的に魔法を駆使していったのである。

だが、時間が経ち、魔法が人間の間に浸透していくにつれて、賢者の精神は薄れていった。

魔道書を売買の対象として、魔法によって個人の利益を追求する者たちが現われたのである。

ガトーはそれを悲しみ、自分が思い描いた理想とは違ってしまった魔法学院を人知れず離れていった。それ以後、ガトーの名は伝説の大賢者としてのみ残り、魔法学院の創立者としての名は人々の記憶から忘れ去られていったのである。

そのガトーの最後の弟子であったのが、ミロアとガーネフである。

若い二人は、将来を嘱望された魔道士としてガトーの許で魔法を習い、日々切磋琢磨する間柄であった。

ときおりラーマン神殿を訪れた三人は、そこに奉納されている五色の宝玉から様々な魔法の品々を作り出した。

あるときは、ガトーはミロアとともに光のオーブから人の活力を高める布地を作ったりもした。この布で触れられた相手は、布を身にまとった者の意志によって活力を送り込まれるのである。それによって、疲れも知らずに通常の倍の働きをすることができるのであった。

またあるときは、ガトーはガーネフとともに大地のオーブからボルガノンの魔道書を作った。大地に裂け目を生み出し、地の底深く眠る溶岩を地上に噴出させる炎の最上位魔法である。

他にも、彼らは命のオーブからオームの杖、星のオーブからオーラの魔道書など、様々な物を作り出した。

だが、ガトーは闇のオーブからは何も生み出そうとはしなかった。不審に思ったガーネフが訊ねると、闇のオーブは力が強すぎて魔道書などを作るには適さないとガトーは語った。ものには分相応という言葉があると、ガトーは説いた。

けれども、それほどの力ならば利用すべきだとガーネフは強く主

張した。その方が、人間のために役立つとガーネフは信じていたのである。彼は、魔法こそが世界を支える力の一つだと信じていた。

ガトーはその意見を愚かだと一蹴した。

ちょうどその頃である、魔道士たちの堕落が問題となりだしたのは。中には、暗黒司祭などと自称して、悪事を働く者も出てきた。

ガトーは人間に失望し、カダインを離れることにした。

そのときに後継者として最高司祭に任命したのがミロアである。ガトーは彼にオーラの魔道書を継承させると、いずこへともなく姿を消した。

残されたミロアはガーネフに、ともにカダインを正しい姿に戻すための努力をしようと持ちかけたが、彼は納得しなかった。自分も最高司祭の候補には挙がっており、実力から言っても後継者は間違いなく自分だと信じていたのである。

ガーネフは、自分こそが魔法によって人々を正しい道に導けると豪語したがだめであった。人々の目には、ガトーに指名され、オーラの魔道書を持ったミロアの方が正当なカダインの指導者として映ったのである。

怒りと嫉妬にかられたガーネフは、自らの力を誇示するためと、オーラに匹敵する魔法を手に入れるために、一人でラーマン神殿に赴いた。そこで、彼は闇のオーブからマフーの魔法を作り出したのである。

それは、どんな攻撃も受けつけない最高位の暗黒魔法であった。

そして、ガトーの禁を犯して闇のオーブと深く接触してしまったガーネフは、師匠の警告通りに闇のオーブに精神を取り込まれてしまったのである。そして、彼はマフーの魔道書とともに闇のオーブそのものの一部となったのであった。

そんなこととは知らないミロアは、ガーネフを信頼していた。アカネイア王の要請により、パレスに魔法学院の分校を設立しにいく時も、留守の間のカダインはガーネフに任せたほどである。だが、結果的にそれが仇（あだ）となった。ガーネフはミロアが留守の間に、側近と言える暗黒司祭たちを使ってカダインの最高司祭を僭称したのである。

そして、それを人々に認めさせるため、ひいては、アカネイア大

陸の人々すべてに自分を認めさせるために暗躍したのである。アカネイア大陸のすべてを己が手中に……。だが、その野望は闇のオーブによってねじ曲げられていったのだった。アカネイア大陸のすべてを己が手中に、しからずんば、すべてを無に……。

そして、メディウスを利用した暗黒戦争が始まったのだった。

第4章　アンリの道

1

照りつける太陽。吹きつける砂混じりの風。夜は、肌を凍えさせるほどに厳しい。
砂漠。
マルスたちにとって、決して充分とは言えない準備で縦断に乗り出したマーモトード砂漠は、それまで戦ってきたマケドニアの反乱軍やグルニアのアカネイア軍、カダインの魔法兵、そのどれよりも強敵であった。
暗黒戦争の時にテーベの塔を訪れた時は、いきも帰りもガトーの魔法によって転移されたのだった。塔の中でマルスたちはガーネフと戦い、そして、確かに彼を殺したはずであった。今回は、ガトーはマルスたちを試しているらしく、自分たちの足で砂漠を渡ってテーベの塔に辿り着かねばならない。
かつて、多くの冒険者や盗賊たちがマーモトードの砂漠にむかった。そこにはテーベと呼ばれる幻の古代都市があり、数々の古代の財宝が砂の中に埋もれていると言われていたからである。
だが、実際に財宝を見つけて帰ったという者はいなかった。それゆえ、マーモトードは死の砂漠と恐れられていたのだ。

だが、マルスたちとしても、まったくあてなく無謀な挑戦をしようとしたのではない。
彼らが出発の地としたカダインにはガトーの残した資料があり、アリティアの者たちの頭の中にはアンリの伝説が根強く残っていたのである。
――行手を阻むもの、まず死の砂漠ありき。
一般に知られているアンリ・サーガよりも細かな記述、アンリの手記とも言える物がアリティアには残っていた。幸いにも、ジェイガンがそれらの多くに触れることがあったのである。先王のコーネリアスが祖父の兄弟であるアンリを非常に尊敬し、ジェイガンを伴ってよく書庫を訪れていたのである。
アリティアに言葉として残っていたアンリの道の道程と、カダインに大まかな地図として残っていたテーベへの道。その二つが合わさって、初めて正確な道筋が分かったのである。
アンリの手記にある難所などの正確な位置が、ガトーの記した地図によって明確になったのだ。
その道筋は複雑なものであった。
仮にまっすぐテーベを目指していたら、マルスたちはあっけなく流砂や水の枯渇などで全滅していただろう。
「この道を、アンリはたった一人で踏破(とうは)したというのか」

砂と戦いながら、マルスは前進を続けた。困難が実感されるたびに、先道であるアンリの偉大さが身にしみて分かってくる。

「ええ。地竜メディウスそのものが前線に現われ、アリティアとしては戦力を割く余裕がまったくなかったとされています。アンリ様はアルテミス王女の近衛兵の一人でしたが、本来は彼も戦場を離れるわけにはいかなかったはずです。そんな時、一人の賢者がアルテミス王女の前に現われたと言います。賢者は、遙か北の氷竜神殿に、神から遣わされた剣があると告げたそうです」

「それがファルシオンというわけか。アンリは、愛するアルテミス姫を救うために、たった一人で旅立ったのだね」

マルスは、感慨深くジェイガンの言葉にうなずいた。

当時は、本来なら一兵卒であるアンリであっても戦力を損なうことはできないはずであった。事実、カルタスは賢者の言う剣を探しにいくために兵を割くことを許可しなかったのである。彼にとっては、目の前の敵であるメディウスに対抗することで精一杯であったのだ。

だが、そのままではメディウスに勝てないことも明白な事実であった。

そして、アンリは決意するのである。愛するアルテミスを救うために、あえてアルテミスのそばを離れてファルシオンを求める旅に出たいと言ったのだ。

カルタスは許可しなかったが、アルテミスが自分が全責任を負うと言うことでアンリを旅立たせた。彼女には分かっていたのである、今は離ればなれになることこそ、二人の思いを強めることになるのだと。

「今の私は、シーダのためだけに光のオーブを求めているのではない」

言ってから、マルスはシーダが今の言葉を聞かなかったかと周囲に目を走らせた。もう絶対にマルスのそばを離れないと言い張るシーダは、ミネルバ、パオラ、カチュアとともに上空を飛んでいる。

砂漠の標識となるオアシスを探すのに、彼女たちの力は大いに役立っていた。

本来なら女性はカダインに残してきたかったマルスであったが、彼女たちは聞き入れるはずもなかったのである。

特に、ミネルバという味方を得たシーダは、同じ天馬騎士としてパオラやカチュアと同列の騎士として扱ってくれと、マルスを困らせていた。

「それに、私は一人ではない。みんなで、すべての人々のためにこの道を進もう。我々みんなでアンリとなるんだ」

マルスは、ジェイガンに告げた。

「そのお言葉、後で皆にもお聞かせください」

ジェイガンに言われて、マルスは少し照れくさそうにうなずいた。

長く困難な砂漠行を経て、マルスたちはやっとテーベの塔に辿り着いた。

数日前から遙か遠くに蜃気楼（しんきろう）のように現われたまま永遠に辿り着けないかのように見えたテーベの塔であったが、ついにマルスたちは最初の目的地に到着したのである。

「これがテーベの塔か。昔はここにも都があったのだろうか」

砂の中にぽつんと建っている高き塔を見上げながら、マルスは感慨深く言った。

塔の周囲には、建物のなれの果てらしき石壁の破片や建造物の基礎らしき物も見えるが、原形をとどめていると言えるのはただ一つの塔だけであった。

「殿下、塔の陰に人影が」

ジェイガンが、塔の中に入る扉を指して言った。

見れば、一人の女性が立っている。

「ガトー様の言っていた使いの方だろう。いってみよう」

マルスは、足早に彼女の方にむかった。

見た目はシーダほどの年齢であろうか。その女性は、静かに立ったままマルスを待っていた。

「ようこそ、マルスお兄ちゃん」

「えっ、君は……」

いきなり予想もしなかった呼び方をされて、マルスは面食らって訊ねた。

「やだ。忘れちゃったの。チキだよ」
「君がチキだって!?　しばらく見ない間にずいぶん大きくなって……」
チキだと名乗る女性をしげしげと見て、マルスは困惑した。
暗黒戦争の後、チキはガトーに連れられていったはずであった。その時の容姿は、一〇歳になるかならないかの少女である。二年しか会わない間に倍近くの年になったと言われても、違和感が残るだけであった。それとも、マムクートは、短期間で大人になるのだろうか。
「それだけマルスお兄ちゃんが俺を放っておいたからだよ。淋しかったんだから」
「俺!?　本当に、君はチキなのか」
どうにもおかしいと、マルスは再び問いただした。
「ちぇっ。うまく騙せると思ったんだけどなあ。気を抜いたら、とんでもないとこでぼろが出ちまったぜ」
そう言うと、チェイニーは元の姿に戻った。若い娘から、飄々（ひょうひょう）としたいつもの若者の姿になる。
「チェイニーだったのか。たちが悪い冗談だぞ」
やっと相手の正体が分かったマルスは、少し怒って言った。
「まあまあ、ここでもう何日も待たされていたんだ。これぐらい遊んだっていいじゃな

いか。そんなに怒るなよ」
　他人に変身できる能力を持った青年が、慌ててマルスをなだめた。
「じゃあ、君がガトー様の言っていた使いなのか」
　少し驚いてマルスは訊ねた。使いが知り合いであったことには少しほっとしたのだが、チェイニーとガトーのつながりというものが今一つ呑み込めないでいた。そう言えば、アリティア軍にいた時のチェイニーが、マケドニアに当時いたガトーのところまで案内してくれたことがあった。その時からの知り合いであったのなら、なぜもっと詳しく言ってくれなかったのだろうかとマルスはいぶかしんだ。
「ああ。その通りさ。まったく、何で俺がこんなことをやらなくちゃいけないってんだろうねえ。マルスだってそう思うだろ」
　持って生まれた口の悪さと、馴れ馴れしい人懐っこさでチェイニーが言った。どうやら、彼としてはガトーに使われているのは本意ではないらしい。だから、あまり話したがらなかったのだろうというふうにマルスは考えることにした。
「なぜ、君がガトー様の使いをやっているんだ。あの後、君は弟子入りでもしたのかい」
　あらためて、マルスはちゃんとチェイニーに訊ねてみた。
「まさかあ。誰が、あんな頑固な爺さんの弟子になんかなるかよ。それよりも、砂漠を歩いてきて疲れてんだろ、塔の中に入って休みなよ。食い物とか、いろいろ用意してあ

ていった。
　マルスは全員に声をかけると、二年振りにテーベの塔の中に入っていった。

2

「まったく、ガトーも酔狂な奴だぜ。光のオーブを貸すのならば、さっさと渡してやればいいものを。マルスだってそう思うだろ」
　塔の中でくつろぎながら、チェイニーがマルスに言った。
「きっと、ガトー様には、何か考えがあるのだろう？」
　チェイニーが何かを知っているのではないかと、マルスは逆に訊ねてみた。
「別に、大して考えてるわけじゃないだろうさ。まあ、今は氷竜神殿を離れられないし、あんたの力量を見極めたいってこともあるんだろうさ。ガトーはアンリのことをえらく気に入っていたから、あんたにその面影を見てるんじゃないかなあ。そうじゃなきゃ、アンリと同じことをさせたりはしないさ」
「ちょっと待ってくれ。そうすると、アンリにファルシオンを渡した賢者というのはガ

トー様のことなのか」
長々としゃべりまくるチェイニーに、マルスは訊ねた。
「そんな酔狂なことを、他の誰がするって言うんだい」
きっぱりとチェイニーが答える。
「ガトー様とは、いったい何者なんだろう」
ぽつりと、マルスはつぶやいた。
「あれ、聞いてなかったのか。ガトーは俺やチキと同じ神竜族だよ」
ちょっと驚いたようにチェイニーが言った。彼としては、とうにマルスは知っているものと思っていたらしい。
「同じって、じゃチェイニーもマムクートなのか」
驚いて、マルスは聞き返した。神竜族は、竜族でも最高の地位にある一族だと火竜族であるバヌトゥは言っていた。チキが神竜の姿になったのは目で見て分かっていたが、ガトーや、ましてチェイニーまでもが神竜であったというのは意外であった。
「その呼び名は好きじゃない」
マルスの言葉に、チェイニーが少し憮然とした顔になる。
「マムクートって言い方は、人間たちが竜族をさげすんでつけた名前だからな」
「すまない、そんな意味があるなんて、私は知らなかったんだ」

マルスは、慌てて謝った。
「まあいいさ。マルスのことは好きだからな、許してやるよ」
尊大な態度で言うと、チェイニーがいつもの陽気な顔に戻った。
「ガトーは、神竜の長だったナーガの言いつけを守って、人間たちを見守っていたのさ。だから、メディウスが人間たちに手を出し始めたのを見て、ファルシオンを与えたり、魔法を教えたりしたんだ。まあ、俺から見れば、酔狂もいいとこなんだがな。人間なんて、放っておけばいいのに。大陸中にはびころうが、メディウスを始めとする地竜に滅ぼされようが、俺には関心はないね。おっと、勘違いしないでくれよ。俺はマルスのことは気に入ってるからな。だから、こうして手伝いにきてやってるのさ」
さすがに少し言い過ぎたかなと、チェイニーが慌てて取り繕うように言った。
「ありがとう、チェイニー。どうか力を貸してくれ。君たち竜族にとっては、人間はあまり好きになれないものかもしれないけれど、だからといって二つの種族が争う必要はないんだ」
「気にするなって」
チェイニーは、そうとだけ言った。マルスがチキと接する態度を見ていて、彼がそんな度量の狭い人間ではないことは先刻承知していたからである。
「そうそう、バヌトゥの話じゃ、マルスもこれを集めているんだってな。俺がガトーに

言われて見つけだした奴も、預けとくぜ」

そう言うと、チェイニーが星のオーブのかけらをマルスに手渡した。

「これは……。ありがとう。これで全部のかけらが揃ったことになる」

マルスは、喜んでそれを受け取った。カダインに保管されていたかけらと合わせて、ウェンデルから託された物とすべて合わせれば全部のかけらが揃ったことになる。ガトーに会うというので、今回はエルレーンとともにカダインに残ることになったウェンデルから、集めた星のオーブのかけらを預かっていたのだ。

「そりゃあ、手回しがいいな。そいつをガトーに手渡せば、星のオーブを直してくれるさ。いろいろ知りたいんだろうが、まあ細かいことはガトーに聞きなよ。明日からは、山越えだ。氷竜神殿までの道はまだまだ遠いから、充分に身体を休めておいてくれ」

チェイニーに言われて、マルスは同じことを同行の者たちに告げた。

ジェイガンを始めとする、ルーク、ロディ、マリク、バヌトゥの各人たちもその言葉に従って横になった。少し離れたところで、ミネルバたちもペガサスに守られるようにして眠りについている。シーダのそばにはリンダが眠り、セシルがシーダの護衛然としてそばについていた。

その夜、寝つけなかったマルスは、塔の上に登って周囲の風景を見回した。満天の星空の下に、マーモトードの砂漠が灰色の海のように広がっている。彼方には、北方の連

山が巨人のように立ちはだかっていた。氷竜神殿は、あの山のむこうにあるという。

アンリの道は、まだまだ果てなく続くのだ。

3

チェイニーを道案内として加えたマルスたちは、北へとむかった。テーベの塔の北で砂漠は唐突に終わり、砂に代わって険しい岩場がマルスたちを苦しめた。

数日間、自分たちの居場所もよく分からない険しい山が続く。

「やれやれ。やっと辛気くさい場所を後にできたな」

テーベを離れたことで、チェイニーの機嫌は上々であった。

「テーベは、好きじゃないのかい」

マルスは訊ねてみた。

「ああ。あそこは、竜族の都があったところだからな。昔、竜人に姿を変えた竜たちがたくさんすんでいたところだ。でも、その後の竜同士の戦争で、結界に守られたテーベの塔以外はすべて破壊されてしまった」

「竜族同士が戦争を……」

チェイニーの言葉に、マルスは驚きを隠せなかった。同時に、巨大な竜同士が戦争を

行なったのでは、町の一つが完全に破壊されたとしても不思議ではないと考えた。
「でも、どうしてそんなことになったんだい」
マルスは訊ねた。
「昔は、竜たちはのんびりと暮らしていたんだ。多少の争いはあったにしてもな。でも、ある日、突然狂ったように暴れ出す者が出始めた。それは、伝染病のように広がって、竜族は次々と野獣のように理性を失っていったんだ。長老たちは焦って原因を調べたが、答えなんか分かんなかった。ただ、竜だけに起こる先祖返りみたいな病気じゃないかってことになった。竜族は進化しきって、退化の時期になったと言う者もいたなあ。それでも、幸い竜以外の姿になれば獣にはならないということだけは分かったんだ。それで、俺たちは長老たちの力によって竜としての力を竜石に封じ込めて、当時増えだしてきた人間の姿になることを決めたんだ。実際、それしか生き延びる道はなかったからね」
「それで、君たちは、人の姿をしているし、また、竜石の力を使って元の姿になることもできるんだ。君が姿を変えられるのも、その力によるものなんだね」
マルスは、チェイニーの不思議の一面が分かった気がして、納得した顔になった。
「あくまで一時的だけどな。ずっと竜の姿でいたら、結局は退化しちまうからな。で、竜の中には、人の姿になることを嫌がった者たちもいた。結局、奴らは考える力を失って野生化しちまったけどな。ただ、それですめばよかったんだが、野生化した竜たちは

人間を始めとする他の生き物たちを無差別に殺しだしたんだ。このままじゃアカネイア大陸から生き物がいなくなると考えた神竜族の長老であるナーガは、野生化した竜たちと戦うことを決めた。その結果、都は破壊され、多くの竜たちが死んだんだ」
「じゃあ、神話に出てくるナーガ神というのは、神竜のことだったんだね。私たちは、君たちの一族に救われたんだ」
チェイニーの話を聞いたマルスは、人間の間に伝わるナーガ神話の真実をかいま見た。
「ああ、お節介なことにな。でもまあ、それはそれで仕方なかったことなんだろう。でも、俺はなんか嫌になってね、神竜石は捨てちまった。それでも、竜族の力は魔法という形でガトーのようにちょっぴり残ってるけどもな」
やがて道は険しくなり、さすがに二人もおしゃべりはやめて黙々と山を登っていった。かなり進んだところで、全員の顔に玉の汗が浮かんでくる。山登りで疲れたせいではない、気温が高くなっているのだ。
「この暑さは異常ですね」
汗を拭き拭きマリクが言った。
「ここは火竜の墓場に近い。火山の熱で、大地が熱されているのだよ」
バヌトゥが答えた。
「ここはもうフレイムバレルだからな。バヌトゥの言う通り火竜の墓場が近いのさ。な

あ、バヌトゥ、お前さんはここに残るかい」
「まだわしには早い」
チェイニーの軽口に、バヌトゥが憮然と答えた。
「どういうところなんだ」
「文字通り、寿命の尽きた火竜が、死ぬために集まってくる場所さ」
マルスの問いにチェイニーが答えた。そういう意味であるならば、先程バヌトゥにむかって言った言葉は、あまり品のいいものではない。
「だが、そういう場所であるならば、ここには火竜がいるのか」
「ああ。融通の利かない、獣のような奴らがな。ここの他にも、氷竜神殿には氷竜が、飛竜の谷には飛竜が天寿を全うしようと巣食っている。他にも、竜の祭壇には地竜が封じ込められているんだぜ」
「それは少しやっかいですな。この人数では、竜と戦うのは不利です」
「そうだな。なるべく竜たちに見つからないですむ道をいこう。チェイニー、頼むよ」
マルスの言葉に、チェイニーがうなずいた。
溶岩が川となって谷底を流れる火竜の谷を、マルスたちは慎重に進んでいった。シーダたちは、熱でペガサスがやられないように注意しながら、チェイニーに指定された場所に先回りした。

谷のそこここには、火竜の物であろう巨大な骨が散乱している。それどころか、まだ生きている火竜たちの姿も随所に見られた。マルスたちは彼らに見つからないように注意しながら、火竜の谷を進んでいった。

だが、あちこちにいる竜たちを完全に避けて進むのは不可能であった。後少しで谷を抜けるというときに、数匹の火竜がマルスたちの前に立ちふさがった。

「ここは、わしがなんとかする」

バヌトゥが、素早く火竜石を取り出して火竜の姿となった。そのまま、立ちふさがる竜たちに突き進んでいく。

突然現われた同族に驚いていた竜たちであったが、先頭の竜がバヌトゥに体当たりされるのを見て、これは敵だと認識したようだ。

炎を吐いて敵の火竜の皮膚を少し焦がすと、バヌトゥがその首に嚙みついてすぐ横に引きずり倒した。

もんどりうった火竜が、腹を見せて倒れ込む。

「今だ」

マリクとリンダが飛び出した。

「白き貴婦人よ、冷たき御手(みて)は荒ぶる者の魂を鎮める。吹き荒れよ、氷雪の嵐！」

二人が、同時にブリザードの魔法を放つ。

魔道書から立ち上った魔文字が、空中に白い魔方陣を二つ描き出した。そこからほとばしった冷気の嵐が、倒れている火竜をつつみ込む。

あっという間に火竜の巨体が白い霜に覆われ、かちかちに凍りついていった。

そこへ、別の火竜と組み合ったバヌトゥがやってくる。肉弾戦を繰り広げる二頭の火竜によって、凍りついた火竜の身体が、ばらばらに踏み砕かれた。

見事な連携を見せて、バヌトゥとマリクたちが火竜を一匹ずつ確実に倒していく。

「あれで、最後だ」

マリクが、ブリザードを放った。魔力を使い切った魔道書が、彼の手の中でぼろぼろと崩れていく。

バヌトゥが、尾の一振りで半分凍りついた火竜を叩き飛ばした。

「よし、今だ。谷を抜けるぞ」

マルスは、隠れていた兵たちに命令した。

今の戦いの音を聞きつけて、いつ他の火竜たちがやってくるかも分からない。火竜に致命傷を与えられるブリザードの魔道書をマリクが使い切った今、これ以上ここにとどまるのは危険であった。

バヌトゥが見守る中、マルスたちは先ほど倒れた火竜の横を走り抜けようとした。

その時、死んだと思われた火竜が突然起き上がった。

「急げ！」
マルスは、立ち止まると叫んだ。
火竜が、炎を滴らせながら顎を大きく開いた。
バヌトゥが、すぐさま火竜の頭に噛みついて上をむかせる。牙が目を噛み潰し、火竜が悲鳴をあげた。吹き出された炎が、上空に火柱となって立ち上る。
マルスは、ドラゴンキラーの剣を両手に握り締めると、無防備にむき出された火竜の胸に、その剣を突き立てた。
バヌトゥに噛みつかれたままの火竜の前足が、だらんと下に垂れる。
「もういい。バヌトゥも早く」
火竜のそばから逃げ出して、マルスは叫んだ。そのまま、一目散に谷の出口へとむかう。
遠くから、別の火竜たちの咆哮が聞こえる。新手が来る前にと、バヌトゥがマルスとともに仕留めた火竜の死体で谷の出口をふさいだ。時間稼ぎの壁ぐらいにはなるだろう。
火竜たちの追撃を恐れたマルスたちは、急いで火竜の谷を離れていった。だが、火竜たちは追ってはこなかった。ただ、谷の中から、哀惜とも怒りともつかない咆哮が聞こえるだけであった。

火竜の谷から道は東に折れ、まさに北方の山地を横断する形でマルスたちは進んでいった。
道は獣道(けものみち)でさえ見あたらず、まさに人跡未踏の地がマルスたちの前に広がっていた。
さらに、北西に進むほどに山は険しくなり、気温もまた低くなっていった。吐く息が白くなると同時に、所々に雪が見られるようになる。やがて、マルスたちは本格的に雪の中を進むようになった。
氷竜の神殿と言うからには、寒くなったということは目的地に近づいたのだろう。テーベを出発してから、すでにかなりの日数が経っていた。マルスは、エルレーンやカインとともにカダインに残してきた兵士のことや、アカネイアに占領されたままのアリティアの国民のことを心配して心を痛めた。それ以外にも、消息の分からない姉のエリスや、マケドニアのマリアやレナのことも気がかりでならない。
一刻も早く光のオーブを手に入れたい心を抑えながら、マルスはひたすら先を急いだ。その一歩が、一秒でも早く人々を助けられると信じて。
「マルス、見てみろ、氷竜神殿だ」
雪の中を数日進んだある日、突然チェイニーが言った。
「ついに、氷竜神殿に着いたのか」
興奮したマルスは、山の稜線に立って前方を見据えた。

山間の開けた場所に同心円状に湖があり、その中央に氷竜神殿の姿があった。白亜の神殿は、静かにマルスたちを待ち続けている。
「気をつけろ。神殿の周囲には野生化した氷竜たちがすんでいる」
「私が様子を見にいってきます」
すかさず、シーダが先行した。マルスとチェイニーの止める余裕もない。
神殿の周りには、何者もいないように見えた。
だが、次の瞬間、雪原の何カ所かが盛り上がった。蛇のような姿をした氷竜が一斉に鎌首を持ち上げる。白い姿の氷竜は、雪の中に隠れていて今まで姿が見えなかったのであろう。
慌ててシーダが戻ってきた。
「起こしちまったか。どのみち、奴らは俺たちに気づいただろうがな。マルス、あの氷竜たちは俺やバヌトゥたちとは違う。火竜の谷の火竜と同じように完全に野生化した奴らだ。自分の身を守るのに、躊躇はするなよ」
チェイニーがマルスに釘を刺した。
「分かった。何としてでも氷竜神殿に辿り着いてみせる」
まるでその声が聞こえたかのように、神殿の周りの氷竜たちは一斉に咆哮をあげた。
神殿を中心として、まるで突然白い林が誕生したかのように、氷竜たちが次々と姿を

現わしていった。
マルスたちの姿を認めると、まるで水面を渡る水蛇のように、氷竜たちが雪原を移動し始めた。長い身体をくねらせながら雪原の上を滑り、ある時は雪の中に半ば潜っては再び勢いよく飛び出したりした。
「まともに戦っては勝ち目はありません。ここは火の魔法で氷竜を牽制しつつ、氷竜神殿に逃げ込みましょう」
ジェイガンが、マルスに進言した。
「だが、この雪の中では、こちらも身動きがとれないだろう」
「ならば、わしの背に乗るがいい。雪を溶かしながら進めば、人間よりも速く進めるだろう」
バヌトゥが、マルスに言った。
「よし、今はバヌトゥに頼らせてもらおう」
マルスは決断すると、火竜に姿を変えたバヌトゥの背にみんなで乗り込んだ。ミネルバたちは、飛竜やペガサスで上空から彼らを援護するために飛び上がった。
「いくぞ、みんな」
マルスは叫んだ。
白い雪の中に、バヌトゥが足を踏み入れた。ジュウという音とともに、火竜の足下に白

い煙が立つ。瞬間痛そうに顔をしかめたバヌトゥは、大きく息を吸い込むと火炎を噴き出した。雪原が、炎の通ったところだけ溶けて地肌が現われる。バヌトゥは、満足したように、雪のなくなった場所を歩き始めた。

「マリク、くるぞ」

近づいてきた氷竜を見て、マルスが叫んだ。

「烈なりし秘めたる炎よ。灼熱の怒りは敵を焼き尽くさん。ほとばしれ、大地の息吹よ！」

すかさず、マリクがボルガノンの呪文を唱える。

深紅に輝く魔方陣が、氷竜のいる雪原の上に現われた。次の瞬間、氷竜の下の地面が割れ、灼熱の溶岩が吹き出した。直撃を受けた氷竜が、身体の中程を焼き千切られ、雪原の上をのたうちながら絶命した。彼の後に続いていた氷竜たちが、それを見て慌てて後退する。

その間に、バヌトゥは氷竜神殿目指して突き進んでいった。

まだくすぶる炎を避けて、気を取り直した氷竜たちがバヌトゥの後を追う。

「聖なるかな正しき心。闇は千々(ちぢ)に己が罪にて消え去らん。輝け、浄化の光輝よ！」

リンダがオーラの呪文を唱えた。バヌトゥの背に仁王立ちになった彼女の長衣(ローブ)の裾が、魔法によって起こった力場と雪原を渡る風によって激しくはためいて素足を露(あらわ)にする。



黄金の魔方陣が先頭を進む氷竜の下に現われ、光の柱が氷竜をつつんでその身体を分解した。

ミネルバたちも、氷竜の吐き出す冷気を上手に避けながら、果敢に手槍を投げつけて彼らがマルスたちに追いつけないように戦っている。

小高い丘に立つ氷竜神殿に、マルスたちは今一歩のところまで近づいた。だが、丘の斜面を這い上がるようにして、生き残った氷竜たちが追いすがってくる。彼らは本能だけで、彼らの元の住まいであった氷竜神殿に近づく者を退けようとしているのである。

「リンダ、一気に氷竜を押し返すぞ」

「はい、マリク様」

リンダを呼びよせると、マリクがボルガノンの魔道書を掲げた。

「烈なりし秘めたる炎よ。灼熱の怒りは敵を焼き尽くさん。ほとばしれ、大地の息吹よ！」

呪文を唱えて魔法を発動させると、素早く魔道書をリンダに手渡す。

「烈なりし秘めたる炎よ。灼熱の怒りは敵を焼き尽くさん。ほとばしれ、大地の息吹よ！」

続けて、リンダが呪文を唱えた。

マリクの魔法とリンダの魔法が、同じ場所に重なり合って発動する。

ほとばしる溶岩は、雪を溶かしながら斜面を下っていった。

斜面を登っていた氷竜たちは、突然上から流れ落ちてきた溶岩に焼かれて恐慌をきた

した。周りの仲間を巻き込んで無茶苦茶に暴れ回る。
「今だ、氷竜神殿に逃げ込め!!」
マルスは叫んだ……。

【～紋章の謎・下～に続く】

後書き

「紋章の謎」、第二巻をお届けします。
今回は、ゲームでは第二部の前半部のところまでとなります。
さてさて、なんだかんだといって、ファイアーエムブレムとは二年近いつきあいになってしまいましたねえ。複数のエムブレムシリーズのノベライズをやったのは、私が初めてになるのではないでしょうか。コミックでは、先例があるような気もしますが。
まして、「トラキア776」のときは、ちゃっかりと「聖戦の系譜」を取り込んでいますし、今回も「紋章の謎」でありながら、「暗黒竜と光の剣」や、「アカネイア戦記」や、「外伝」のエピソードも取り込んでいますからねえ。一応、全ファイアーエムブレムに言及したのは私だけだぞって胸を張って言えるかも。
でも、コミックと違って小説の方は、あまりネットなどでは話題になりませんねえ。圧倒的に、コミックの話題ばっかりです。
もう少し小説にも言及してくれると、過去のエムブレムのノベライズを担当した何人もの方を含めて嬉しいです。

私の場合、結構インターネットで情報収集とかしていますので。人名辞典とか、解説とかはかなり参考にさせていただきました。

長い期間携わったおかげで、いろいろな出会いもあって楽しかったです（いや、まだ第三巻が残っているから、終わったわけではないんですが）。

トラキアワインなんかも、前作の「トラキア776」の時の読者との打ち上げOFFのようなもので飲ましていただきましたし。無茶苦茶安い値段の割には、結構飲みやすいワインでした。

きっと、トラちゃんは薄利多売で儲けようとしてるんだろうけれど、やっぱり商売が下手なんでトラキアは貧乏なんだろうねえ。などという現実と創作の世界がごっちゃになった感覚を楽しみましたです。

こういう遊びというのは、やはり面白いですねえ。

特に、私は白ワインは好きなので、トラキアワインというのは結構喜んでました。これが、アカネイアのガルダあたりだと、きっと特産はラム酒なんでしょうねえ。

とりあえず、リーフもマルスも未成年ですからお酒は飲めませんが……って、確か二人とも物語の終わりでは成人しているのかもしれませんが。結婚もしていることだし。でも、二人とも、幼馴染みという一番手近ですましてしまっているところが何とも。これが、「聖戦の系譜」だと、誰でもOKという一部女性ユーザーが血で血を洗う婿出し

合戦（嫁入り合戦？玉の輿合戦？）になるのでしょうけれど。そういう意味では、「聖戦の系譜」がある意味、一番シビアで厳しい世界なのでしょうか。敵はロプトでもメディウスでもなく、自軍の異性キャラなわけですから。

私の作品の場合、メーカー設定とオリジナル設定が混在しているので、できあがったものが裏設定なのか創作なのかすでに区別のつかないものになってしまっています。エーヴェルとリーフの出会いのシーンなども、オリジナルで土砂降りにしたのですが、もろ同じシチュエーションで創作を書いている人とかもいるようです。もっとも、やはり、運命的な出会いの時は土砂降りの雨の中、雷鳴がとどろき……というのは、シェイクスピア以来のお約束ですから、被って当然なんですけれどもね。

そう言えば、アリオーン×イシュタルの話題が増えたのは小説の影響ではないかとの指摘を受けたりしたのですが（ゲームでは接点という接点はほとんどないし、過去そういうカップリングはほとんどなかったらしい）、本当だったら、小説家冥利に尽きますね。ノベライズの場合、みんなで楽しめるネタが提供できれば、それはそれで一つの価値になりますから。

実際、あの後アリオーンがイシュタルの遺体を水葬にするシーンというのも、結構幻想的で美しく書けるのですが、イシュタルがぎりぎりで助かってアリオーンとディーン

に山の中で養われているという話も捨てがたいですね。しがらみがなくなったイシュタルはかわいいでしょうし。でも、勝手にユリウスの墓とか森の中に作って、花とかあげたりしているんだろうなあ。この辺、三人とも距離をおいた不思議な関係になるだろうから、いろいろと想像（妄想）すると面白いかも。

パラレルな結末として書いてみようかなあ。どのみち、「二つの槍」で書いた短編程度の長さでしょうから、暇なときに書けそうですし。あ、でも発表する機会がないや。それだと、また読みたいと恨まれてしまいますね。なかったことにしておきます。

基本的に、裏設定というのはあくまでも裏設定でしかないわけで、ゲーム中で語られないことはたとえメーカーや作者が別媒体で語ったとしても、それはユーザーにとっては白紙のままだと思っています。気に入らなければ、ユーザーの好きな設定に変えてしまうのは、個人のレベルではありありだと考えていますから。ただし、それはその人だけの世界であるので、他人に強要することは絶対にいけないことですが。

「紋章の謎」においても、メーカーの裏設定と呼べる物はすべて拾い集めて、物語の中に詰め込んでいます。だから、「BSアカネイア戦記」や「外伝」の内容まで言及しているのですね。ただし、実際にこれらを突き詰めると矛盾だらけになるので、その辺は小説として都合よく手を替え品を替えという形で取り込んでいます。

普通、カシムやリカードなんか、ばっさりと切り捨てられるキャラですからねえ。け

れども、逆にそうであるから、弓兵Aとか、盗賊Bとかのエキストラですむシーンで、彼らは活躍できるわけです。

今回は、シリウス君がどうして助かったかとか、オーブや三種の神器の誕生の秘密のようなところは、楽しんで新規に設定を起こしています。

どちらかというと、悪役がスポットライトを浴びていますかねえ。

できれば、ゲームでは単なるやられキャラでしかなかったメディウス君は、ちゃんと描いてあげたいです。

結局、好きに解釈させるというスタンスはとりますが、ユーザーがこういう結末がいいとか、こういう設定に違いないと考えているのと同等に、一作者として自分の中では常に物語の答えは一つ用意しています。そうでないと、あまりに曖昧になってしまいますから。よく、ユーザーに好きに考えてもらうために設定はしてませんという言い方がありますが、まあ、インタビューなどではお決まりの台詞なのでいいとしても、個人的には好きではないです。それで矛盾がなければいいのですが、そういった創作物は滅多にないですから。設定しないことによって矛盾が出るのならば、それはミスだと考えています。

原則としては、アリオーンの行く末や、サラのその後、フィンの冒険のすべてや、ミ

ランダの駆け落ちの結末、そして、シーダの母親の話や、カミュの恋の行方などなど、大まかにはちゃんと設定してあります。あくまでも、私的にということですが。そうでないと、微妙な台詞回しなどが絶対にできませんから。カチュアがマルスに何か言う時なども、結構気を遣って言葉を選んでいます。

まあ、その上で、設定したことは類推はできても決定はできないように書いています。独自に作ったミランダの駆け落ち話など、そこからユーザーの妄想が広がってとんでもない結末に辿り着いたりしています。とても面白いので、小話としてはいいかなあという程度ですが。

それを小説に反映させるかどうかは、第三巻をお楽しみにということで。いや、あおっておいて、まったく書かないかもしれませんので、つっこみはしないでくださいましね。たぶん、よほどの深読みしないと分からないように塗り込むでしょうから。今までの五冊にも、よほど細かくチェックしないと分からないような小ネタは、随所に隠してありますし。暇でしたら、探してみてください。

まあ、盗賊つながりと言うことで、よしなに。

エムブレムのシリーズでは、キャラクターは全員登場させるというスタンスの下、本当に設定上の名前だけのキャラまでほとんど出すという偉業（愚行だろうなあ）を達成

しているわけですが、誰が好きかというと、やっぱりトラちゃんですかねえ。やはり、男たる者、野心の一つぐらい持たねば。あれで、最初からレンスターとかを手に入れていたら、ロプトがはびこる前に大陸全土を占領してたりして。

後は、「トラキア776」だとサラとイシュタルですかねえ。御贔屓（ひいき）です。

さて、では、「紋章の謎」での御贔屓はというと、やはりシーダとチキちゃんでしょうか。ミネルバと三姉妹、ドーガとマリク、そしてリンダも捨てがたいです。後はメディウスですか。

シーダに関しては、第一巻の表紙と口絵イラストで「シーダの太腿がぁ〜」と叫んでいる読者がかなりいたのですが、日野先生は今後もシーダ＝太腿路線でいかれるのでしょうか。

いや、日野先生というのは、ぶっとい線、むきむきの身体という、少年漫画だぜぇいという王道を手押し車（なぜ？）持って突っ走っているような方なのですが。これが、女性を描かせるとかわいいんですよね。でも、身体が筋肉に……。

毎回、担当さんにもっと細くと言われているらしいです。今度は、スレンダーな美人でも描いてもらいたいですねえ。ああ、そうか、チキちゃんならぺったんこだから、筋肉のつけようがあるまい。頑張ってね、日野先生。ちなみに、チェイニーが化けた成長版だと、むちむちに描くだろうからだめよん。

いや、絵柄からすると、むさいおっさんのような日野慎之助！（やはり、びっくりマークをつけなければ。本当にこういう筆名に改名したら楽しいのですが。いえ、個人的に）先生ですが、現物は意外とシャイな好青年です。人のことをずっと女性だと思ってにこにこしていたようで、真実を知って奈落に落ちたようですが、彼女持ちには同情の余地はありませんのでそのまま埋めてしまいましょう。

竜が好き、でも馬は嫌いと叫んでおられるので、やたらペガサスのシーンを多くしてイラスト描かせようとしているのは内緒です。

でも、本当にかわいい女性キャラが描けるので、密かに日野先生に少女漫画を描かせる計画推進委員会を設立しようと暗躍しております。ふふふふふ。

何だか、こんなにネタにしていると、後で後書き漫画が恐ろしいような気がしますが、気にしないことにしましょう。

篠崎　砂美


FIRE EMBLEM 紋章の謎 上 《あとがき》
紋章の謎・日野君の謎
篠崎先生と担当Mさんとあと、ひとにぎりのコアなあとがきファンのアツイ要望に答え今夜(?)ココに復活!!
日野君(かぜっぴき)
とりあえずシーダ。
篠崎さんはいった。私は"かわいい女性キャラが描ける"のだと。
なのになぜ男ばかりを描いとるのか!?


つまり こういう事なんです…。
シャラ゛
シャラ゛
こん…な感じで
むぅ…?
いいのかナ…?
ガッ
ガッ
ガガッ
コレだ!!
(原因・オレ)
突然ですが、今回のモノクロ1枚目、本当は"マルス+マリーシア"のシーンでしたが、事情(?)により"ジェイガン+ロレンズ"となってしまった事を深くお詫び致します…。
注)事情が何であるかは追求しないように!
この人が描けませんでした。
あともう一つの原因…。
あっMさん
はい日野です
次の本で描いて頂くキャラなんですが…
(原因2 担当の好み)
…とノるオレ。
おー
シブイスねー


今回描けなかった人達
なるべく多くのキャラクターを…という篠崎先生の心意気に便乗してこちらも三人描いてみました。
ドーガ
ハーディン
マリク
篠崎さんもがんばってるんだ
俺もがんばってミんっ？
篠崎さんが消えました！
失踪か!?
↑Mさん
訳あって今温泉にいるとメールが…
むしろカッコ良かったです。
エムブレムは人気キャラ大勢で大変なのですが、下巻も力を合わせてがんばりますのでどうかよろしく！
——では。
From 日野.

■ご意見、ご感想をお寄せください。

ファンレターの宛て先
〒154-8528 東京都世田谷区若林1-18-10
株式会社エンターブレイン　メディアミックス書籍部
篠崎砂美　先生
日野慎之助先生

■ファミ通文庫の最新情報はこちらで。

エンターブレインホームページ
http://www.enterbrain.co.jp/

ファミ通文庫

ファイアーエムブレム　紋章の謎～紋章の謎・上～

二〇〇一年一月一日　初版発行

著　者　篠崎砂美
発行人　浜村弘一
編集人　青柳昌行
発行所　株式会社エンターブレイン
〒一五四-八五二八　東京都世田谷区若林一-一八-一〇
電話　〇三(五四三三)七八五〇(営業局)
編　集　メディアミックス書籍部
担　当　宮地千里
デザイン　仲童舎、スタジオ百哩
写植・製版　株式会社パンアート
印　刷　凸版印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

ISBN4-7577-0278-7

第三回　ファミ通エンタテインメント大賞

えんため大賞
【Famitsu Entertainment Awards】

主催：株式会社エンターブレイン　後援・協賛：学校法人東放学園



賞金総額 1000万円

応募締め切り 平成13年3月31日(当日消印有効)

あて先 〒154-8528
東京都世田谷区若林1-18-10
株式会社エンターブレイン
ファミ通エンタテインメント大賞事務局 各部門係

ファミ通エンタテインメント大賞（1名）　総額500万円

正賞＋副賞賞金400万円＋部門賞賞金100万円
※各部門の最優秀賞の中から選出されます。

コミック部門
最優秀賞（1名）　正賞+副賞賞金100万円

小説部門
最優秀賞（1名）　正賞+副賞賞金100万円

イラスト部門
最優秀賞（1名）　正賞+副賞賞金100万円

ドラマ企画書部門
最優秀賞（1名）　正賞+副賞賞金100万円

各部門入賞・佳作他（若千名）
合計で200万円　※各部門より、上記の賞が選出される場合があります。

選考委員　著名作家陣を予定

応募方法の詳細は月刊コミックビーム、月刊ファミ通ブロスに毎月掲載されております。第三回より応募規定に一部変更があります。応募の際は必ず上記誌面または、エンターブレインHPをごらんください。

問い合わせ先　03-5433-7883（受付日時　12時〜19時　祝日をのぞく月〜金曜）
http://www.enterbrain.co.jp/

篠崎砂美の著作リスト

ブレイクーエイジ
戦士たちの夏
Fighters in Summer grand Battle 2005

ブレイクーエイジ
戦士たちの秋
The hide-behind of the fighter 2009

アーマード・コア
～ザ・フェイク・イリュージョンズ～

アーマード・コア
～マスターオブアリーナ～

ファイアーエムブレム トラキア776①
～王都解放～

ファイアーエムブレム トラキア776②
～誓いの剣～

ファイアーエムブレム トラキア776③
～二つの槍～

ファイアーエムブレム紋章の謎
～暗黒竜と光の剣～

ファイアーエムブレム紋章の謎
～紋章の謎・上～

ファイアーエムブレム紋章の謎
～紋章の謎・下～
(2001年1月20日発売予定)

9784757702783

1920193006407

ISBN4-7577-0278-7

C0193 ¥640E

定価 本体640円 +税

発行○エンタープレイン

アカネイア暦４９０年、竜族によって建国されたドルーア帝国の侵略を受け、アリティア王国は滅亡する。しかし、ただひとり残された王子・マルスは解放軍を蜂起し、遂にはドルーア帝国を滅亡へと導くのだった……。しかし、平和は永遠には続かなかった。後の世、〝英雄戦争〟と呼ばれることになる大きな戦いのうねりが、マルスと彼の仲間たちを飲み込もうとしていたのだ!?

人気シミュレーションＲＰＧシリーズの原点が、上下巻で登場!!

下巻は２００１年１月発売予定。

FB
Famitsu Bunko